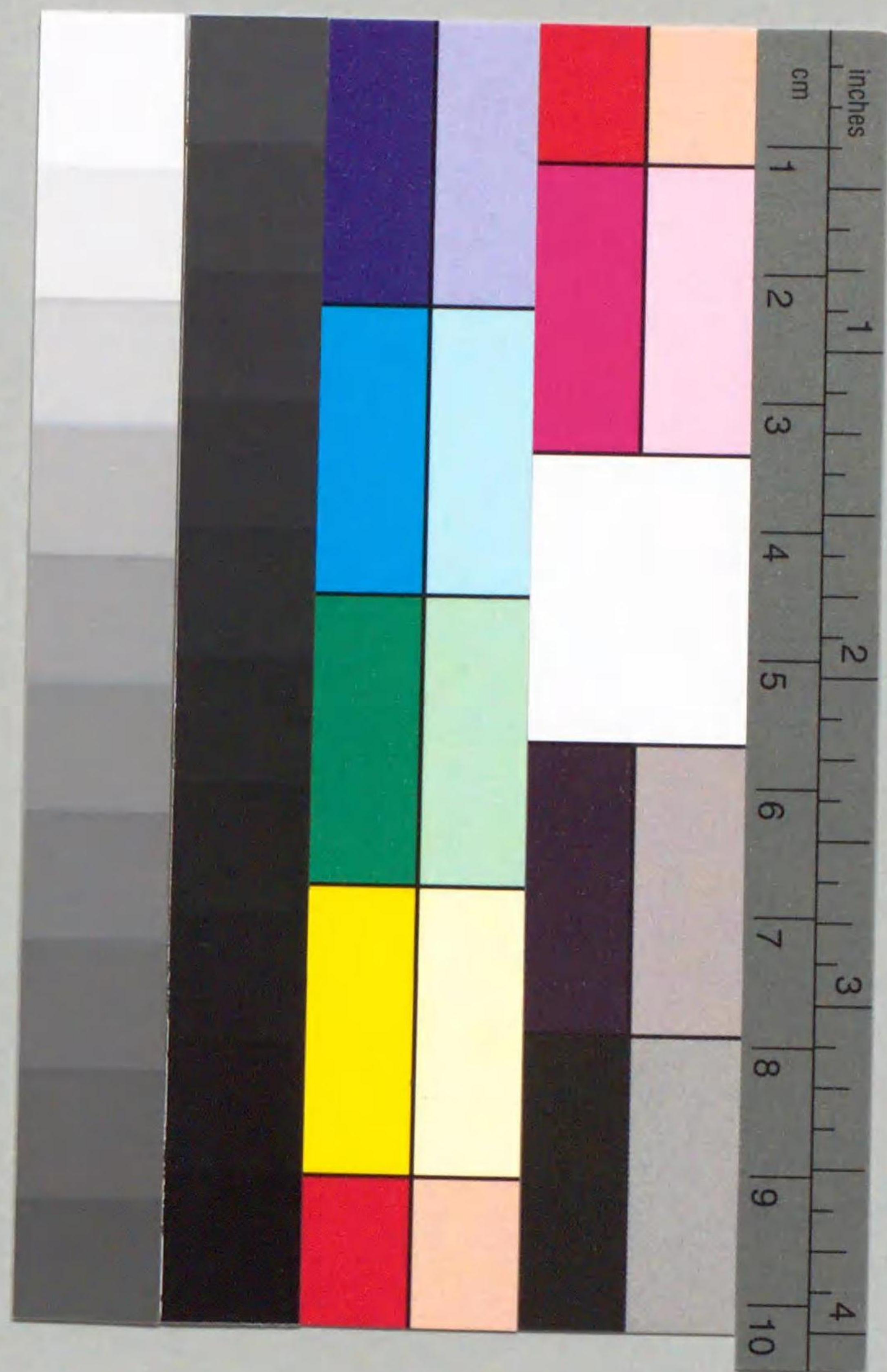
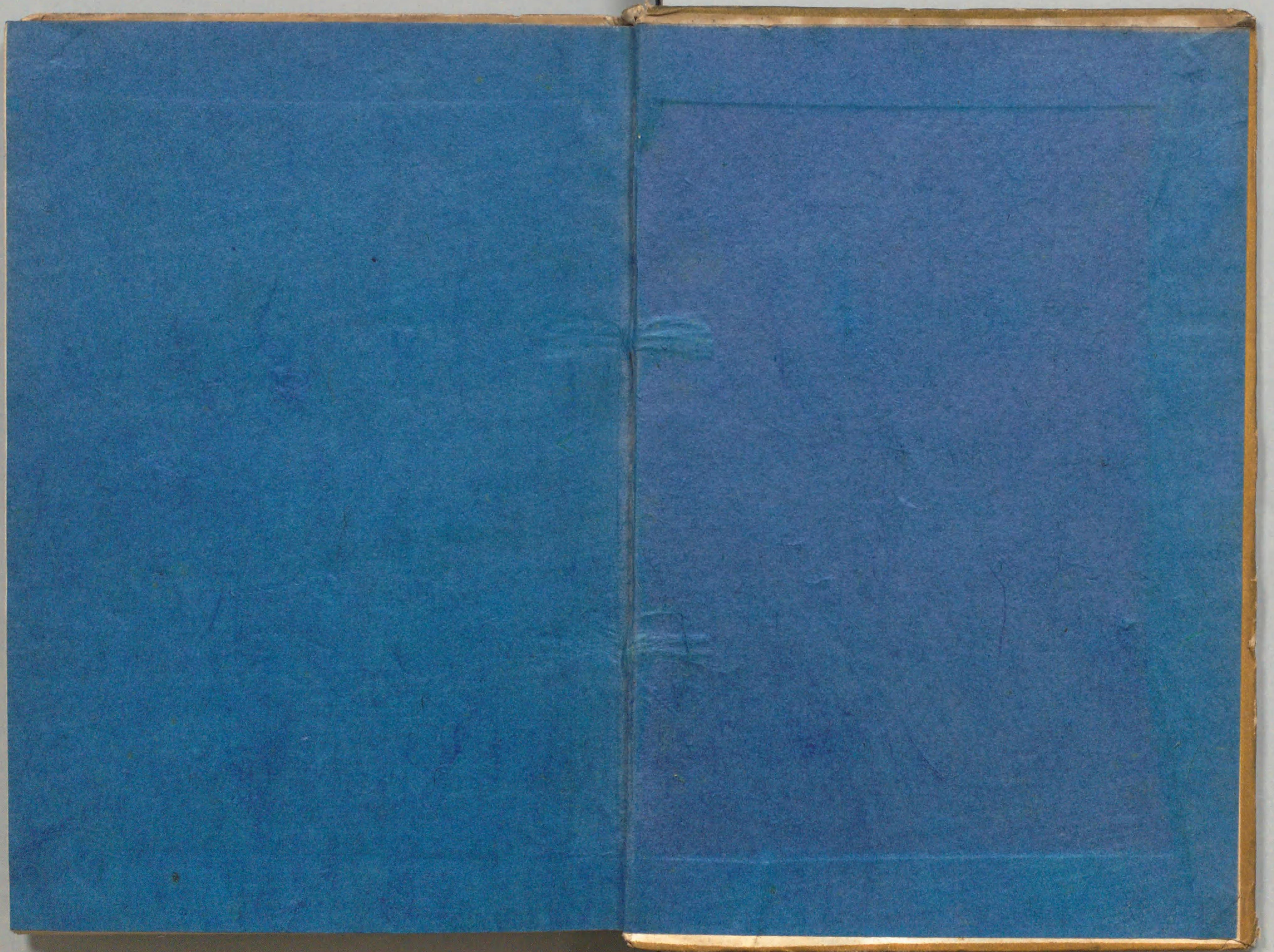


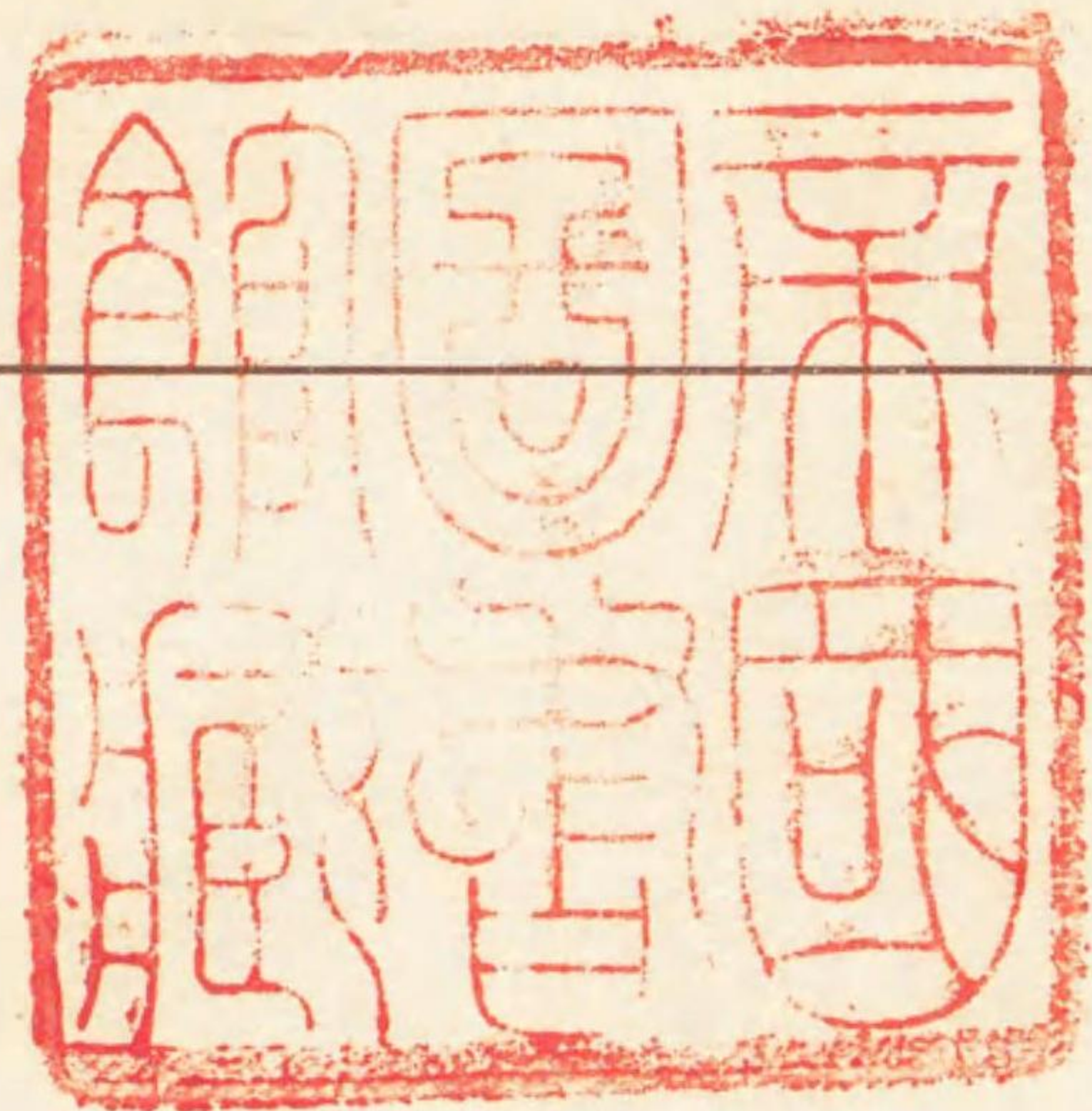
乃木希典

碧瑠璃園着



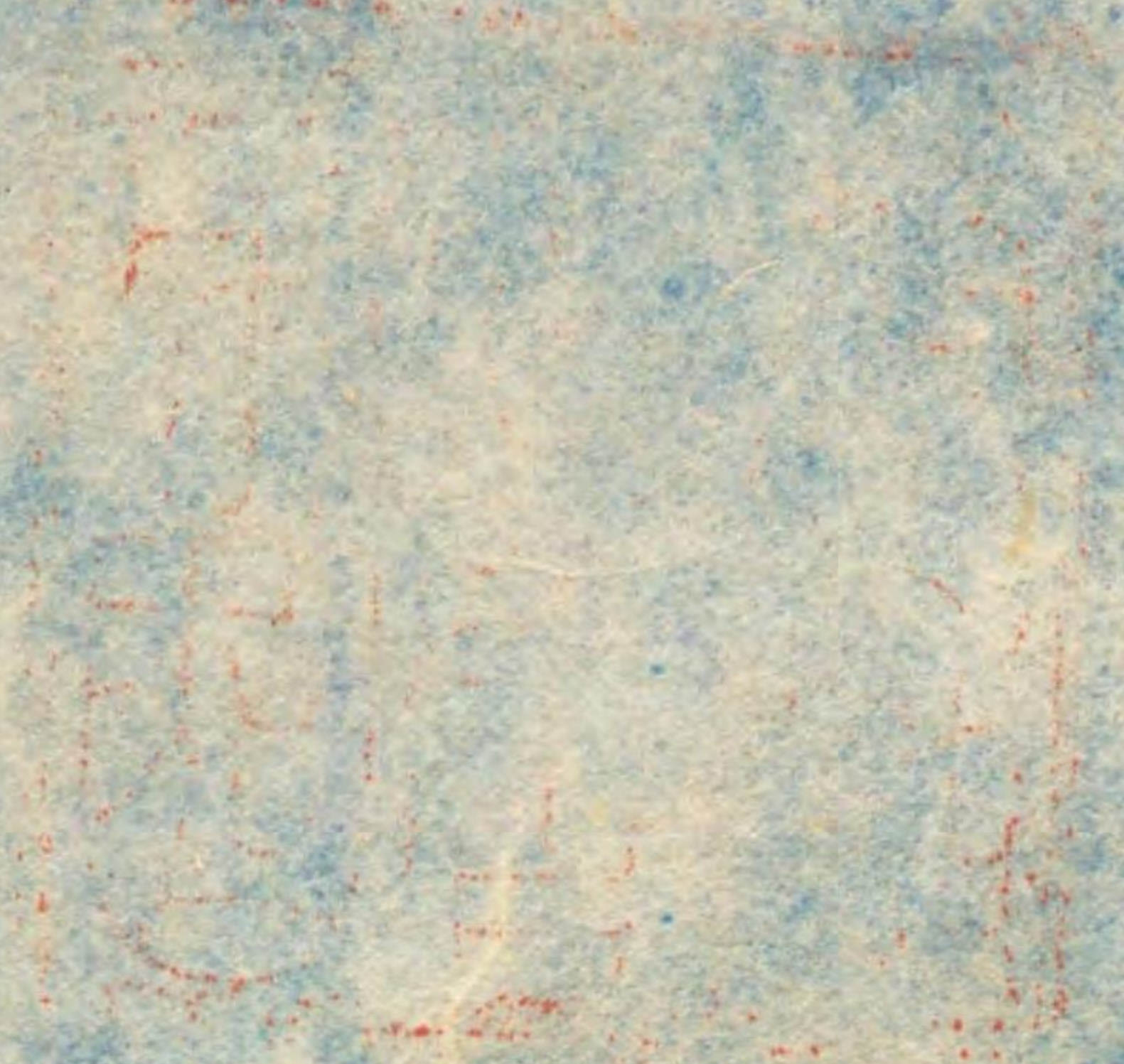


乃木希典

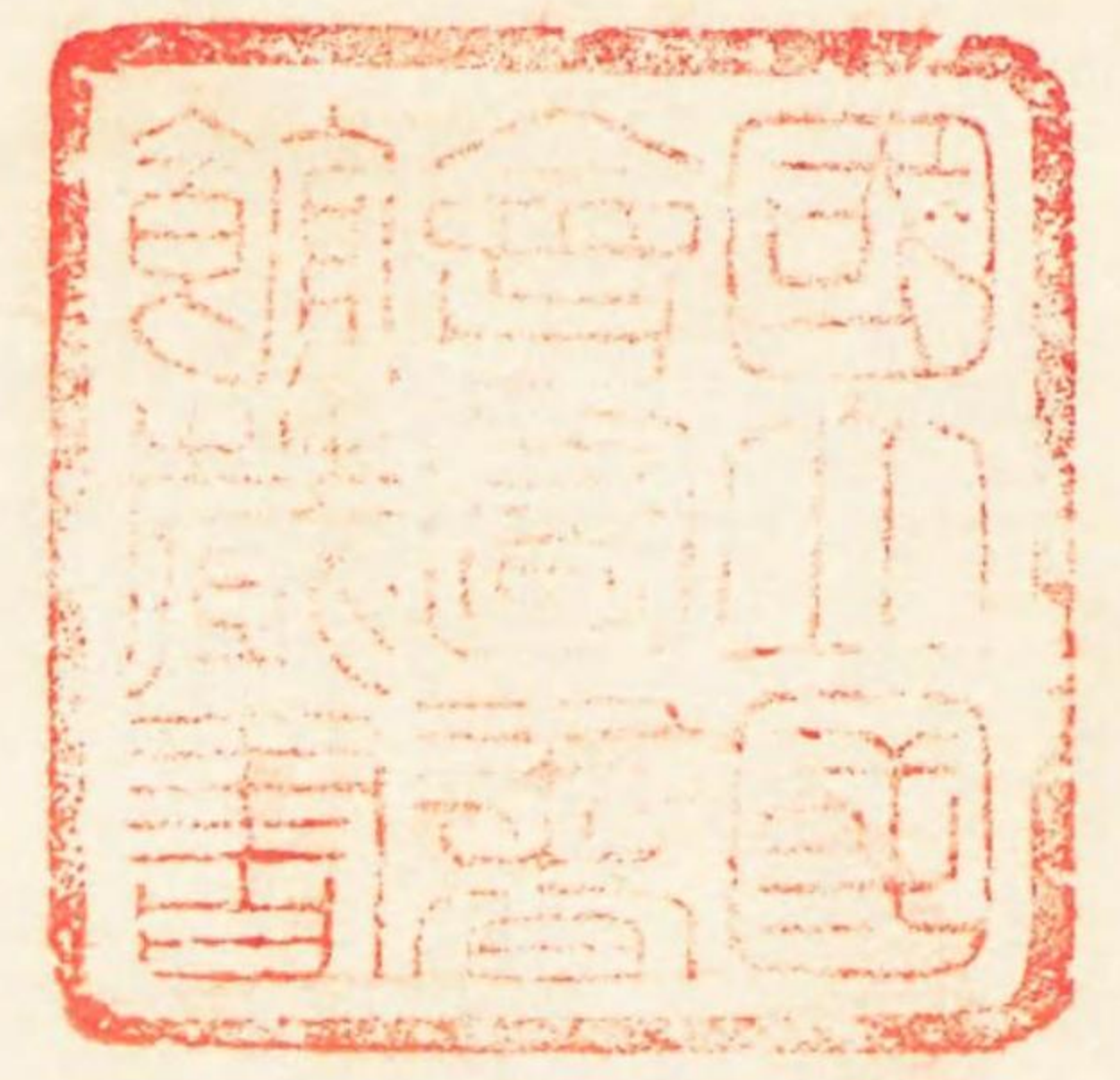


碧瑠璃園著

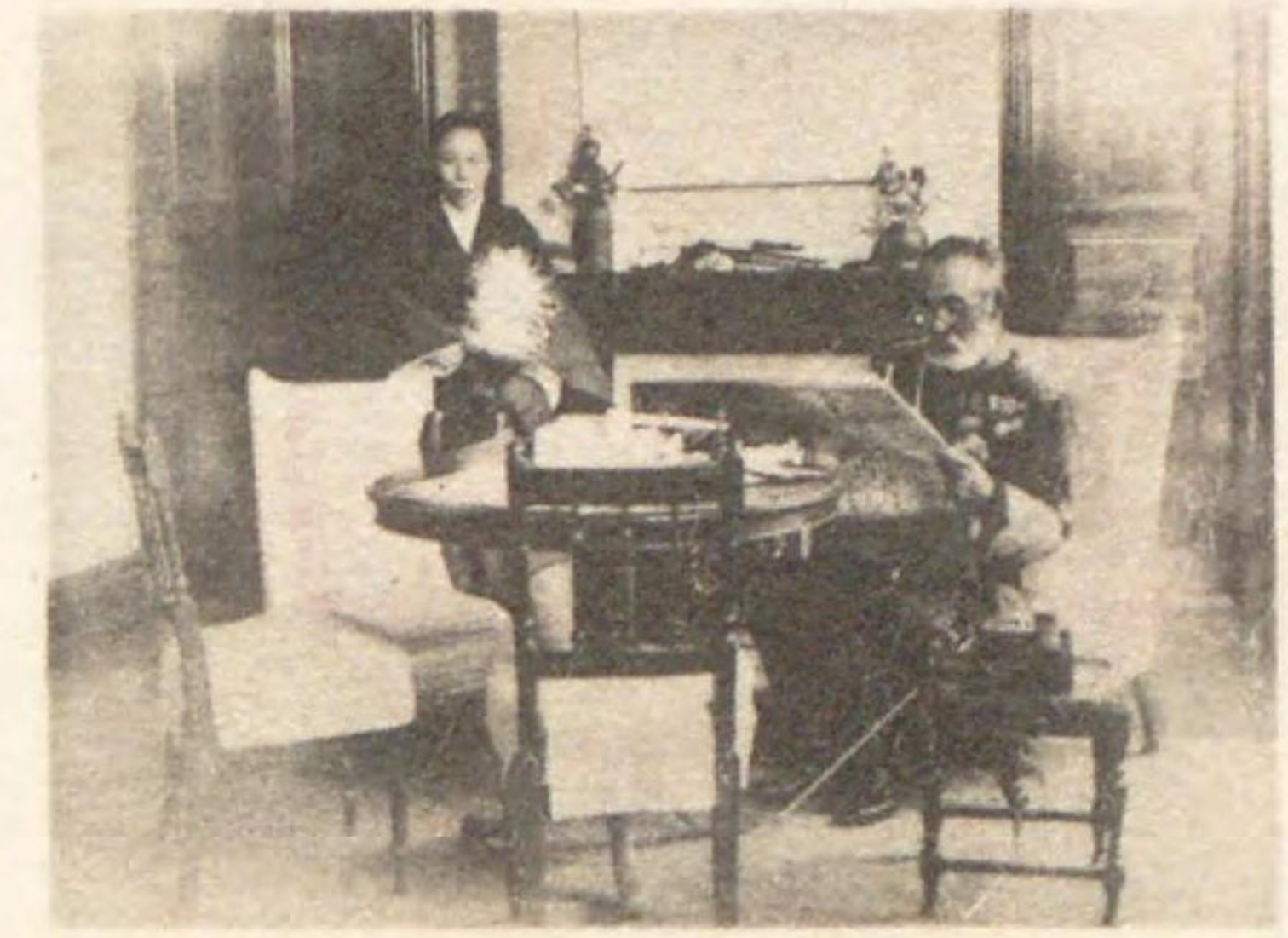
大正
14. 2. 21
丙交



25
H-23



150263



序

忠誠義烈の靈魂は人間最高の熱情表現である。日本國家は忠誠義烈の精神と深
宏な神威とに依つて創建されたものであることは、千古不變の誇りであると共に
神威と忠誠義烈の精神とは、我が日本の象徴である。表現である。

乃木大將は日本歴史の一美華として残るべき人であるとともに、又一面日本を
表現する一人である。日本歴史の上に一つの美華が残されたことと共に、乃木大
將に依つて日本と言ふ國がより深刻に表現されたのである。考へることが出来る
と思ふ。が、又それとともに人間最高の靈魂の所有者であつたと考へることが出
來ると思ふ。

乃木大將の名は三才の童子にすらも廣く知られてゐる。それは人間最高の熱情
表現である忠誠義烈の靈魂が、如何に人を動かすものであるかと言ふことを、如
實に語るものに外あるまい。然し斯くの如き人物であつた乃木將軍が、決して華
々しい生涯を送つた人でなかつたと言ふことはよく知つて置いて欲しいものであ
ると思ふ。最高の軍籍に身を置いて、然して常に威動高い戦跡の代表者として、
又斯くの如き質實な素朴な態度を以つて、眞に背後の人として陰れたる生涯を送
つた人があるであらうか。

乃木大將が人を動かしたものは、その質實素朴な人格の底深く秘められた眞の忠誠義烈の精神である。底深く湛えられたものであつただけに、それだけ人を動かす力は大きいのである。

乃木大將は至誠の人である。直行の人である。武士道に生きた人であると共に又涙の人である。畏れ多くも明治大帝に殉じて大帝の御威徳を仰慕せられたと共に、忠烈の範を後世に垂れて長逝せられたから已に幾年の月日を経た。其間、死して生きた大將の面影はどれだけの輝きを増したであらうか。日本に生れて日本建國の大精神を忘却して、根本を離れ徒らに外來思想に滔々として押し流されて行かうとする現代の日本の、悲しむべき傾向を見て慨嘆に湛えず、私は諸君の耳にこの一言を捧げたいのである。忠誠義烈の人乃木大將は今こそ生きるべき人である。今こそ眞に諸君の胸に生きねばならぬ人である。乃木大將を有したことを誇りとする日本人は、今こそその胸に乃木大將と再び生かさねばならぬ。私が改めてこの本を諸君の前に捧げたのはそのためである。

大正十四年一月

著者 識

乃木大將目次

江戸風砧巻鹽煎餅	一
乃木季十郎希次	二
寒中に井戸水	三
集童場へ	四
野中の教訓	五
兄弟の水盃	六
玉木父子の最後	七
聯隊旗を失ふ	八
乃木少佐の活躍	九
奮を持て	一〇
第一聯隊長に	一一
東洋の戦雲急となる	一二
日清戦争	一三

臺灣へ赴く……………	一六
第十一師團長……………	一六
妻返しの松……………	一七
愈々日露遂に干戈を交へる……………	一七
旅順要塞の攻圍戦……………	一八
二百三高地……………	一九
水師營に敵將と會す……………	一九
旅順開城……………	二〇
學習院々長となる……………	二〇
大廟遙拜所……………	二一
病氣にかゝる……………	二六
明治天皇の崩御……………	二七
殉死……………	二七

目次終

乃木大将

碧瑠璃園著

江戸風砧巻鹽煎餅

「ほう、珍らしい煎餅ぢやの」
 松の根元に腰をかけた呉服商人は、抜けた前齒の間から、皺枯れた聲を出した。
 「此間来た時にはなかつたが急に賣り出したものと見える。お江戸製といふから、
 彼方から職人を呼んだのかも知れぬ」
 若い方の男は日に焼けた顔に眼ばかり光らせて眞黒になつた手に砧巻と言はる、
 小豆餡を巻いた米の粉製の煎餅を四つ五つ載せて前に差し出してゐた。

「一つ風味を見ようかな」

直ぐに手を出して噛み砕くと齒と齒に高い音がして小さい破片が一つ二つ、白く埃にまみれた紺脚絆の上に散つた。

「小豆餡ぢやな、こいつア美味いぞ」

「お江戸では、こんなものを食ふと見えるな」

小月邊りまで出掛ける二人は疲勞した身体を城下の並木に休めて菓子くわしの噂うはさに時を費してゐたのであつた。

然し噂せらるゝお江戸風砧ふうきね巻煎餅まきせんぺいは彼等の言ふ通り急に賣り出されたものに違ひ

なかつたが決して江戸の職人を雇ふて製してゐるのでもなかつた。否尙不思議にも賣出してゐる菓子屋から作られてゐるのでもなかつた。

全くそれは相像する事が出来ぬ處で奇妙な人達の手てに依つて焼かれてゐるのである。

街道を上下する旅人なら、もう余程前に旅館に足を延ばして、馬方も濁酒の盃を傾け、馬も馬小屋に鼻を鳴らしてゐる時分、流石に寒さを持つて來る北風に未だ袂の袂を弄らせながら、三十を越した女房風の女、美しうはないが犯し難い氣品を面に表はして古い風呂敷を菓子屋の上り口に毎夜々々披げてゐた、さうして其中から轉がり出た煎餅こそは、今名物とも噂させらるゝ砧巻きねたまきに外ならなかつた。

「お蔭で大分に好い評判でござりますので」

煙管の吸口を咬へて言ふ菓子屋の主人の言葉を受けて、

「何分、素人の見真似でござりますので、美味しうには出来ませぬ」

負けず嫌ひの武士氣質を細い眉の間に窺はせても流石に恥かしさうに口を開いた主人にさへ打ち開けぬのでござりますからくれぐれも内證ないしやうにお願ひ申します」

「その事なら必ず御安心なされませ、決して他言は致しませぬ、それに菓子の方ほうも近々に長府の名物にしてお目めにかけましよう」

菓子屋の言葉は利害關係から離れて同情ある義氣を見せてゐた。やがて何程かの鳥目が彼女の前に出された。

「今日はこれだけ差し上げましょう、近頃は十分に賣れて参りましたので」

金錢は武士の本質から見れば決して喜ぶ可きものではなかつたが、人はパンのみに生きては行けないと同様に、精神ばかりでも生活は出来なかつた。武士は食はねご高揚子は所詮は瘦浪人の負け惜しみに過ぎないものである、殊に彼女の様に夫の喰む祿は少く、江戸からの移轉の費用も加はり、それでも町人に對し家中へ對し相當武士としての態度を維持して行かなければならない者には生活難に對して人一層の苦惱を抱いてゐるのであつて金子を扇で受けて取る人達の事を耳にし口にし乍ら臺所に押し寄せて来る生活苦の洪水には萬斛の涙を飲んで其鳥目を持つて歸らねばならなかつた。また其上に薄暗がりの居間に三人の幼子達に歸りを待たれる身でもあつた。

物質に恵まれぬ女の名は壽子、夫の名は乃木季十郎希次と言つて八十石を支給されてゐる武士ではあつたが八十石と言つても悉くは支給されてゐず、殿から給はる収入だけではとても一家の生計は支へ難ねるのは當然であつた、しかも元來江戸下りの者には屋敷を下されるのが普通であつたけれど何うしたものか、季十郎にはそれがなく、半ケ年の星霜を送つても未だ何の御沙汰もなかつたので、負けず魂の季十郎は今更重役に屋敷のお下渡しを乞ふのも嫌であつたから遂に菅野清右衛門の家を借り受けて居住する事にして仕舞つた。それだけ余計な負擔が貧困な一家に訪づれるのであつた。

であるから當時彼等一家の生活は全く惨めなもので、町人から求めて來た白木綿を鼠色の郡山染にしては一家全部の衣服にしてゐたのであつた。勿論極寒にも綿入れの着物もなければ、穿つべき足袋さへも持つては居らなんだ。

只季十郎だけは出仕する時には禮儀上穿いては居たが家にあつては年中素足ばかり

りである、しかもそれだけ、質素な生活を續けても貧窮の魔手は次第に延びて行くばかりであつた。

主人季十郎だけは物質的慾望を念頭に置くのを恥辱としてゐたので何一つ生計に就いて考慮する事はなく、困る者は主婦の壽子と長男無人の二人ばかりであつた。無人と言つても未だ十二才ばかりで下には何も知らぬ眞人と言ふ弟と、お稻と呼ぶ乳呑兒があるが、今は日常の小使にすら困り果てたので壽子は遂に夫季十郎が御殿へ出た不在を目當てに、江戸で見覺えの煎餅を製して菓子屋へ卸して生活の幾分にもせん事を決心した。

朝は夏冬の差別なく五時に起きると玄米で買ひ入れた米を庭に据えたダイカラで搗き始める、その音に目を醒ましてお稻が火の着く様に泣き出すと直ぐに乳を與へては又搗き續けて全部を午後までには挽いて仕舞ひ、さうしてこれを煎餅の材料とした。長男の無人は米を搗くにも粉を挽くにも足や手を働かせるばかりか背中には

妹のお稻を括つて眼は前に置いた書物に注がれてゐる事もあれば片手に書物を繕きながら片手では臼を挽き廻してゐた事もあつた。

壽子の慣れぬ手つきで子供の掌程に伸ばされた米の練粉は餡を巻いて煎餅に焼かれ、夜に入つては城下へ賣捌かれてゐたのであつた。

かくする中にも日は経つてお稻も漸く言葉を發する様になれば眞人の身体もグン／＼成長して行つた。無人の書物も論語から孫氏吳氏、さては三國志やら太平記等讀破して仕舞つたが、只變らぬものは貧窮ばかりであつた。

季十郎も小等原流禮式を師範した中川豹右衛門が死んだので、有職故實に通じてゐる故を以つて漸く重用せられる日を迎へてゐた。恰もよし甲斐守元運の末子健之助が清末藩主毛利讃岐守元世の繼嗣として赴く事になつたので其縁組萬端に就いて彼の指揮を受ける事になつた。彼は十日交替で同役中村某と御殿へ詰めねばならなくなつた。

平生油断を忘れなかつたが貧困のどん底にあつて彼等一家には相當な衣裳さへ失はれてゐるのであつた。

「其様な事は何うでも好い、郡山染に上下さへあれば澤山だ、捨ておけ」

と季十郎は言つてゐても壽子は何うにかして用意をせねばならぬと思つた。しかも煎餅を以て得るには余りに多き金高であるので彼女は小さな胸を獨り痛めてゐた冬の風は物凄音戸の障に立て、外には雪さへ交へてゐる夜、彼女は幼い無人を呼んだ。

「無人、斯う一時にお鳥目が要つてはお内職でも行き届き難ねるので有合せ物を質屋へ持つて行かうと思ふが、お前も一所に參つてくれぬか」

「はい、お父様はお留守、眞人に留守をさせて私がお供を致しましょう」

二人の母子は宗三郎と言ふ下僕を呼んで傳來の長櫃を持たせながら雪を浴びて宵暗の路を歩いて行つた。

黙々として行くどやがて目的の質店へやつて來た。

「これを何うぞ預かつて下さいませ」

長櫃は宗三郎の肩から敷居の上に置かれた。

「へい、有難うござります」

番頭は摩手をし乍ら、櫃の四邊を行燈の光りで打ち眺めた。

「これで如何なものでしよう、三十兩では」

「三十兩、もつと借して貰ひたいがな」

下僕の宗三郎は傍から口を出して番頭の面を眺めた。

「三十兩と申しますと、随分勉強して居りますので、手前共は決して無茶な事は申しません へい」

「では、よろしうございます」

「左様でございますか、有難うございます、ではこゝに三十兩ござります」

直ぐに、主従三人は又田中にある家へ戻つて行くのであつた。

當時の中以下の武士の生活は經費に困つてゐたのは事實ではあつたが、自身で質を置くのは全く珍らしい事であつた、しかも金子の借用を他人に依頼する事は道でないとの理由と家の恥を漏さぬ用心とから、無人の母が健氣な斷行をしたのに外ならなかつた。

家では恚様な日を過してゐたとは知らぬ夫の十郎希次は養子縁組を無事に終了させて更に忠實な出任を續けてゐた。

『乃木が来るさうぢや、疎忽をしてはならぬ、油斷をしてはならぬ』

厳格な言行に對して、かう誠め合ふてゐた程、彼は家中で恐れられてゐたのであつた。

乃木季十郎希次

瓜の蔓には茄子はならぬと言ふ眞理を信するなら先づ、乃木季十郎から知らねばならない、後には十郎と改めたが、名は希次代々長府毛利家に仕へ江戸の定府を勤めて知行は八十石を戴いてゐた、甲斐守元運に近習を勤めて文武兩道に熟達し流鏑馬流を善くし、小原笠流の武家古術に秀で騎射にかけては此藩中に並ぶ者はなかつた、山鹿流兵學者として、名高い高濱四郎左衛門は彼を評して言つた。

『兒島高德を何様な人であつたかと思ふ者は、宜しく乃木季十郎を見る可し』
十郎が元運の近習を勤めて居た時、元運から尋ねられた。

『其方は騎射の上手と聞いたが、よく四寸の的を射る事が出来るか』

季十郎は彼の確實な信念と、負けず嫌ひの氣質から鋭い聲を以つて答へた。

『論より證據は此場で御覽に入れましよう』

實際かう言ふ答へは余程自信のある人達にも危険な事であるので大抵は好い加減の事を言つて、その場を逃がれるのであるが曖昧を喜ばぬ彼はこの言葉で答へて仕舞つた。

若し萬一仕損じたら、言葉に對しても割腹をせねばならぬのであつて、假令君侯から夫だけのお咎めはないにしても、武士の面目として生きては行けないし、武士必持の要件を持たぬ事になるので彼は闘手としての價値は無くなるのであつた。

暫くすると、主君元運は馬見所に座を構へ家臣一統を並べて見物をする、其前で彼は眞に命懸の仕事をやらなければならなくなつた、流石に故實に熟練した家柄だけに馬上の捌きは水際立つて三歳の駒を自由自在に乗り廻し、凡ての運命をかけた一箭を馬上ながらに狙ひすました。深海の底の様な沈黙が近習衆や家臣一統を支配する中に、矢聲は高く叫ばれると忽ち緊張した瞬間は主君元運の聲で破られた。

『お、見事々々』

續いて賞めそやす聲々の合唱が廣い馬場に溢れて聞えた、それは見事にも四寸的は一分も異はず眞中を射られてゐたのであつた。

かくして生命を賭した騎射を成功すると反對に彼の武勇は此上にも高く噂されて行つた。

その後の或日毛利元運は日向國佐土原の藩主島津淡路守忠寛の邸へ招かれた、島津家では、種々の馳走をした後に邸内の馬場で騎射の遊びを御覽に入れた。

『長府様にも是非一馬場なされては如何でござる』

一同興に入つた時淡路守はかう勧めた、仕方がないので遂に馬場へ進み出て其時連れて行つた、江見小平太、江本牧太を相手に騎射を始めたが先づ相當の出来であつた。

『やアお見事、お見事、殊の外感服いたしました』

淡路守がかう賞めたのに答へて甲斐守元運は言つた、

「今日の供人共は只騎射を知るといふのに止まつて思ふ儘には出来申さぬが、拙者家來に乃木季十郎と申す者がござる、これならば少しは御感賞に干ることが爲きたかも知れませぬ」

「何、乃木季十郎、こりや面白い、さらば其者の騎射を一見致したう覺えまする、何日頃參上致したらようござるな」

氣早やの殿はかう問ひかけた、余りの氣早いのに一寸當惑をしたが甲斐守も乃木季十郎の射術に對する確信から家臣の武術を誇る事が出来る喜びを胸に描いて、「何日々と申さうより、今日只今御同道申し上げる」と言つた。

「うむ面白い、お供仕る」

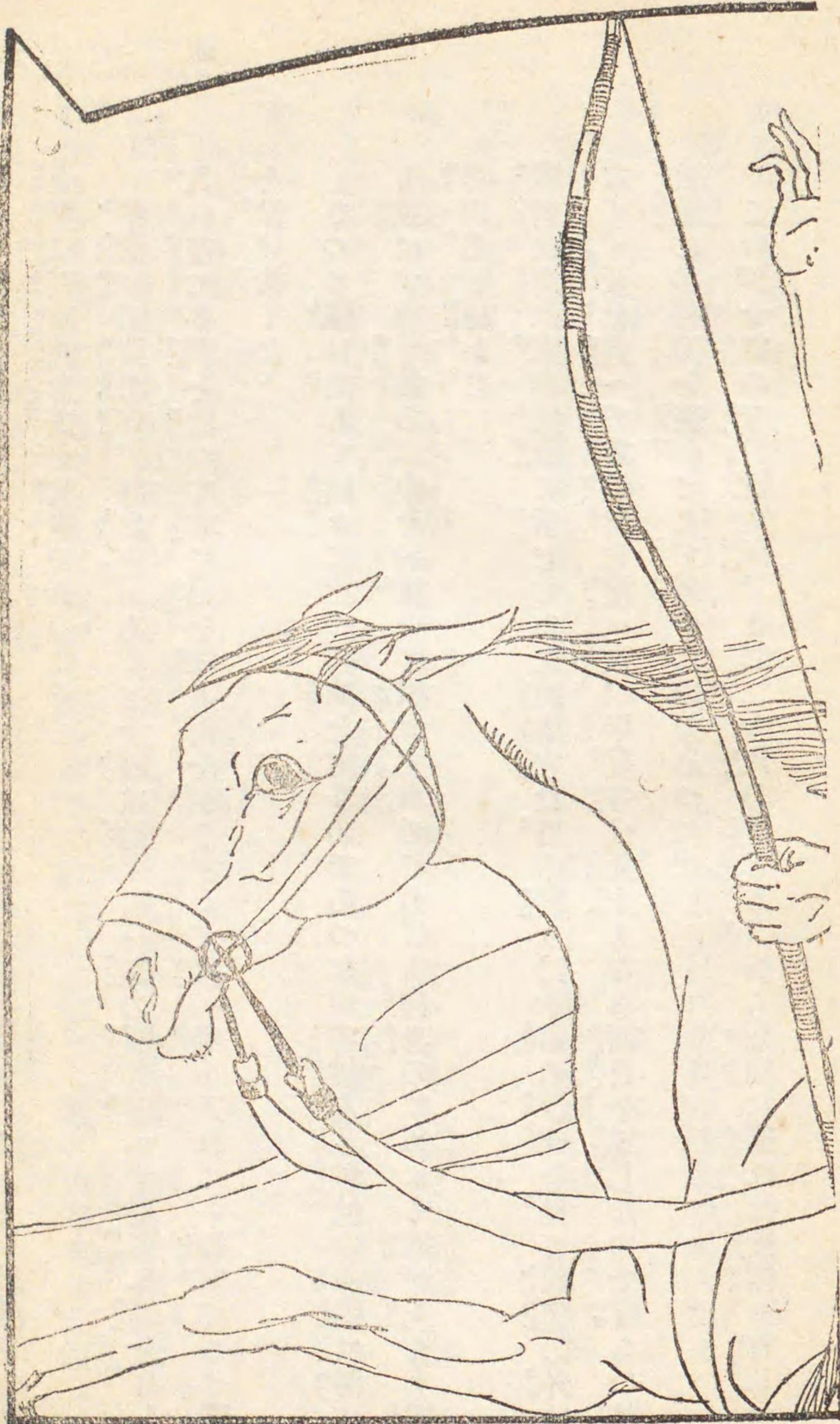
輿に乗つた淡路守も直ぐに供廻りを言命けた。

やがて一足先へ走つて歸つた、江見小平太は麻布日ヶ窪の上邸へ戻つて重役へ此由を通報した。

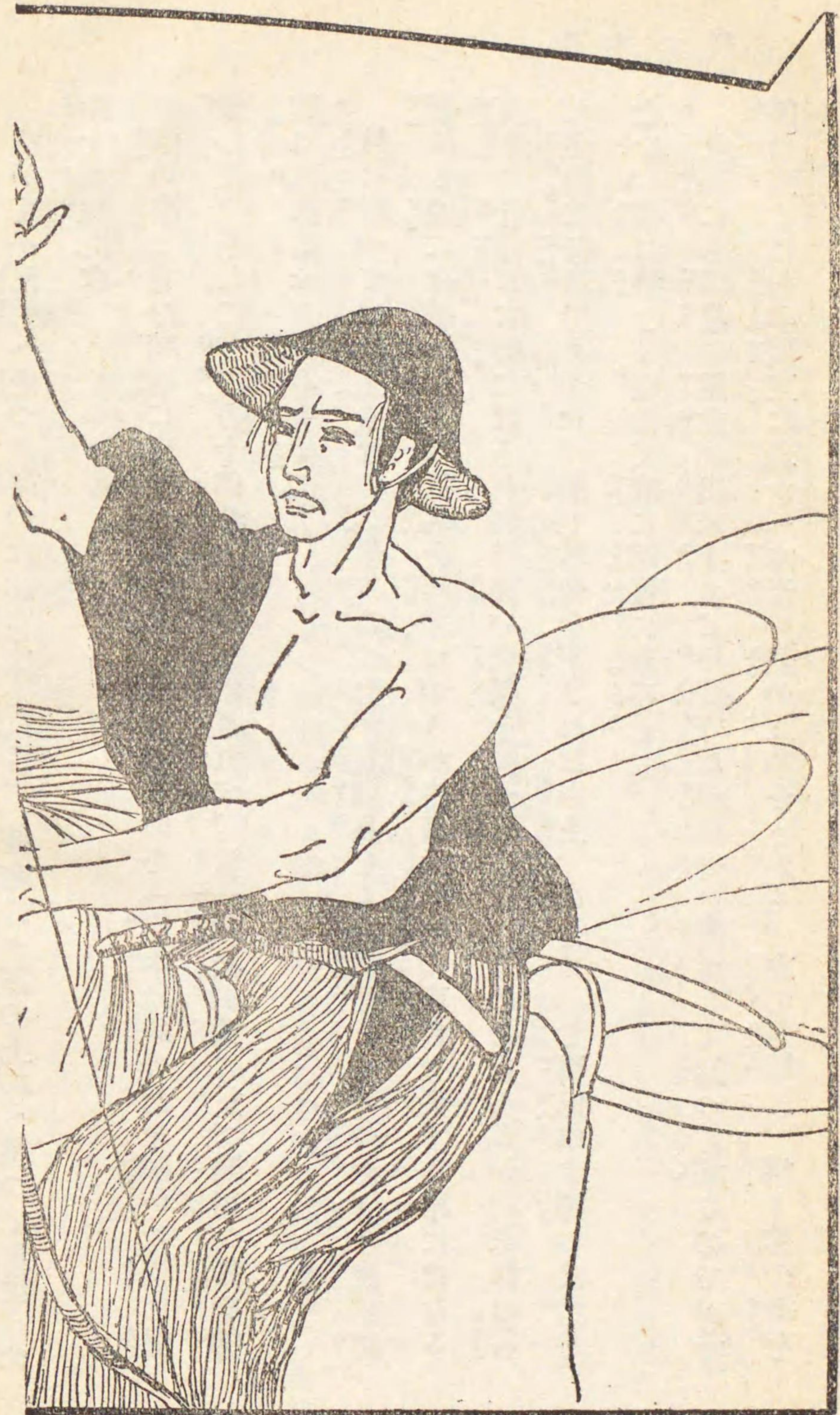
急遽の事と言ひ騎射には夫々の儀式作法もあるので一家中は蜂の巢を叩いた様に混雜した、そして非番の十郎希次を呼び出されて、佐土原様御前に於て騎射の術を御覽に入れるべき命令を下した。

彼に取つては此上もない名譽であつたが又容易ならぬ責任でもあつた。今度は射損する時には彼一個人の武名を汚すばかりか主君元運公の面目を失する事にはなる反對に仕遂げた時にはそれだけ多い光榮を持つ事にはなるのであるが、それは甚だ危険な任務であつた。然し君命を下された以上、武士として辭退申す譯には行かない、彼は快よく受けて直に準備に着手した。

此間にも馬場の用意が出来上ると甲斐守は淡路守を同道して歸つて來るので、十郎は直ぐに射手装束に着かへ水干の紐の止めやうから、左の肩脱ぎ、絆り袴の裾を



41.



込めて太刀、扇を差し、重藤の弓に、朴の木の鏑矢三つ上矢にさして、綾蘭笠の馬
上姿は天晴鎌倉武士其儘であつた。

甲斐守、淡路守、御出座があるところ十郎は動作に一點の隙も與へず扇形へ馬を打ち
入れ左に手綱を取つて右に扇を握り馬を引き廻して探へ乗り入れて一鞭當てる扇
を投げ捨てた。

さつと駆け出して段々に三つの的を射るのであつたが巧妙な入神技の射術は何れ
も違はず四寸的の真中を射抜いて彼は主君のためにも自身のためにも嫌が上にも武
勇の名を輝かせた。

騎射は島津家の武藝と信じてゐた淡路守は目の當りに十郎の妙技を見て感嘆の外は
なく、盃を與へて其名譽を讃へた、甲斐守は此上もなき面目を施したので直ちに御
紋散しの短刀を褒美として送つたのであつた。

これが十郎の近習役時代、まだ二十代の事であるから如何に優れた技倆を有した

かは明白な事であつた。

其後彼は御番手に轉じて行つたが、剛直にして不負嫌ひの氣質は同輩や老人共と
衝突せずには置かなかつた。

無刀の儘で入るべき先輩部屋へ脇差を手にして進んだと言ふ理由で彼は忽ち横暴
な鎗玉に擧げられた。

『乃木季十郎は何故脇差を持ち込み申す、事は些末とは言へ斯様な事から常例を亂
すものぢや、多分不案内と推察するが早速申聞けて御一統と同様始末する様仰せら
れい』

初番の筆頭は古番から叱られて、乃木季十郎に執次いだ、

『時に季十郎殿、今日御意を得たは別儀ではない、先日から拙者目に余り不作法に
存するゆゑ再三御注意申し上げたが一向お聞き入れないに依つて遂に古番衆のお耳
に入つた、表面お咎めあつては技差なり難ぬるにより以後は必ずお謹みめされ』

然し、季十郎はその言葉に黙従する男ではなかつた。

「御忠告は辱く存する、他ならぬ古番衆の仰せ付殊に舊來よりの習慣とあれば余事は何にても承るなれど此ばかりはお肯き申す事は相成らぬ」

「意外のお答へ何故でござるぞ」

筆頭の者は鋭く問ひ返した。

「改め申すまでもないが、拙者一身は既に殿様へ差し上げ申し居る、君命とあれば是非に及ばねど其他の指圖で身を守る一刀を手放す事は爲り申さぬ」

彼は容を正して頑として承知せなんだ、初番一同から此由を古番衆へ傳へると一同は怒り出した。

「季十郎新入りの身を以つて舊例を輕んずるは其意を得ぬ、諾し其分なら以來鍋かゝるひに致す事にしよう、左様お傳へめされ」

斯ふ言へば如何な彼も詫を言ふであらうと思つて傳へたが季十郎は未だ嚴として

肯かなんだ。

「斯の上は貴殿としての一分も立ち申さぬ故、勿々お詫びなされるが好しからう」
同役は傍から言ひ添へたが彼の決心は鐵の様に強固であつた。

「余事は存せず、季十郎は徹々たる御家來ながら一身は君侯の御物にして私の物ではござらぬ、大切の身を守る脇差、手放す事は出来申さぬ、鍋かゝるひの件確と承知仕つた」

鍋かゝるひと言ふのは公務以外には絶對に交際をせぬ一種の私刑であつた、然してそれは古參を嵩に被た古番衆が自身に作り出した不法の習慣であつたのだ。

交際をせぬと言つただけでは随分苦痛にもない様にも思へるが勤務上の事にも、甚だしきは晝飯や使用の間にも、鍋かゝるひになつた者は同役に依頼する事は出来な酷刑であつたけれど誠實その物の様な彼季十郎は此陋習にも降らずに反つて健氣にもこれに對して反抗を企てたのであつた。

その日から彼は三度の食事を二度に減し假令非番の時でも一切湯水を口にせず大廣間に詰めた時にはお上の御用の他に座を立つ事はせず、休息の時には十郎は夜具包みに寄りかゝつた儘で前夜の四時から翌朝の六時まで一睡もせず夜を送つた、斯うした日を送る事は八ヶ月一日一時間も怠らずに彼は横暴な私刑に屈しなかつたが此處にも勝利の日が遂に正義の者の手へやつて来て古番共の仕方宜しからずとあつて、やがて彼の鍋かるひは許されるに至つた。

季十郎の負けず魂と誠實は此時から家中の人達へ一層知れ渡つて行つた。其他彼が如何に健固な武士的精神を持ち、其有事の日の覺悟を抱いてゐたかは彼の佩刀を見ても知れてゐた。

弓術師範の渡邊剛太郎が贅澤な佩刀を傲り顔に突き出した事があつた。『乃木公御一見下され、随分心を籠めて拵へ申した』

彼は六七寸を抜いて見たが其儘で鞘に收めて仕舞つた。

『拵へでは人は斬れぬ、拙者の佩刀を御覽なされ』
季十郎は木綿の小倉糸で鞘を巻いた自分の一刀を差し出してかう言つた。

『拜見致さう』

剛太郎が抜き放つと、長さ二尺八寸、焼刃の匂ひは得も言はれず、亦とない珍物であつたので彼は深く恥ぢ入つて仕舞つたのであつた。

『いかにせば奉公の道を盡す事が出来るか』

と言ふ事は乃木季十郎の武士として日を送る標言であつた。彼は日常凡て戦闘を基準とした行動を忘れた。

先づ自宅の周囲の間敷を調べて晝も夜も一息も緩めずに早足で駆け廻つた、食事は小形の握飯、大便の外は走り乍ら用をたしたのであつた、彼の妻の壽子は其時の試験官として縁へ腰かけ乍ら筆紙に走つた距離、屋敷を廻る回敷を書いて、一睡もせず、良人のために完全な表を作つた。

雨の日も風の日も彼の家に勇ましい速足の音がせぬ時とてはなかつた。
『七日七夜の御用ならば、拙者いさゝか覺えてござる如何な時でもお勤め申す』
これが速歩の記録と彼の自信であつた。

寒中に井戸水

彼は長男の源太郎と次男何某と男子を續いて擧げたが何づれも三四五才で死亡したので、もう子供はないものと諦めてゐた、處が圖らずも男兒が生まれたので歡びは一方ならず無いと諦めてゐた故に、無人と命名して、養育したのであつた、それは彼の四十六才の時、續いて四年後には又男子を得て眞人と呼び、次に女子お留とその後、次女のおいねが生まれた。
先妻は死去したので雜司ヶ谷附近の農家から後妻を迎へたとの説があるが二人共

同じ壽子と呼ばれてゐた外には確とした事は判らない。

偕て季十郎は妻との間に六人の子を得て二人は夭折した、けれどかなり安樂な日を江戸日ヶ窪に續けてゐたが晴天の霹靂は遂に彼の一家に見舞ふて來て突如として歸國在番の命に接した、彼が歸國の原因として様々な風説が傳へられてゐるが、時の藩主右京亮元周に對し苦言を呈した爲めだとも言ひ、家老重役と意見を異にしたので事毎に衝突した故に讒言せられたとも噂せられるが藩主の不興を蒙つた事は事實らしい事である。それで無うてさへ誠實をさらげ出した一本氣な彼は隨分重役始め一同に色眼鏡で見られてゐたのは當然であつたに違ひない。

彼の一家はこれだけの道程を経た後に長府での貧困な日を續けてゐたのであつた。これだけの前程を興へたなら季十郎の嚴格な言動が髣髴として讀者の眼に浮かぶに相違ない。

無人と言つて質屋へ供をし、妹を背にした十二才の少年こそ後年、滿州に三軍を

卒ひまれた陸軍大將伯爵乃木希典まれすけであり、留守をさせられた弟せういこそは國家のため前原まへばらに誠まことに殉じゆんした真人其人まひとそのひとに外ほかならないのであつた。

彼等かれら兄妹は實じつに斯かくの如ごとき季十郎希次ちうまつでを父ちちとして持つてゐたのであつた。然しかも古武こぶを其儘そのまゝの彼等かれらの父ちちは自身じしんにも嚴格げんかくな訓練くんれんを忘わすらなかつたが其子供達そのこどもたちに對たいしてもスバルタ式教育しきけういくを忘わすれなんだ。

郡山染こほりやまぞめの裕あはせに霜しもがかつても無人真人なまひとまひとの口くちからは「寒い」と言いふ聲こゑを聞きいた事はなかつた、青あをい鼻液みづはなは氷柱つらの様やうに下さつても慄ふるへた時ときどてはなかつた、若もし寒さむいとも言いはうものなら、父ちちは子こを呼よびつけて諄々じゆんじゆんとして不心得ふこころえを諭さし有事いうじの日の武士ぶしとしての覺悟かくごを語かたるのであつた。

或日あるひ、それは未だ江戸えどにゐる時ときではあつたが、名物めいぶつの空そらつ風かぜが雪ゆきを交まへて吹ふきまくる時とき、低ひくい下駄げたの鼻緒はなをを切きらして無人なまひとは家いえへ歸かへつて來きた。「こんな下駄げたは歩あるかれませぬ、もう少し好よいのを買かふて下くだされ」

さうして下駄げたを蹴け飛ばした、丁度てうど其處そこへ父ちちの十郎ちうらうの姿すがたが見みえた、下駄げたの苦情くじやうに不ふ機嫌まげんであつたが急に無人なまひとを雪ゆきの中なかへ放つき倒たして力任ちからまかせに踏ふみつけ

「履物はきものの苦情くじやうを言いふ様やうでは眞まことの武士ぶしに爲なれるか、足あしに履はく物を詮議せんぎする暇ひまに何故なぜ聖せい人の教おしえを究きめぬぞ」

と、折柄おりがら、下僕宗三郎げぼくそうさうらうが運はこぶ水桶みづおけの井戸水いどみづを無人なまひとの頭あたまから打うち掛かけた。

後年こうねん將軍自身しんじんの口くちから「あの時程ときほど恐おそしかつた事ことはない」と言いはしめた程ほど彼の教育けういくは嚴格げんかくなものであつた。

慘酷さんこくと言いふ勿なれ、より健全けんぜんな身体からだを得えるために古來こらい何人なんにんの英雄豪傑えいゆうごうけつが苦心くしんをしたか、さうして如何いかに健全けんぜんなる身体からだが健全けんぜんなる思想しきうを生うんだか、彼の蒙古もうこの大軍たいぐんを撃げ滅めつせしめた鎌倉武士かまくらぶしは水みづに入り雪ゆきに伏ふして武士道ぶしどうを大成たいせいせしめたのでは無なかつたか、テルモピレーの峻險しゆんけんに殉死じゆんしして歴史家れきしかをして感嘆かんだんせしめるスバルタの勇士達ゆうしたちには其その激烈げきれつとも言いはれた教育法けういくほうが健全けんぜんなる身体からだと不拔ふはつなる精神せいしんを生せいじたのではなかつたか、



生爪や齒拔も勿論五十何杯の水責めにも倒れず、赤熱の鍋さへ被つて死な、んだ快僧、日親上人の奇蹟的行動を考へて其日常爪に針を立て、辱忍の精神を養ふた事に及べば蓋し思ひ半ばに過ぎるものがあるであらう。

實に斯くの如き教育法を實施されてはゐたが平常は季十郎は子供達を愛撫せずにはゐなんだ、非常の日

には兄弟二人を膝下に呼んで彼は崇拜し憧憬する、赤穂義士の話をしたり山鹿甚五左衛門素行の言行を物語つた。

それは四十七士の中の村松喜兵衛、武林唯七、岡島八十右衛門、吉田澤右衛門、倉橋傳助、杉野十平次、勝田新左衛門、前原伊助、間新六郎、小野寺幸右衛門の十人が毛利邸に預けられて其處で切腹をした同係上邸内には遺蹟もあれば起臥した室も其儘であり、語り傳へに彼等の苦心の挿話が殘されてゐた、尙山鹿奉行は同じく乃木家から別れた玉木文之進の姪、吉田寅次郎松陰が山鹿流の軍學者の家筋であつたから、それ等は兩方共に季十郎には親しかつた。

従つて勇ましい割腹の日の立派な義士の最後は幾度も幼い兄弟の耳へ入つた、武士道の眞髓を鼓吹した素行の軍學は概念乍らも無人真人の心に芽を下さねば置かなかつた。

かうして或時は温しく諭し、或時は厳しく教へた教育が長府でも續けられてゐた

が父の不在時には忘れてゐた生活難が幼い胸を脅かしてゐるのであつた、母の相談相手となつては煎餅焼きに努力して少しでも余計に鳥目を得るために働いた。

暫すると清末の勤番を無事に終へた季十郎は次には若殿宗五郎の傳役をする事となつた、さうして更に彼は忠勤を盡したが不法にも重役達は未だ家屋敷を興へなかつたので、季十郎は此處に空屋敷を買ひ取る事を決心した。

勿論賣買は嚴禁せられてはゐるのであつたが、名跡のみ残る屋敷は秘密に賣買されてゐるのであつたから彼は出仕のためにもこの邸を求めなければならなかつた。

忽ち母と無人は質屋通ひを屢次行つて遂に工面十面して血の出る金子を、季十郎の前に並べる事が出来た、季十郎はそれで横枕の屋敷と言つても縁もない、四疊に六疊に三疊の小さい家ではあつたが一軒の家屋を自分の所有とする事が出来た、早速田中にあつた菅野清右衛門の邸から一家は此邸に移轉して門も顔れて無かつたら彼は入口に二本の柱を立て竹を打つた疎末な扉を二枚入れて出入口を拵へた、そ

して城へ通ふのも、壽子が煎餅を賣りに行くのも皆唯一つの此門から出入りしたのであつた。

部屋は狭く來客があれば膝を容れる處さへ無かつたので多くは座敷の端に腰かけて話をしてゐた、家の中には元より一點の粧飾もなく床もなければ掛物も見ず、置物や花活けも並べられず、勝手道具と言つては日々入用の物ばかりで他には來客用の煎茶々碗が三四個も備へられてゐたが、武器武器は玄關から座敷臺所までも置かれて刀、鎗、長刀の類は鴨居にも長押にも、天井裏にも、掛けられてゐた。しかも一つも仇なものも無く當時長府第一と稱せられてゐた、大將が自ら用ひた大兼光も父の秘藏の一品で、乃木の大兼光と言へば誰知らぬ者もない名刀であつた。

漸く新居にも落着くと季十郎は二人の男の子を連れて忌宮に詣でた、そして敬神の念と共に神功皇后の御偉徳を物語るものであつた、其他には彼は好みのお灸をすえさせて非番の日を送つたりした。

「お父様お灸を致しましよ」

無人は何日も灸をする役目を持つてゐた、然し最後には石田三成が自盡の日さへ柿を食べなんだ古事を引いては灸を點ゑて身体を健全にするのもお上のためと言ふ事に歸着するのであつた。

斯くする中にも、年月は過ぎて無人にも十五才の春が來た、それは文久三年であつたが彼は元服して名乗りを頼時と命けられた。

季十郎が傳役として出仕し、無人が貧困の中にも成長する間に天下の形勢は緊張して驚天動地の大革命が尊王攘夷論を中心として、起らんとしてゐた。

集童場へ

嘉永六年六月三日、ペルリは艦隊を卒ゐて浦賀灣へ異形な姿を現はして幕府へ開

港と交易を迫つて來たのであつた。

今まで鎖國政策に怠眠を續けてゐた徳川百五十年の太平の夢は忽ちにして、破られて仕舞つて上下言語に絶した驚愕を覺えてまるで鼎が湧く様な騒動が勃發して來た。

正しく攘夷を斷行して異國人の影を拂へと言ふ者もあれば、進んで開國して歐米の文明に接せよと主張する黨派も出來、果ては此際に横暴なる幕府を倒して尊王の旗を擧げるべしと言ふる志士も現るかと思へば、正しく公武合体して紅毛人に當れと説く武士も有つて國論は囂しく手のつけ様もなかつた。

然かも主義主張を異にする幾多の団体や結社は異なる思想に對しては敵對行爲を敢てしたので血生臭い争闘が此處彼處に演出された。

尊王攘夷の志士頼三樹三郎、梅田雲濱等は尊王派の急先鋒、吉田寅次郎、橋本左内等と共に幕府のために小塚ヶ原の露と消えた、尊王開國の新思想を抱いた佐

久間象山は何人か判らぬ者のために京都の町に血を流した、米國と獨斷條約を結んで天下の志士に白眼視けられた、井伊大老は遂に萬延元年の三月三日、櫻田門外の雪と共に消え失せた、曰く坂本龍馬、高杉東行、久坂玄端、實に枚擧する事が出来ぬ程多くの尊い血が此革命の犠牲として上げられてゐた。

朝廷は各藩主を京都へ召して海防の事を諮議せられた結果、遂に廟議は愈々攘夷する事に決して、文久三年三月八日、乃木季十郎の仕へる長府藩主毛利左京亮元周も歸宅して一家中へ攘夷の勅旨を傳へると共に赤間關附近に假砲臺を築いて防備を嚴にし出した、そればかりか五月十日長府沖に差しか、つた米國汽船を目がけて遂に第一號砲を打ち折柄來航してゐる軍艦庚申、癸亥二艦と共にこれを砲撃して東の方へ免れ去らしめた、これは下關事件の發端で、それから海峽を通過する佛國軍艦を砲撃し、和蘭、米國の軍艦をも撃退せしめた。

然し六月五日、佛國海軍大將シヨレースの旗艦がタレクレード號を卒ゐて對戦し

た時には白兵戰では得意の長州武士も、より精銳な武器と熟練した技術には降伏するより途はなかつた、長藩の退却の機に佛國人は續々と上陸をしたのであつた。

此の敗北は萩の本藩は元より、凡ての人達は夷狄のために神州を蹂躪せられたと悲憤慷慨して、長府諸家中も切齒扼腕したのであつたが、更に士氣を鍊り武術を究めて會稽の恥辱を雪がんと、長府でも元治六年に新らしく集童場を催けて文武兩道を教へる事にした、同じ屈辱に涙を喰んだ季十郎はこの設立に對しては盡力せなければならなかつた、午前は漢籍を教へ午後は武術を稽古させて敬業館が中學であれば集童場は小學校、大學校としては萩に明倫館が設けられてゐた。

熊野直介則一、福田馬正則、前者を監督とし後者を教授として、十五才以下の者が教へられてゐたので小いながらも國家の前途を思ふた乃木無人頼時は血判誓紙して弟の眞人と共に集童場へ入學する事になつた。

集童場は精神的教授法を取つて寒暑に對しても皆戰物を基準とされてゐたから、

生徒の寄宿舎は悉く板敷で、足袋も綿入れも、羽織と言つても儀式の外は一切用ひられなんださうして漢籍の素讀と武藝の調練、別に思想と辯論を練る『對策』と言ふものがあつた。

無人は生來病弱の身で温厚な性質は一度も人と争ふた事がなく、何方かと言へば卑怯者として疎外された傾きがあつて、儘に言ふ泣顔の無人に對して『乃木兄弟マコトニナキト』と嘲笑をしてゐたのであつた。

一方長州藩では外國に對して發砲をした事から横濱との交渉が頻繁を極め、結果英、米、佛、蘭の四ヶ國は艦隊を長州沖へ送る事に決議して八月四日三種の艦隊が豊前田の浦に錨を投じて示威した。

やがて此處に砲撃戦が開始されたが、異國の聯合軍は遂に砲臺を占領するに至つて萬事休す、長州本藩は講和使を送つて戦鬪を中止し、長藩から賠償全三百萬弗を六年賦で支拂ふて漸く事落着を見たのであつた、この大敗北は今まで夷狄を物とも

思はぬ人達の胸へも、到底今の武術を以つてしては異國と戦ひが出来ぬといふ事を覺えしめた。

集童場の教授法も其時から一變して更に嚴格を加へて行つた。

幕府の長州征伐のあつた翌年、慶應元年の秋になつて、無人は學問に依つて身を立てんと決心して父に向つて萩留學の事を願ひ出た、十郎は元より豫期してゐた事ではあつたが無人を呼んで先づ尋ねた

『當所は君侯の在らせられる所ぢやが、お前は御本家の家來でもない、萩へ行て何をします』

『學問を致します』

『學問は何處でも出来る、萩の孝經も長府の孝經も同じ文字が書いてある』

『萩でもつと勉強が致したうござります』

この返答には父は言ふべき問は持たなかつた。

「萩と言ふても廣いが、何處へ參る」

「玉木の叔父様を頼みます」

「玉木の叔父か」

「はい、御家中の壯丁へ讀書をお授けなされてゐられます由、私も叔父上の教へを受けようと思ひます」

「武士は武術を以つて立つ者で學問は儒者のするべき事ぢや」

「玉木の叔父様は吉田松陰先生のお師匠様でございます、松陰先生は山鹿素行先生の再來でござります」

「松陰先生は長州始まつてからの傑物ぢやが」

「私も同じ學問を習ふて、志を立てたうござります」

無人の面は希望に輝いてゐる様であつた。

やがて父の承知を得ると次に藩主の許可を待つた。

それは慶應元年の秋も過ぎ曇つた空から寒い風が吹き荒ぶ冬の日、住み慣れた家の玄関とは言ひたいが名ばかりの門口に、やはり裕の郡山染を着た無人は旅装をして立つてゐた。

「お父様それでは行つて參ります、お母様お身体を大事に遊ばしませ」

親を離れ唯一人見知らぬ土地へ赴くのは青雲の志を抱いてゐるとは言へ流石に感傷的な心を覚えてゐた。

「身來を大切にしたらが好いぞ」

「はい」

「無人、今日志を立て、墳墓の地を去る以上は立派な人間にならねば、歸る事はな
らぬ、萩の月性上人の詩を知つておらう、男子立志 出御關、學若不成死不
歸、埋骨豈期墳墓地 人間到處在青山と言ふ、私もお前にこれを餞けとするぞ」
父の聲は無人の胸深く響いて行つた。

「それから此首途にお前の名も改めて置かう、よいか、これからは無人を改めて文造とし名の頼時を交へて希典とするぞ、今日からは乃本文造源希典ぢや」

さうして彼の父は其鹿島立ちを紀念した。

父季十郎から玉本文之進に宛てた手紙を手にして前途の光明に胸を躍らせ乍ら、希典が家を出たのはそれから暫くしてからであつた。

無人の乃木希典は斯うして萩へ出て貧弱な姿を、玉本文之進の玄關に現はした。

「御免下さい、御免下さい」

余程経つて希典の前に背の高い、色の黒い文之進が立つた。

誰ぢや、何の用ぢや」

「私は長府から参りました、乃本文造でござります、父上のお手紙を先づ御覽下さりませ」

文之進は季十郎の添書を読んで文造の來意を直接に尋ねた。

「何しに來た」

「はい、文造儀生來虚弱でござります、少しは時勢に鑑みる事もござりますので、

以來は學問で御國のために盡し度う覺えます、何卒御門人の中へ加へさせられて、何かと御教授をお願ひ申します」

文之進はそれを聞くと、不興氣になつた、

「お前は武士の子ではないのか」

「はい、武士の子でござります」

「武士の家に生まれたに相違ないが今、何と言ふた、もう一度申してみよ」

「武士の家に生まれながら虚弱の性質、武藝を以つて一人前となる見込みもござりませぬで、専心學問を修めたいと心得ます」

「その口上なら乃公は聞かぬ、武士の家に生まれて武道を全うする事が出来ずば百姓になつたが好いぞ、百姓に」

文造は只黙つて垂頭いてゐた。

『百姓になれずば、長府へ歸つたが好い、左様な不心得者は當家には置かれぬ』
文之進は激しい言葉を彼に浴びせて奥の間深く姿を隠くした。

折角青雲の志を抱いて學若不成死不歸と決心して家を出た希典は沙漠に取り
殘された様に只呆然としてゐるばかりであつた『武士になれずば百姓になれ』との
不可思議な言葉を幾多も口の中に囁き乍ら彼は悄悄と歸りかけたが直ちに彼の腦裡
には激勵した父と母と弟妹の顔が浮んで來た、何うすれば好いかさへ彼には今は判
らぬ位に當惑を感じた、やがて門を出様とする

『文造様お待ちなさい』

と女の聲が彼を呼び止めた、文造は振り返ると其處には文之進の女房のお園が立つ
てゐた。

『何か御用でござりますか』

『暫くお待ちなされませ、私取りはからふてお上げ申しませう』
直ぐに、文造を連れられたお園は夫文之進の前に手を支へた。

『文造様にも思召し違ひがござりましたが、暫く文造様を私にお預け下さりませぬ
せ、半年か一年の間には武藝御修業の爲なる様な身体にしてお目にかかけませう、
何うぞお願ひ申します』

『武士になれば止め置いて仔細ない、然し出来るか』

文之進の言葉は漸く温和になつて行つた。

『はい、必ずしてお目にかけます』

『よし、それならば置く事にする』

此一言で文造希典は再生の思ひを感じて、夫人に對する感謝の念を一層深く覺え
るのであつた。

『一年の間には立派なお身体に致します、文造様も武家に生れて學問を御修業なさ

るが見得ではござりませぬ、健やかなお身体にお爲りなされませ、さうして武藝をお勵みなされませ」

喜悅に満ちた心には此激勵に碎身の勇を誓はねばならなかつた。

文造はお園の袖に縋り、お園の詞に従つて身体を鍊る事を誓ひ其日から玉木家の一人となる事が出来、季十郎の厳格な教育から、續いて愈々此處で希典はスパルタ式訓練に依つて心身を磨く事になつたのである。

野中の教訓

『武士は須らく百姓をせよ、百姓をして健實な精神を養へ』と言ふのが玉木文造の主義であつた、土に親しみ、太陽に親しんで大自然から純な元始的人間性を覺醒させた上一流の武士的訓練をしようとするのであつた、彼の維新革命の原動力を作

つた吉田寅次郎松陰も、さうした彼の教育法から生れた、偉人であつた。其文之進の家に居住する事が出来た希典も例に洩れず、直ぐ翌朝から裏の畑の手傳ひをさせられた、お園も良人に言つた責任上からでも一人前の身体にせねばならなかつたので彼女は一子彦介に注いだ以上の愛を文造に與へて日々、畑をして、草を刈り種子を蒔いた。

『文造様、あなたは源頼朝を何う思ひます。骨肉を殺害した偏執の人でござつたらうか又大豪傑でござりましたらうか』

お園は草を刈る手を休めて文造の面を見た。

『はい、私は英雄豪傑ではないと思ひます、あの義經を殺し、範頼を死なした等は自ら手足を食つたのではござりませぬか、先見の明が無かつた様に覺えます』

『それは余り片寄つた考へではありますまいか、私は考へまするが天皇陛下に對して盡した心は天晴英雄の名に負きませぬと思ひます、尤も女の私等には心事は付

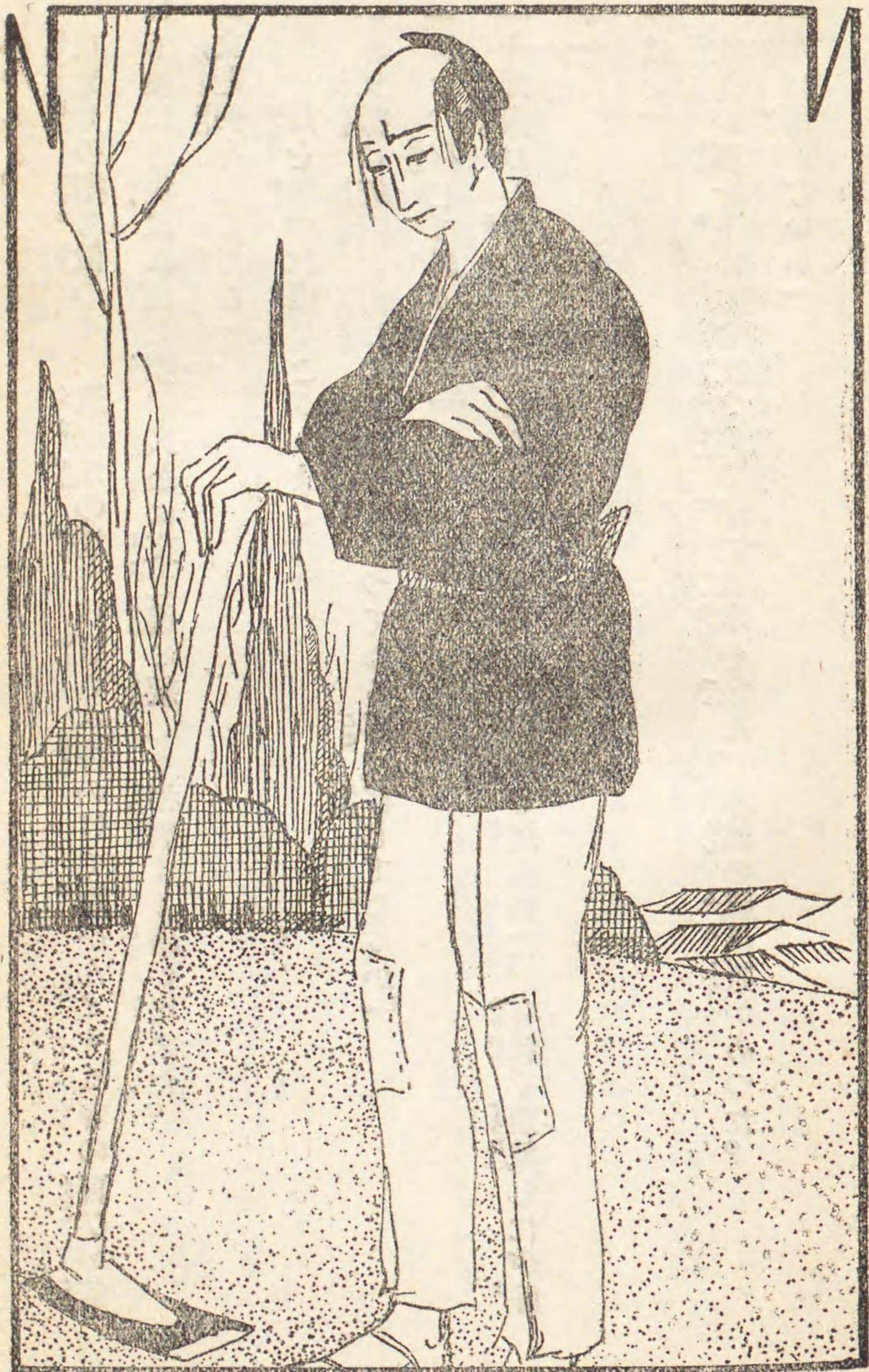
知る事が出来ませぬが、日本外史といふ書物が好い知恵を貸して呉れます』

『では今夜よく考へて見ましよう』

文造は夜に入つてから書物を調べては明日の返答をせなければならなかつた、さうして彼は一生懸命に英雄の人物論に頭を練つた。

頼朝の答へが終ると今度は正成、それから尊氏、それから正儀と次第々に種々な人達の上に批評を下して行くのであつた、斯く三月四月を送つて三段六畝の田地を耕作したのであつたが文之進からは、一冊の本すら教へて呉れぬので文造の心には不満の念が芽を出して來た。

彼が父母の膝下を離れて萩まで來たのは何も耕作をするのが目的ではなかつた彼には、せめて明倫館へも通つて國家の爲めに利益し得る大學問をする爲であつた、それなのに毎日毎日、天の明ける時から彼は土をいぢらねばならない、何と言ふ馬鹿々々しい事であらうと、文造は此頃では、ともすれば畑に立つて考へ込む様になつ



たのである。

東光寺の櫻も散つて、玖摩川の堤には石さへ押のけて延びんとする春の喜びが草にも樹にも現はれ出た頃、文造は文之進と親しう相對する事が出来た。

『文造何をしてゐる』

『今、畑を終つた處でござりました』

『お父様は近頃、山口にお出でになつてゐる事は存じてゐるか』

『はい、存じて居ります』

『十郎殿はお身の事を忘れられぬ、今日この御本を送られた、有難く頂戴したが好い』

『はい』

文造が面を上げると文之進の手には本を包んだ木綿の風呂敷があつた。
『今は用がないか』

『ござりませぬ』

『それなら、屋敷の草を除つて呉れ』

文之進はさう言つて又出かけて行つた、文造は父から送られた心盡しの風呂敷包みを見たらうて仕方がなかつたが又蔓つた夏草を除らねばならない身であつた。

漸く夕飯を終つてから彼は薄暗い行燈の心を掻き立て、始めて風呂敷包みを解く事が出来た、裡には山鹿素行の中朝事實と、吉田松陰の武教全書との五六冊、しかもそれは丁寧に寫された寫本であつた。

『あつ』

希典は聲を擧げずには居られなかつた、何れもこれも彼の父の筆の跡、しかもそれは大分勤務の餘暇や非番の日を休息もせず愛兒のために書いた慈悲の籠つた尊いものであつた。

思はず涙を二三滴落した希典は父の情けを思ふにつけ更に奮勵して死すとも最後

の月桂冠を戴かなければならないと確い決心した、田畑を耕作されても、それを忍んで体力を養ふ筈であつたのだが

『私が悪うござりましたお父上、何卒御許し上さりませ』

思はずも、希典は頭を下げた。

『此寫本の一字々々にお父上のお心が籠つてござります。此寫本を拜讀するのはお父上の御教訓を目の前に承ると同じ事、このお筆跡を父上の御顔と拜見いたします』

子を愛する季十郎の眞心が不満であつた希典の心に植えられて深く骨まで徹せねば置かなかつた、希典は新たな書物に對して新たな努力を拂ひながら夜の更けるまで讀み續けてゐた。

『文造、草を取つたか』

翌朝、朝風く起きると直ぐに文之進にかう尋ねられた。

『大略取りました』

『大略では可かぬ、一本も残らず除れ』

さうして亦耕作を強いられた、午後過ぎて歸つて來ても文之進はかう問ふばかりであつた。

『綺麗に除つたか』

『はい、一本もござりませぬ』

『では隣屋敷のも除れ』

彼の口からは、何一つ教へられなんだ、只草除の後にはお園の野中の教訓が又始まる。

其日お園は半丁程地下にある松下村塾の小さな屋根を指しながら、我子の如くした吉田松陰の事蹟を語つた。

『寅次郎殿も健康な身体ではなかつたがな、毎日ダイガラで米を搗かれたも一つは』

身体を養ふ爲と思はれた、そして米を搗きながら書物を讀んだ、史記の講義はこのダイガラの上でされ、二十三枚の講義が終る頃には白の米が白けてゐたさうな』
文造は只黙つてそれを聞いてゐる。

『實に寅次郎殿の事を話すと私は何日も涙が溢れる、公儀のお疑ひを受けて入牢した事は二度もあつたがつひぞ、悪びれた事がなかつた、寅次郎殿は組衆から卑められる身であつたが胸には山鹿甚五左衛門先生の魂を宿してゐた、お、此間は父上が中朝事實を送つて來られたさうなが、それこそ山鹿先生が赤穂にお預けとなつて居られた時の御著述、日本の國体を細々と説かせられてゐるさうぢや、寅次郎殿も好きぢやつたが、旦那様も身を入れて讀まれる、何でも日本に生を享けた者は此御本に依つて建國の精神を忘れてはならぬと言ふ、お心をこめて讀まねばなりません』
『有難うござります、私も其事に心懸けて居ります』
『寅次郎殿も山鹿様のお心を心として死後の譽れを揚げ申された、常に至誠に動か

ぬ者はない、誠は私のない心から生じ、誠を以つてすれば心なき巖石も亦動くと言つて居られた、冤枉の罪に依つて死なれたが、ダイガラや、松下村塾には未だ寅次郎殿のお心が残つて居る』
文造は感激した面を亢奮させて、情あるお園の教訓を深く腦裡にきざみつけたのであつた、朝は露を踏んで田園に立つ中にも希典の肉体は日の恵みを受けて完全に發育して行つて、長府時代とは見違へるばかりとなつて來た。
今まで黙々として耕作ばかりを強いた文之進もこれなら大丈夫と心に感じて遂に文造を明倫館へ通學させるに至つた、慶應二年の五月、文造が十八才の時である。
父、十郎好みの筒袖に白地小倉織の袴を穿つて腰の物だけは鬼丸作りの立派な刀を挿して着物は夏冬の差別がなく、例の郡山染の木綿着を着て破れば觀世然りて郷りながら、明倫館へ通ひ續けて、歸宅をすると直ぐ裏の田所山へ草刈りに出かけてこれを馬の飼糧ともし用地の肥料ともなした。

處が此處に思ひも寄らぬ事件が出来して希典は武士として第一の初陣をしなければならなくなつた。

例の長州征伐以來長州に對する幕府の待遇は峻烈を極めて來て『國主毛利父子は脱走の七郷と共に江戸へ參るべし』との命令が廣島にゐた徳川慶勝から報知せられた。

『三家老を斬つて謝罪した上は、國主自ら江戸へ出るには及びませぬが』

と辯明しても幕府は塚原但馬守、御手洗幹一郎の二人に命じて更に命令を斷行しよう企てゝゐた、勿論長州藩では容易に従はずして談判を開いてゐる最中に、傑物高杉晋作は奇兵隊を組織して俗論黨と戦ひながら、遂に萩の本城へ押しかけた、そして藩公が福原、國司、益田の三家老を殺して幕府に謝罪したのは武士道にあるまじき恥辱として俗論黨を襲撃したので、これを動機として鬱勃としてゐた反幕府の色彩は此處に殻を破つて長藩は次第に尊王攘夷論を露骨に現はして行つたのであ

つた。

幕府ではそれでも弱らず小笠原家へ毛利父子を兵力を以つても連れ戻れど命令を下したので、小笠原家では長府の城を乗取るために小倉の大兵を田の浦に上陸させて、砲列も敷いて準備を急いでゐた。

戦雲斯くの如く急となつては長藩は直ぐに報國隊を組織して此の小倉兵に對抗する事になつてゐたが、赤間關を襲撃して來た一隊に備ふるため、報國隊は赤間關に屯させられたのである、この報國隊には、藩主を案じ、父母兄妹を慮つた文造が、

武人としての功を樹てるために加入して居つた。

やがて田の浦から開戦の第一聲を擧げて來たので、奇兵隊や、報國隊は舟を馳せて上陸し三方から挾撃して小倉兵を惱ませたが、十七日に至つて敵は死傷千有餘人を殘して大里へ退却し遂に小倉城へ放火して逃げ去つて仕舞つた。

長府兵の意氣は天を突いて、文造も山砲一門に依つて奮闘し足甲に擦過傷を受け

たがこれが、文造希典の初陣となつた、十月初旬に戦が収まると、文造は再び萩へ歸つて明倫館へ通學する勇ましい姿を見せた。

兄弟の水盃

赤間關の一戦に戦争の第一經驗を知つた希典は更に臆白な明倫館の通學を始めたが嘗て『乃木ナキト』と嘲笑された文造は其處にもやはり黙々としてばかりゐた、戦争事を始めても、鬼ごつこの如き遊戯をやつても彼は仲間にも入らずに唯黙つてそれを見てゐるのであつたから遂に『馬鹿ではあるまいか』と誹られ『浪人者の學問をする玉木の親類』と蹂まれて文武兩道を勵んでゐた。

慶應の年も過ぎて行く中に維新の大業は漸く成つて尊王論は當然の勝利を得て、徳川慶喜は慶應三年十月十四日に至つて、大政を奉還し、朝廷は全年十二月九日に

王政復古の大令を發したのであつた、鳥羽伏見の合戦も、上野、五稜廓の籠城も、もう今では龍車に及向ふ螳螂の斧に過ぎない、新しい生々した明治の新时代が、もう直ぐ足元へ迫つて來てゐたのもあつたから、明治初年になると明倫館も遂に山口に移される事になつたので文造は此處に退校して、養育された玉木文之進夫妻の下から離れて懐つかしい長府の父母の膝下へ戻つて行く事になつた。

第二の故郷であつた萩の町、殊に父母にも優つて教導された玉木文之進に別れる事は未だ二十才の彼には随分つらい事に相違なかつた、自分が耕作した田地畑お園から諭された此處彼處の木蔭、それ等は皆一つとして彼の思出の種とならないものはなかつたが、移り行く天下の形勢と、邦家のために彼は振り切つて雄々しくも歸らねばならなかつた。

遂に六月に入つた或日、文造は蟬時雨を浴びて萩を辭した、長府へ歸ると早速に『豊國隊讀書掛』に任命せられたが翌年は『佛式操練傳習』のため大村益次郎の監

督した伏見親兵兵營に入營して帝國軍人としての第一歩を進めた。

御親兵は實に現時の近衛兵であつたが文造は専念の勉勵して模範となり、助手となり、遂に教官を拜命する様になつた。

そして豊浦藩陸軍練兵教官に命せられて竹馬の友であつた人達に佛式操練を教授する地位に立つたが此處にお上の御用で、文造は同じ藩の者三十余名と共に東京へ召される事になつた、それは他ではなく軍人としての官職を授けられるのであつて其時同行した家中一の俊才の本庄正一は大尉に報國隊の參謀長の福原和雄は中佐に其他は少尉中尉大尉と夫々拜命される中に、不思議にも卑怯兒と言はれた乃木希典は陸軍少佐に任せられた。

平常嘲笑してゐた人達は驚愕の眼を見張るばかりであつたが、希典の面には流石に快い笑が漂ふてゐた。

翌日東京鎮臺第二分營出張を命せられて仙臺に赴き正七位に叙せられると此度は

東京鎮臺第三分營第二心得としられて名古屋へ着任した。

それから又轉々と職務を變せられながら二十七才に至つて熊本鎮臺歩兵第十四聯隊長心得として小倉の聯隊に勤める事になり軍人として目醒しい活躍は漸く開始されんとした。

彼が此榮職を得て得意の日を迎へる中にも弟の眞人は二十二才の年を迎へて萩に居つた。

希典よりは活潑で體格も良く土地の人達からも賞められて、遂に玉木文之進の養子となつたが何故か官職にも就かずに農業の側に文武兩道を研いて居つた。

丁度其頃、萩には村田清風や玉本文之進に仕込まれた前原一誠が居た『忠孝兩道の豪物一誠の忠義孝行には誰人も及ぶ者がござらぬ』と言はれる程優ぐれてゐた傑物であつた。

賞典祿六百石を賜ひ越後府の判事を拜命して明治二年には參議となり兵部大輔に轉

六〇
じ廟堂にも重きを置かれたが大官連と議論をして職を罷め萩へ歸つて閑居して仕舞つた。

一誠には満々たる政治上の不平が彼の胸に溢れてゐた、それは郡縣制を主義としたのであつたが當時廟堂の大官が獨斷に事を決して少しも民意を酌量せず、封建状態に外ならなかつたので此大弊害を除くためには君側の奸物を倒す外はないといふ主意で、より／＼に同志を集めてゐたのであつた。

その前原一誠が萩に住居して彼の計畫を進めてゐた。

人望ある一誠の意圖には直ちに續々として賛成の加入者を見た、弟の佐瀬三郎、山田穎太郎、横山俊彦、奥平謙輔等の傑物が集つて行く、希典の弟の眞人正誼、當時玉本文之進の養子となつてゐたが彼は文之進の門人百余名の眞先きとなつて此企に加盟した。

愈々事を擧げようとする少し前の明治九年の九月の上旬、眞人は當時東京に居住

してゐた父の十郎等に最後の暇を願ふために東京へ出て來た。

そんな企てを露知らぬ十郎は好物の酒を飲みながら越ヶ濱や、城山の景色や、萩の様子を聞き乍ら懐かしい時間を費した。

『前原さんは大層評判が宜しいのう 東京でも薩摩の西郷か長門の前原かと賞め讃へるが、玉木翁とは格別の間柄で時々は玖摩川へ舟を出さうぢやが、近頃でも變らぬか』

『はい、やはり親しいお交際を續けて居られます、然し前原先生には何か御不平があらせられるとか申しまして』

『不平？』

眞人の面を眺めた十郎の聲は曇つた。

『人間誠意を以つて終始するのに不平等あり得べき筈がない』

『然し前原先生は君側の奸を除きたいと申されます』

眞人の聲は力が籠つてゐた。

『今日の様に奸佞の徒が君側にあつては明治維新の大業も遂に無意味に終ります』

『夫なら何故廟堂に立つて公議を主張なされるのぢや、自分から逃げ出して置いて犬の遠吠は全く其意を得んからな』

『前原先生には又其主義がござります故、さう一概にも申されませぬが、玉木の養父も前原先生の御議論には多少耳を傾けて居られます』

『さうか、玉木様は他人の不平に與される人ではない』

眞人は幾度も前原一誠の計畫を話して今生の決別をせんと思つてゐたが會話が此處に至つてはそれに就いては一言半句も言ひ出す事が出来なくなつた、機會を失した眞人はもう何事も語るまいと覺悟して幸ひに官軍を撃破して長驅東京に入れば兎に角、もう此世では、お目にかゝる事もないと父にも母にも永別を思乍ら彼は暇を告げて、兄希典の居る小倉へと急行した。

それは彼の兄に對する暇乞ひではなくて實は味方に付けるべき前原一誠からの重大な任務を持たされて行つたのであつた。

その日希典は聯隊の書類を調べてゐる時に執次が弟の來着を報じて來た。

『玉木正誼さんがお出でになりました』

『うむ、此方へ通せ』

やがて、弟の玉木正誼は兄の前に立つた。

『何の用で來た』

『は、御相談があつて參りました、只今東京からの歸りですが、お父様も御機嫌がよろしうござりました』

『さうか、その相談を先へ聞かう』

『前原先生の御命令です、兄さんの心事を承つて秘密の御相談を願ひたいのです』

『さうか、一寸待つて呉れ』

何事にも用心深い少佐は此時話の半ばに立上つて部下の尉官に次の間から兄弟の
おうとう 應答を聴かす様にした、それは嫌疑を避ける用心からであつた。

『さア聴かう』

再び弟の前に坐つた希典はさう言つた。

『前原先生は此度深く思ひ立たせられて兄様をお招きになります、一度萩へお越し
くだ 下さることは出来ませんか』

『乃公は天皇陛下の軍人ぢや、その心で物を言へ』

『前原先生の思召しも陛下にお叛きなさるお心ではございません、只君側に蔓つて
ある……』 ゐる……』

『貴様は前原さんの企てに同意したか、それを聞かう』

少佐の意氣は昂つた。

『私は前原先生の御主意を正當と認めまして一命を捧げて先生の幕下に加はりまし

た、兄さんも何卒先生のためにお力をお貸し下さいませんか』

『前原さんの企は叛逆ぢや、理由は兎も角も、叛逆に大義名分は無からう』

『ではお味方なされませんか』

『私は陛下の軍人ぢや、陛下の御諚以外には動く事は出来ない』

緊張した沈黙が暫く續くと悲痛な面を上げて正誼は言つた

『では仕方がございません』

『うむ、お前も立派に死ぬがよからう』

『は、見事に死にます、假令賊名は受けても先生のために私は死にます』

『よし、ではこれが別れぢや』

希典は手を叩いて酒肴を命じたが、老僕の持つて來た乾鯛と酒を見て

『酒は駄目だ、水ぢや水ぢや』

やがて、水盃は兄より弟へ、弟より兄へ此世の永別のために交はされた。

『夫ではこれでお別れします』

眞人の正誼は立上つて、さう言つた。

『確乎遣れ、そして立派に死ね』

弟に送る兄の餞別はこれであつた。

『兄さんも確乎お遣りなさい、勝利は官軍にあるとは極つては居りません』

弟は雄々しい言葉を残して立去つて行つた、再び見る事が出来ぬ正誼の姿を希典

はヂツと眺めてゐたが、やがて職務のために前原一誠の反旗を翻す旨を陸軍省へ電

報を打つた。

國家のためとは言へ希典は唯一人よりない弟の身を思ふと實に血の涙を喰む思ひがした。

玉木父子の最後

前原一誠は果して叛逆の準備怠りなく兵を擧げる事に全力を振つたが、乃木少佐の打電に依つて状況を知つた其筋は先づ機先を制せんものと直ちに廣島鎮臺に對して動員令を布いた、敵の準備の成らぬ中と廣島の一部隊は晝夜兼行早くも山口へ進軍して行つた。

萩にある前原黨でもこれを聞かぬ譯はない、直ちに戰鬪の準備に掛つて、大事を踏み一步退いて須佐へ本營を置いて決死の覺悟を示してゐた。

萩を死守して祖先墳墓の地に止つてこそ志氣の上にも効果があるのであつたが、未だ花々しい一戦さへ交へずに早くも退却を考慮するのは、玉木正誼に依つては甚だ不満な謀計であつたが、事此處に定まる上に於ては仕方がない、今更女々しい口情

を述べるよりも勇ましく長州武士の骨を見せようと、真人の正誼は前原兄弟の本隊よりは離れて、愛する萩の城下はづれの大橋に、前哨線を布いて官軍を迎へる事になつた。

官軍進出の續々とした報告を耳にし乍ら、正誼は今日を最後と心を決めて、妻の豊子に別れを述べた、當時彼女は岩田帯を壽く身ではあつたが流石に武士の妻としての健氣さを見せて涙一滴落さなかつた。

『父子の縁を薄くとも腹の子は天晴私の跡継ぎぢや、若し男子なら父の汚名を雪ぐ武士にさせて呉れ、この子の後見は敵の聯隊長乃木希典殿ぢやから』
悲痛を極めた正誼の聲が豊子の耳の底へ響いた。

『お父様も、お母様も豊子の事はお願ひ申します』
と一言を残して物の具に身を堅めた彼は勇ましく萩の城下さして出かけて行つた、送る者も送らるゝ者もこれが一生の決別とは神ならぬ身の知る由もない。

其時陸軍少佐乃木希典も第十四聯隊の健兒を卒ゐて國境まで進出して萩の形勢如何に依つては直ちに攻撃をする機を待つて居つたのである。

果然萩を中心に大激戦が開始されたが、兵力から言つても武器の上から見ても勝利はもう決つたも同然である、前原軍の參謀の奥平謙輔を如め其他の者は悉く萩を去つて退却して行かねばならなかつた。然し正誼のみは數十倍の官軍に對抗して目醒しい奮闘を續けてゐた。

名を思ふ玉木正誼の武者振りは花々しいものであつたが哀れ強烈な官軍の追撃には敵し難く遂に二十三才を一期として大橋々上に勇ましくも露と散つた、それは明治九年十月三十一日の事である。

正誼の戦死と敵軍退却を耳にすると乃木少佐は酒樽の鏡を抜いて、
『さ、賊も亡びる、勝軍の祝ひに大に飲め』
と將卒と共に盃を傾けた。

蓋し其心中には幼時より苦しみを分け合つた唯一人の眞人のために萬斛の熱涙を流してゐたのに違ひはない。主義のためとは言へ肉身の兄弟が敵と味方に別れて戦ふ事は血生臭い戦國の世にも實際悲壯なものと言はれてゐた。

丁度保元の亂に源義朝は父爲義と弟爲朝等を敵として争鬪をした、古來の歴史家、儒者、武士等は口を極めて其行動を非難し、徳川光圀すら大日本史の中の叛臣傳に彼を加へたばかりでなく、俳諧にすら『義朝の心に似たり秋の風』と咏じられてゐるが、義朝が肉親と敵對したのも後白河の勅詔に依つたからであつて、崇徳上皇の御召に依る爲義にも正當な理由があつた如く、一天萬乘の大君から下された御詔には義朝は何物をも捨て、従つたのであつた、これを思ふて乃木希典の小倉からの弟に對して行爲を思ふ時には、義朝より以上に明白な大義名分があつたげに同情の念を起さずには居られない、同様に叛逆とは言へ邦家を思ふ赤誠を考へると正

誼に對しても反逆者といふ汚名は何うしても與へられなくなる。

偕て主力を失つた前原一誠の反逆軍はもう壊滅の外に途はない、主謀者前原一誠は捕へられて此處に亂は全く平らになつた、そして直ぐに彼は殺されて仕舞つた前原の亂は平定して萩の城下には平和の日が再び訪づれて來たが、王木文之進の胸に湧いた苦悶は収まらなかつた。

山鹿奉行を崇敬し大義名分を口にして、吉田松陰までを門下から出しながら、彼の門下から、否現在子とした者からも反逆者を出したといふ事は邦家のためからであつたとは言へ剛直にして純潔を尙ふ彼には人一倍惱ましい事であつた。

遂に正誼の死去した五日後の十一月六日、自分の家から反逆の賊徒を出して朝廷に對し相すまぬと言つて、先祖代々の墓所の前で、古武士の如き玉木文之進は、六十七才の皺腹を切つて死んだ、最初二寸ばかり割腹をしたが後日墓參する者が嫌やがつてはと、切り掛けた腹を押へて一段高い墓の背後へ廻つて、此處に潔く見事な

最後を遂げたのであつた。

愛弟正誼を失ふて内心哀悼の念の淺からぬ乃木希典少佐には今亦、父とも慕ひ、師とも仰ぐ、玉木文之進に別れねばならなくなつて兵營の窓越しに遠く萩の空を眺めては、過ぎ來し方を思ふて人知れず軍服の袖に涙を拭ふた事もあつたに違ひがなからう。

小倉聯隊長としての乃木少佐は軍人精神を肝に銘じて其行動は天晴帝國軍人の模範とも見られた、教練に日常に『凝つては百鍊の鐵となり、發しては萬朶の櫻となる』と藤田東湖の詩歌其儘、凡て戦闘を基準として嚴格を極めたが一度彼が官舎に戻ると其處には無位無官の乃木希典の面目があつた、訪問者があれは彼は必ず大飄箆の口から馬柄杓に酒を注いで飲ます事を忘れなんだ、そして大に飲んで大に氣焔を吐いてゐた。

これより先に其年の十月、福岡縣秋月に暴徒が起つて今にも小倉へ押し寄せて來

る噂さが聞え、これは萩の前原一誠と呼應して擧兵したといふ風説さへ加つたので同月下旬に遂に賊徒追討のために小倉城に警備を布いて乃木少佐は筑前秋月に出張して行つたが事變は直ぐに平定したので、彼は小倉營所司令官の兼務を命ぜられた。秋月の暴徒は斯く無雜作に平定を見たが、此處には、より大なる事變が沈黙の中に彼を待つてゐた。

明治十年の正月、まだ養蘇の香ひさへ失せぬと言ふ頃に、鹿兒島私學校の生徒達は政府の彈藥庫を襲ふてこれを掠奪し、薩摩日向の國境三太郎山の險を越えて熊本へ進發して來たのである。

乃木希典と重大な關係を生じた西南戦争は斯くして序幕を切つて落された。

鹿兒島縣下の暴徒に對して警備を嚴にするために、時の熊本鎮臺司令官陸軍少將谷干城は第十四聯隊長に對して一箇中隊を長崎へ、二箇中隊を久留米へ派遣する事を命じた。

直ちに福岡に居た第三大隊の一箇中隊は北楯大尉引卒の下に長崎へ海路を取り、第一大隊の第三第四の兩中尉は雪まじりの冬の日に久留米へ向つて出立した。

乃木希典は同時に少數の幕僚を従へて小倉を發し翌十四日の夕方までに馬を走らせて、熊本城に赴いた。

城内には會議の眞最中であつたが、やがて籠城と決定を見たので、乃木少佐は翌日筑後、府中に歸つて舍營の準備から熊本龍城の必要兵糧を買收して久留米に戻り十六日左半大隊の先着兵と後續部隊と共に熊本へ入城の出勤を命令し、福岡に飛んだ第三大隊(一中隊缺)にこれも出勤準備を傳へ、小倉の第一第二大隊(二箇中隊缺)にも出發を命じて自分は「直ちに入城せよ」との熊本からの電報のために撰技士官河原林少尉に聯隊旗を持たせて、唯二人馬首を駢べて久留米に急行し南の關に到つて各隊の前進及び其他の事務を指揮した。

左半大隊を急に熊本へ動かさせたのは實に此時であつた、乃木少佐の率ゐる兵卒は

これより西郷隆盛を將とする薩南健兒を向ふにして大激戦を演出せんとして正に驟雨到らんとして風樓に滿つる有様を示した。

聯隊旗を失ふ

十八日進發した古谷軍曹の斥候は暴行する熊本士族の眼を逃がれて間道を傳ふて木葉町へ出て來た、家財家具を背にして續々と避難して來る者に、

「熊本の様子は何うぢや」

と尋ねたが、彼等は聲を慄はせて

「はい、もう戦争が始まつて、大砲の音が聞えて居りました」

と言ふ答を得るばかりであつた、古谷軍曹は、驚いて高見へ上つて見ると、熊本之城には熾々たる火の手か天に柱して物凄く有様を物語つてゐる。

山伏塚から歩哨線を破つて熊本城内へ入り込んで彼は谷少將の前に立つた、そして乃木聯隊長の命令を傳達した。

『兵糧庫に火が入つたのう』

自若として谷干城は言ひ乍ら

『御苦勞ぢや、まア濁酒でも飲んで行け』

と勧めたが、軍曹は直ぐに歸來して、左半大隊が植木坂を確實に占領しようとしてゐる處に『速に入城せよ』との命令を傳へた。

吉山中隊長は急遽隊伍を整へて其夜の十時頃に堂々と入城して仕舞つたが、征討の詔が熊本鎮臺へ着いたのは翌日の二十日であつた。

一方小倉に在る部隊は出發中に新らしき武器スナイドル銃の精銳を手に入れて、意氣天を突いて熊本へと進んでゐる。

此時乃木聯隊長は河原林少尉と共に南の關を出發した第三大隊の先頭にあつた。

『熊本城は己に賊の重圍に陥入り、彈藥庫は焼けて落城近きにあり』といふ風噂を耳にして『己れつ』と勇み立ちながら、全部隊を植木驛の近くに進め、西南に散兵線を敷いて敵に對した、折しも早や暮れかゝる空から白い粉雪が敵と味方の上に降りかゝつて來た。

突然向坂の森林中から開戦を挑む銃聲が暗を破つて天地に響いた。

乃木少佐は僅かな味方の兵數を隠して、地物に據つて戦闘の準備をした、此時に一團の抜刀隊が喊聲を擧げて突撃をして來たので、第四中隊は直ぐに應戦して第一の火蓋を切つた。

敵兵は直ぐに退却をしたが夜の九時には甚だしく猛烈な勢を以つて敵兵は夜襲を企て、來た、僅少の兵力より持たぬ味方は次第に苦境に迫つて、坂垣義成少尉も此處に重傷を負ふて仕舞つた。

敵は更に白兵戦を演ずるために死物狂ひで攻めかけた、今の戦術から見れば極め

て幼稚な元始的なものであつたが、生還を期せぬ奮戦亂闘には士氣の横溢するのが見えた、殊に戦ふは九州男子と誇る薩摩武士と小倉健兒である。

寄せては返し亦寄せる一勝一敗の肉弾戦には結局兵力の優が直ちに勝利の榮を占めるもので、斯うなると百姓兵の官軍は、隠れたる援助者を持つ賊軍に對して少なからぬ不利な地位にあつた。

戦ふ中に各線からは應援隊を求むる傳令が飛び危険の情態が次第次第に眼に見えて來た。

遂に優勢な賊軍は左右に翼を延ばして此處に完全に植木の市街さへも包圍して仕舞つた。

死地に立つた乃木聯隊長は、聯隊旗手河原林少尉を顧みて言つた、

『形勢が悪くなつた、勝敗は時の運だが、軍旗を無くしては相成らん、敵の目に付かぬやう始末をしろ』

もう勝負よりも軍旗ばかりの問題が残された程余裕はない。

『何うしましょう』

『幾重にも折つて負へ、爾して身を持つて堅く守れよ』

少尉は聯隊長の言葉のまゝ、に長く疊んで背に負ふと、それを見た乃木少佐は直ぐに樫木軍曹外拾數名に命じて植木の町に火を放けさせる事にした、斯くして退却しようど決心してゐたのであつた。

聯隊長の計畫では夜の拾二時までは是が非でも其處を扼守して拾二時の合圖に退却するのであつたが、悲しい哉もう其處には吉松大隊へも全部隊へも報告する健全なる兵士さへ居らなんだ、只負傷兵と軍旗を守護した河原林少尉の姿ばかりが、淋しさうであつた、仕方がないので聯隊長自ら傳令の任に服して暫時貧弱な聯隊本部を離れる事にした。

此中にも樫木軍曹等の放つた火は植木の町に燃え立つて、折柄の北風に煽られて

焔々とした火の手を擧げ出した。

『此處を動いてはならんぞ、お前の脊後には大切な軍旗がある、私が歸るまでは此處を死守して呉れなければならぬ』

暗の中を飛ぶ彈丸の音の合間合間に乃木少佐は幾度も言ひ残して、右翼の戦線の方へ飛んで行つた。

跡には負傷したと言へ意氣天を突く兵卒と、白兵戦に一度も参加せぬ河原林少尉とが、折々起る前方の鬨聲に心を緊張され乍ら、大切な軍旗と聯隊本部を守つてゐた。

河原林少尉は先刻からムヅ／＼してゐたが聯隊長は不在だし、軍旗は脊にしたのでもう自分自身の自由の身体の様に思へて今にも一人でも敵を切つて小倉健兒の腕を見せようと考へ出した。

『何時ごろでしような』

手を切られた兵士は漸く痛みも薄らいだのでかう尋ねる、河原林少尉は焚火の傍へ寄り乍ら懐中の時計を出すと其時は十時を少し廻つてゐた。

『もう少しだぞ』

彼は皆にかう言つて、志氣を振興さす事に努めた。

折柄、突然前方近くに敵の鬨聲が起つて、夜目にも明かな白刃を光らせて突撃を企て、來た。

今まで我慢に我慢を續けた河原林少尉の若い血はもう勘辯は出來なんだ、否忍耐は出來ぬと言ふよりは一種の戰場特有の亢奮状態になつて彼は腰間の軍刀を引抜いて、

『そら、行け』

と言ひ乍ら暗の中を敵兵めがけて駆け出した、軽い負傷兵や、僅少な兵卒が彼の跡を追つて喚聲を立て、走つた。



これが問題の歩兵第十四聯隊の軍旗で、斯くして殉死する時まで口にした聯隊旗は乃木少佐の手から離れて行つたのであつた。
 河原林少尉を殺して軍旗を奪掠した者は、岩切正九郎と言ふ伊東隊の勇士であつ

衝突をした敵味方は夜の幕に白兵戦を開始したが、雙方共に決死の覚悟であるから一步も譲らず激しい太刀風が暗を切つたのであつた、河原林少尉も敵の三五騎を切り倒して目醒しい働きを見せて、勢ひに乗じて小高い土手へ昇らうとする處に、不突に駆け附けた一賊兵のため脊後から攻撃を受けた、彼が不圖顔を擡げた折は二尺余の太刀は少尉の脊後を深く切りつけた『遣られた』と思ひ乍ら手に持つ白刃を取直す猶豫もなく、續いて切り込む刀先きに彼は遂に其處へ倒されて仕舞つた。

武器も兵糧も軍資も少い賊兵は死体の所持品を奪ふ事も重要な事であつたから、賊も、少尉の懐中を探つて、懐中時計と軍用金百余圓を取り、更に大切に背にした物も握つて勿々の中に立ち去つて行つた。

た。

暫くすると豫定の退却を執行しようとする乃木聯隊長は傳令の任を終へて本部の地へ歸つて來たが其處には副官の渡邊中尉が焚火に手を翳してゐたばかりで肝心の旗手、河原林少尉は居らなんだ。

『河原林少尉は何うした』

乃木少佐は直ぐにさう聞いた、しかし誰もそれに答へる者はなかつた、只鮮血を浴びた一兵卒が顔を上げた。

『少尉殿は本道最後の激戦に働いて居られるのを見ました』

『え』

聯隊長の顔色はサツと變つた。

『何でも白刃を揮つて敵陣へ突進せられたやうでした』

『すると、軍旗は何うした、軍旗は』

肺肝から迸り出る様な聲が鋭く響いたけれど、其處にゐる者は唯面を見合はずばかりで、それに就いて少しでも知つてゐる者がなかつた。

『軍旗を無くしてはならん、軍旗は聯隊の生命だぞ』

然し、答へる者は空を掠める鐵砲の音ばかりであつた。

悔恨と、無念と、悲憤とが乃木少佐の胸の底から渦を巻いて起つて來た。

『殘念だ、殘念だ』

かう叫んで面を擡げると、屍の上を吹く戦場の風は生臭い匂ひを持つて來て、遠く敵陣とも見ゆる邊りには篝火が赤く燃え、恰も勝ち誇つた喜びを示すやうに見えた、乃木少佐は唯黙つて暫くそれを見つめるばかりであつた。

乃木少佐の活躍

天皇陛下より御手づから下し給ふた聯隊旗、聯隊の生命とも言ふべき軍旗、それを失ふては天皇陛下に對し奉り、陸軍に對し、鎮臺に對し、聯隊に對し、兵卒に對し、言ひ譯のない大過失であらねばならぬ假令旗手に預けても聯隊旗を守護する責任は聯隊長の兩肩にあるのは言ふ迄もないから乃木希典は聯隊長としても否唯一介の武人の立場から考へても恥辱これより大なるはない。

突然、暗に物凄い大聲を響かせた。

『前進、進め、皆續け』

見れば、乃木聯隊長は一生懸命馬に鞭つて進んで行つた、驚愕した本部の人達の若干は命令如何とも爲し難く此聲と共に續いて飛び出した。

死を思はぬ人間の前には恐ろしい何物もない、決死の覺悟の乃木少佐の狂氣じみた突進は、それは物凄いまでに悲壯なものであつた。

『聯隊長は死ぬかも知れぬ』といふ考へが誰の腦中へも閃いたので澤田大尉は栗毛の駒の轡に縋り乍ら乃木少佐を引き止めた。

『お待ちなさい、お待ちなさい、敵の重圍に陥つて犬死するよりも、後にはもつと大切な任務がありますぞ、聯隊長殿』

意氣つた馬は、首を上げて一聲高く嘶いた。

『聯隊長殿何卒お止り下さい、お願いでございます』

澤田大尉は聲を絞つて引止めると直ぐに涙を宿した乃木少佐の眼が此方を向た。

『全くだ、進んでも見込み立たぬ、悪かつた許して呉れ、止つて軍旗を取り返す方法が肝要であつたのだ』

さう考へ直して馬を返さうと手綱を絞る手に大霰がばらばらと散りかゝつて少佐

の涙とも見えた。

さうして、其夜は前の通り豫定の行動を取り乃木少佐は苦惱の一夜を過して明ければ二月二十三日、再び部署を定めて第一大隊、右半大隊を兼松驛から山鹿へ前ませ第二第三中隊と第二大隊を南の關から高津町を経て木葉に向はせた、午后一時頃、津森大尉、副官渡邊中尉を長として二十名の決死的斥候が前哨から田原坂方面へ放たれた、言ふまでもなく斥候の任務以外に聯隊旗の搜索に力を用いてゐた。

此間にも乃木少佐は戦略に意を注いで吉松少佐をして第三大隊と第二大隊の先着隊とを卒ひる事にして仕舞つたが軍旗探索の手は瞬時止めなかつた、吉松大隊長を中央方面に、渡邊中尉を左翼に乃木少佐自身は右翼方面を河原林少尉の生死と、聯隊旗の所在に努力した。

其夜も更けて霰は止んだが寒さを増した北風の中を夜露に濡れ乍ら、青山少佐の卒るる第二大隊が到着して直ちに本隊となつて木葉の出盡處を守つたが聯隊旗の所

在は何の索線も得られなかつた。

此間に豫備隊をも増加した敵兵は頻りに左翼に伸び始めて聯隊長の陣地を見かけて猛烈に突撃を企てたが直ぐに撃退されて後進して行くばかりである、本道方面で見れば敵兵は鬨聲を擧げて盛んに吉松少佐の第三大隊へ攻撃をしてゐた。

「早く應援隊を送つて下さい、それでないと本道を守る事が出来ません」
と吉松少佐からの傳令はやつて來た、軍帽のヒサシの下から眺めると、砲煙は冬の目を掩ふて漲り、鬨聲は雷の如く地を慄はせてゐた。

「早く應援を願ひます、早くお願ひ致します」
吉松大隊からの傳令は亦乃木少佐の前に立つた、應援を出し度いにも右翼も左翼も猛烈な敵の攻撃を受けて兵力の余裕等何處を見てもなかつた。

「よし」

乃木聯隊長は一言發すると何を思つたか丘上を飛び下りて驀地に本道方面へ走つ

て行つた。

第三大隊の陣地へ来て見ると其處には吉松少佐が第一線に立つて盛んに號令をかけてゐる。

「お、聯隊長殿この通りです」

乃木少佐の姿を見るとかう言つた。

「敵の切込は中々猛烈です」

「御有理ちやが、残念乍ら彼方にも兵は無いのちや、右翼も左翼も危険に迫つて援兵を出す事が出来ないのちや」

乃木聯隊長は近い右翼方面を軍刀で指示した。

「しかし此戦線に堪へる事が出来なければ私が代つて守らう、君は右翼をやつて呉れ」

厳とした聲が響いた。

「それなら應援は願ひませぬ、立派に本道を守つてみせますが、聯隊長殿は戦線の全部を御監督下さい、願ひいたします」

「さうか」

乃木少佐はかう頷いた。

「長く此處にお在でなさつては可かん、早く彼方へ行らつしやい」

「よし、さらばちや」

兩少佐は違違の間に互に笑つて別れて仕舞つたが聯隊長が本道を退くと間もなく敵は物凄い勢ひで突撃をして來た。

僅か二十名ばかりの吉松大隊は鋭い切込みには到底敵する事が出来なく、死力を盡した防禦も其効を奏せず、吉松少佐は戦死を遂げ、渡邊中尉は負傷して仕舞つた同じ頃左右翼でも猛烈な攻撃を受けたが此處も木葉附近はとも寡い兵力と疲労し切つた体軀では防ぎ切る事が出来ないので高瀬町の東方石貫村邊に退いて戦線を迫

間川の流れに敷く事にした、全線に亘つた賊の總攻撃は實際物凄いなものであつたに相違がない。

乃木少佐は漸く此方策を定むると早や其日も暮れて雨はそぼ／＼と暗の中を降りしきつてゐた、先づ左翼より順次に背進すべく命じて大室中尉に卒四十名を卒ひしめ稻佐の高丘に據つて、戦線部隊を收容させやうとした時に、敵兵數百は早くも木葉山へ廻つて来て背後から退路を絶たうと企て、右翼の青山部隊は正に危急に迫つて来た。

聯隊長は直ちに馬に鞭つて各戦線を駆け巡つたが流石の駿馬も長時間の奔走に疲れ果て、動かなくなつて仕舞つた、丁度吉松少佐の乗馬があつたので直ぐにそれに乗り換へて本道から再び稻佐の丘山へ駆け付けやうとする時早くも賊軍の一隊は岐路に出現して猛烈に狙撃したので忽ち阪谷伍長等も倒されて了つた。

漆の様な暗の中に激しい銃聲が此處彼處でも起つてゐる、不意に唸りを發して飛

んで来た一弾は乃木少佐の馬の横腹を打ち貫いた。

馬は一聲嘶くと敵陣近く駆け出してやがて挫と倒れたので、聯隊長は投げ出されて顛落をした、それと見るより敵兵は白刃を揮つて走せ集り、哀れ乃木少佐の一命は危機一髪に迫つて来た。

が其處へ運好く大橋伍長が走つて来て聯隊長の危急と見るや刃を上げて進み寄り一人の敵を遮つて組み着いたので他の數名の賊兵は忽ち伍長に肉迫して三方四方から方圍して行つた。

折柄摺澤少尉が伍長を組み敷いた賊を切つて伍長と共に木葉川を渡つて行つた、一方乃木聯隊長は此時隙を得てムク／＼と起き上り突然居合はせた一兵を切り殺し左右から組み付く二人の賊を小脇に抱へて木葉川へ洶然と飛び込んだ、敵兵は此時確實に木葉を占領して仕舞つたのであつたから乃木軍の本隊は豫定の如く高瀬方面に退却をした。

翌二十四日は殆んど前日と同じ状態を維持したばかりであつたが第一旅團長野津少將は松崎より、第二旅團長三好少將は大宰府より何づれも乃木聯隊の急を救はんと高瀬に向ひ久留米に會合の結果、新着部隊は高瀬方面を引受け、乃木聯隊は山鹿方面の敵に當る事になつた。

愈々二十六日には乃木聯隊長指揮の一個大隊を先頭に、大迫(鐵)大尉を司令とする二箇中隊を本隊とし、殿軍には大迫(尙)大尉を司令とする二箇中隊を控へ、別に長谷川大佐の率ゐる總豫備隊も揃つて此處に官軍は大舉して植木を衝く事に決した敵も流石に斯くと知つてか立願寺原に陣地を敷いて總勢幾百人、應戰の部署を定めて官軍の到來を待ち受けてゐた、尙薩摩の勇將越山休藏の率ゐる數百の一隊は高瀬方面から安樂寺へ入らうとしてゐる。

乃木聯隊が石貫を發したのは午前四時、斥候の報告に従つて尾崎大尉、高井大尉に二箇中隊を引卒せしめて川部田から敵の右翼を攻撃させようとした。

午前八時頃になつて來ると乃木聯隊の前衛に當つて激しい銃聲が起つて來た、多勢の一隊と遭遇したのであつたが、幸にも官軍方の地物は戰團には何よりも有利であつた、敵兵は見る見る中に屍の山を築いた。

然し流石に恥を知る薩南の若者は生命は既に西郷南洲先生に捧げてゐたので少しも怯まず、死体を乗り越へて彈丸の雨を浴び乍ら白刃を翳して壯烈な突撃をやつて來た、忽ち大激戰が開始されたが、白兵戰では百姓は武士の敵ではない、次第に乃木聯隊は支へ難くなつて來た。

乃木少佐は斯くと見て鞍壺に突立ち上つて

『大勢は早や定つた、敵勢には緩みが見ゆるぞ、此處を一步進めて勝利を擧げよ、生命を捨て、進んで行け、肉を彈丸にして撃ちかゝれ、他隊の援助は我隊の恥辱ぢや』

と大聲に獅子吼した。

聯隊長の此激勵に官軍は勢を得て一齋に敵壘へ肉薄して三面を圍んで仕舞つたので、流石の賊軍も陣地を捨て、背進し、乃木軍は再び木葉を占領して仕舞つた。

番を持てく

乃木少佐は木葉稻佐の間に適當の陣地を占め、共に明くるを待つて、植木坂附近の賊軍を一掃せんと希望を持つてゐたが、何う言ふ譯か後方の司令部からは頻りに退却を促して来た、乃木少佐は二十三日の恥辱を雪ぐべく敵を塵滅せしめて、喪失した聯隊旗を是非共取り返したい心であつたが命令に背く事は出来ぬので夜の中に石貫に退けば、大迫中隊も同じ理由で王名へ退却した。

官軍の主力は高瀬附近に屯してゐたが、此主力を粉粹しようとする死物狂ひの賊は大舉して攻撃を始め、右翼司令には桐野利秋、中央軍は篠原國幹、別府普介、左翼司

令には村田新八を置いて薩南の傑物を並らべて進んで来た。

官軍では間断なく偵察隊を放つて敵情を探ぐつてゐたが二十七日の午前十時頃、桐野利秋の統轄する右翼部隊が山鹿から左折して菊地川へ下り高瀬北西半里余の追間川を涉つて南の關に通ずる官軍の退路を断たうと企てゝゐた事が知れた、驚いた野津參謀長は由々しき大事と部下の一小隊を派遣して、王名村の一高地を占領させ石貫にある乃木聯隊に傳騎を走せて、川部田の渡場より進んで遙拜宮の社地を占めて敵の進軍を制する事を命令した。

此處に名に負ふ桐野利秋を將とする薩摩健兒と、軍旗を喪失して死を以つて謝罪せんと覺悟した乃木希典の率ゐる第十四聯隊の精銳とが、花火を散らして戦ふとする實に西南戦役の花とも言ふべき一戦が始つた。

桐野軍は豊富な戦術から先づ支隊を分つて山間から後方に出させ、兩方から玉名村の高地の官軍を挾撃したのであつたから腹背に敵を受けた一箇小隊は一堪りもな

退却したので桐野の主力は此時から遙拜宮を占領、乃木聯隊の一部に鋭い銃口を向けて進んで来た。

勇猛を以つて聞ゆる薩摩集人は物凄い肉弾を以つて突撃をして来たので官軍もよく戦つたが遂に二箇所の高地さへ占領しられて仕舞つたのである。

川部田の渡口にゐた、乃木聯隊長は此事を耳にして満面朱を注いで、

『よし、乃公が取り返す』

と言ふや否や、直ちに第二中隊に號令して自分は陣頭に立つて進んで行つた、時は午後五時、日は暮れんとして鈍い夕陽は西の山陰に早や春いでゐた。

本道から進んで行くに従ふて敵の射つ弾丸は雨の如く降り注いで砲煙の間に突撃してゐる賊の白刃は夕暗の中に閃めいた恰も電光のやうであつた、直ちに占領せられた遙拜宮の高地の敵に對して散兵線を布いて猛烈な攻撃を開いたが、切角占領した陣地を奪はるゝは恥辱と思ふてか敵は益々守備を堅固にして、しかも高地から瞰

下して射撃してゐる。

ピューンと音がしたと思ふと、乃木少佐は左足に生温い熱を感じ、次ぎに痛さを覺えて来た、ふと左足を見ると一弾は貫通して軍袴には鮮血が染つてゐた。

『なに、これしきの疵位』

負けず魂の少佐は苦痛を忍んで左足には草鞋をつけ、右足には長靴を穿いて、陣頭に立つてゐた、今は豫定の目的に半ば達した大切な處で、さしもの敵も稍敗色を見せた機であつたが、流石に左足の骨傷は歩行する事は出来ぬので、少佐は有り合せた繩を拾上げて疵口から疵口へ差通して二三度掃除をして思はず叫んだ。

『畚を持って』

漸く部下の兵士が農家から畚を持つて来ると、少佐は忽ちこれに乗つて二人の兵卒に擔ぎ上げさせて號令を下した。

死力を盡した官軍の攻撃にも敵は屢々退却の状を見せてゐたが尙も正面から砲弾

を浴せかけてゐたので藤井大尉も傷いて、近衛一小隊の援助を得て一步も退かずに戦つた。

野津少將は南の關から來着をして乃木軍の苦戦に心痛し山砲一門を加勢に出して、敵兵目がけて打ちかけた、此加勢に力を得乃木軍は勢に乗じて青木村の山上に進み、折柄來た、第二大隊(二小隊缺)と一箇中隊と協力して、一堪りもなく退却させて仕舞つた、時は午後の六時で早や人の顔さへも見分けられなかつた。

『久留米の病院へお入りなすつては如何でございます』

戦ひが終ると少佐の傷々しい負傷を眺めて部下の將校はかう言つたが、乃木聯隊長は

『なに、これ位』

と一言に退けて、夜は石貫、玉名の諸村に舍營した、二十八日は休戦同様だつたので警備を嚴にして守つたが左足の傷は次第に悪化して行つた、三月三日になると、

山鹿方面の桐野利秋の一隊が平山口を襲ふ形勢があつたので手薄な地点を攻められ、てはと乃木聯隊長は第二大隊に將として兵卒や車夫に例の奮を擔がせ乍ら陣頭に軍刀を持つて指揮をして進んで行つた、第二中隊は權見山に、第三中隊は白木村に、第四中隊は其右翼に向つて進み漸く敵の戦線に近づいて來ると第三大隊の第四中隊の一部隊とが加つたので味方は勢を得て猛烈に攻め立てると壘壁に據つた敵も數時間間の防禦をした後に遂に權現山を捨て、仕舞つた、翌四日には木葉から田原坂に互つて激しい戦争があつたが、苦痛を忍んでゐても左足の傷の容体は、いよ／＼不良に赴いたので五日の朝、部下の將校下士に勧められて、乃木少佐も仕方なく久留米の病院へ入院したのであつた。

喪失した軍旗の所在さへ判らず、死ぬる可き生命を全ふするため、部下に分れ、戦友に離れ、末だ勢の滅せぬ敵を見捨て、病院に入る事は乃木少佐の執る可き途ではないと思つたが、幾多の將卒に勧められては如何ともする事が出來ず、久留米

に病を養ふ身とはなつた。

何故、俺の心臓へ弾丸が當らなかつたのか、何故頭腦へは命中しなかつたのか、その方が軍旗紛失の責任に對して立派に申譯が立つてゐるのに、病室の窓から遠く熊本のを眺め乍ら乃木少佐は幾度かう思つたらう、そして其都度口癖のやうに左足の苦痛を忍んでは。

『もうこれで好い、退院だ、退院だ』

と、軍醫を困らせたのであつた。

一日、軍醫は彼の寢臺の傍に立つて淋しく電報を手渡した。

『チ、シンダ』

少佐は読み下すと、東京からの電報で彼の父、乃木十郎希次の死を報じた文面であつた。

事實、父は東京で激戦の風説を聞き乃木聯隊長戦死の噂まで耳にしたのであつた

が『戦場に行けば先づ死ぬものさ』と平然として其日も大兩の中を王子稻荷に詣でて翌日、七十四才で頓死したのであつた。

哀れ少佐は西南戦役に軍旗を紛失した無念と、父に死別した悲哀とを覚えねばならなかつた。

古武士の如き父を失つてはもう其聲咳に接する事も出来ねば、赤穂義士、山鹿素行の逸話も耳にせられない、死目にさへ會へぬのみか葬儀にさへ參せられぬ軍人の身の悲しさはヒシ／＼と胸に迫つたが、直ぐに未だ耳の底に残る父の聲音が夢の様に彼を勵とも感せられる。

『行かう戦場へ、さうだ』

と心ばかり早やり乍ら身体を起さうとすれば癒え切れぬ足の傷は一入痛さを加へて來るのであつた。

かくて無聊にして苦惱の二週間を過すと漸く傷の痛みも薄らいで來たので少佐は

未だ十分に癒切らぬ左足を曳いて退院すると直ぐ其日に木葉口の戦鬪に参加した。此時第十四聯隊は幾隊にも分れて、第一大隊は孫丸に、第二中隊は田原坂に、第三中隊は、蜂窪に第一中隊は上木葉に、第三中隊に蜂屋に、第四中隊は田原坂に歩哨線を張つてゐたが、高瀬口の總攻撃に利を失ふた敵軍は、木留と、田原口に多勢の部隊を置いて死傷等に編成を改めて靜かに戦線を守備して居た。

拂曉より沛然として降り初めた大雨は霧さへ立て籠めて咫尺を辨せぬ中を第一第二旅團に總攻撃を命じて等十四聯隊は大隊長山根大尉を先登に、乃木少佐は後軍の主腦となつて激しい攻撃戦を開始した、然しこれは一勝一敗、敵に致命傷を與へる事は出来なうだ。

處が二十二日に至ると東京大阪の兵を集めた應援旅團が到着して來たので、乃木少佐は出征第一旅團參謀兼務を命せられ、振はなかつた官軍は此處に漸く優勢となつた。

それから二十日間、乃木聯隊は各地に戦功を收めて木留から八代に移り、第三中隊は庚申の森に一中隊は乃木少佐の指揮下に邊田野山を攻撃してこれを占領した、時は午後一時、天は長閑に地には春の光りが輝いてゐたが肥薩一帯の山河には砲聲が殷々と響き渡つてゐた。

乃木少佐は例の如く決死の覺悟を以つて馬を陣頭に進めたが敵の決死隊も猛烈に突撃して來て激しい白兵戦となつた、然し如何な薩南健兒も連日の奮闘に疲勞した身体を持つてゐたので新手の軍勢には敵し得ず浮足立つて逃げ去つた、後から追ひ掛けようとする隙もあらせず四方の伏勢は一時に小銃を亂發して乃木少佐は再び左腕に貫通銃創を受けたのである。

少佐はこれに由つて亦高瀬病院に入院する事になつたが、此中に熊本城の重圍も解けて十四日には完全に連絡し、第十四聯隊は翌十五日に入城した。

乃木少佐は十八日に退院すると直ぐに熊本に入城をしたのである。

一〇六
戦闘の中にも一刻も早う軍旗を探らうとする念が腦中から去らぬ乃木少佐は二十一日に、早くも建宮口の戦ひに加はり、木山川原から矢部の水田尾邊りへ進んで行つたが此最中の二十四日に乃木希典は少佐から中佐に昇進して第十四聯隊長と出征第一旅團參謀兼務並びに小倉營所司令官心得の職を解かれて新たに熊本鎮臺參謀を命ぜられた。

然し乍ら死すとも軍旗を取り戻すと堅い決心の乃木中佐には熊本城に動かすにゐる事は少なからぬ苦痛であつたが果して一日、乃木中佐の姿は熊本城から消えて仕舞つた。

鎮臺では大に驚いて四方八方へ密偵を出して見たが杳として索線がなかつたのであつた、熊本から三里余り西の河内村に乃木中佐が農家へ姿を隠してゐる事が知れたのはそれから暫してからである密偵は直ちに事情を述べて連れて歸らうとしたが頑として聞き入れず『兒玉は大分戦争をしたから呼び戻して參謀にして下さい、小

官は微力ながら、今一度戰場へ出て花々しくお役に立つて見たい、此儀お許しを願ふ』と手紙を書いて送つた儘で、遂に七月二十日に至るまで歸らなかつた。勿論これは軍旗の申譯に死して謝さうとした心からと、それでも未だ何處にあるかも知らぬと言ふ疑ひから、人知れず所在を探ぐつてゐたのであつた。恣様にまでして探しても肝心の聯隊旗は未だ姿も見せなかつたので、乃木中佐も漸く此處に思を斷つて熊本城に歸り二十八日には敗殘の敵を追討するため二十八日に豊岡西重岡に至り、八月十六日には日向國に侵入して翌日は河山受岳に敵を撃ち、豊後竹田から肥後の高森を経て二十二日再び熊本の城へ歸つて來た、翌月九月二十四日には流石の賊軍も抵抗し得ず、故山城山に立籠つて最後の戦を試みたが、此處でも戦ひは利あらず一世の英雄、西郷隆盛も流彈に倒れたので、萬事休す、二月十五日以來官軍を惱ませた西南の役も此處に漸く平定を見て鹿兒島の街にも再び泰平の時が続いた。

其翌年十一月二十六日、乃木中佐は熊本鎮臺參謀を免せられて、東京鎮臺第一聯隊長に補せられた。

第一聯隊長に

一方河原林少尉の手から岩切正九郎の手へ移つた軍旗は何うなつたか、乃木中佐が心命を投げて搜索して知れぬ軍旗は何うなつたか、それは極めて興味ある問題である。

其時の戦況を目撃し、又は戦中事情を風聞した人達の話を綜合して最も確實と言ふべき説を認めると、岩切正九郎は軍旗を奪ふとそれを居合はせた夫卒に持たせて仕舞つたのであつたが、夫卒は懐中時計と金子ばかりを取つて肝心の軍旗を捨て、置いた。

處が亦誰か、拾つて當時宿舎になつてゐた百姓家へ歸つて竹竿に挿して床の間へ置いたのを、熊本協同隊の小隊長高田露が敵の置き忘れと思つて村田三介隊長に手渡したものであつた、村田三介は陸軍少佐となつてゐたが折柄征韓論が破裂して職を辭し西郷隆盛に殉じて故國に戻り遂に一方の雄として戦つた勇士であつた、砲煙彈雨も収まつてからでも軍旗搜索の手は軍隊や警察から扱げられてゐたが、第一に目をつけられたのは此村田三介の邸であつた、多くの密偵は入れ變り立ち變り其邸を訪づれて來たが、末亡人お澤は知らぬとばかり返答をしてゐた。その當時鹿兒島縣下方限の警察署長をしてゐた赤木義彦は折田三之介の密告によつて軍旗はいよゝ其手に隠匿されて居た事を知つて是非とも出さねばと澤子を白洲に引き出して嚴重に取調べしたが、未だ實を吐かなかつたので哺乳してゐた幼兒を引放して拘留に處すべしと威嚇し、澤子の實母からも之に説諭を加へたので遂に其所在を告白した。

欣喜雀躍した赤木署長は家宅搜索を行つた結果、天井の板の間の隙から無事に第十四聯隊旗を取り戻した、これこそ乃木中佐が寢た間も忘れぬ軍旗に外ならなかつた。

偕て第一聯隊長に任せられた乃木中佐は早速東上して、先づ父の墓に詣で鎗屋町の舊宅を買却して芝區西久保櫻川町へ借宅を得た。

此年には彼を終生内助したばかりか、共に殉じた静子夫人はお七と呼ばれて二十才の春を迎へてゐる。

背の高い色光澤もよく何時も嫣然と愛嬌を湛えて然かも飯倉の英學校でも相當の成績を収めてゐた。

乃木中佐は余りに母が家内を迎へよと勵めたので『長州の女は嫌だが鹿兒島の女なら貰ふ』と言つた言葉が母の口から伊瀬地の耳へ筒抜けとなり、伊瀬地氏は此お七に白羽の矢を立てゝゐた。

『何うちやな、乃木中佐へ嫁を遣らんか』

『やつても好いが』

と言つた簡單な會話は何日しか進んで、伊瀬地家では普請落成を名として大野津、野津、西、大島、乃木の知人を招いて酒宴を開いたが、乃木中佐に執つてはそれは見合ひ日であつた。

手傳ひに来てゐたお七の姿は直ぐに知らされて中佐も『あれなら』と承諾して婚禮談は急天直下に進行して遂に其年の九月三日、大野津鎮雄夫婦を仲人として櫻川町の乃木邸で結婚式が挙げられる事になつた。

黄道吉日のその日が来た。

親戚兩親に送られて花嫁は櫻川町の中佐の宅へ来たが待てど暮らせど花婿の姿は見えない、一同心痛最中肝心の乃木中佐は歸つて来た。

『やア』

と言ふなり野津少將を始め多くの同僚と飲み始め、三々九度の盃は辛うじて終つたが後は入亂れて双方ともへト／＼になつて酔ひ倒れて仕舞つた。

呆然としてゐる花嫁は何うして好いかさへ知らなんだが負けず嫌ひの彼女は靜かに落花狼籍たる酒宴の後仕末を付けてゐた。

かくして靜子は乃木家の人となつたが、當時其家庭には母壽子と集作、他に下女一人と馬丁一人があつた、姑、小姑の間に立つて獨り彼女は氣をもんだ事もあつた。

其頃の將校は誰も彼も酒を飲んで、戦争の話を口にせない時には亂暴をするといふ風な傾向があつたが、乃木中佐は其中に伍して聯隊の事務を執つてゐた。

漸く出来たばかりであつたから奇抜な事も多く射撃場の新設に將校兵卒に土を運ばせ時々監督に来る乃木聯隊長ですら奮擔ぎをやつた。

教練は凡て意氣其物の如く嚴格を極めて實に秋霜烈日の感がある、嚴冬手が凍え

て兵卒は銃を手にする事が出来なくなるまで

『冷水で手を洗つて拳骨で板塀を打ち毀すまで殴れ』

と令した、これが聯隊長獨特の避寒法であつた。

十二年八月二十八日に靜子は長男、勝典を生んだ、そして十三年四月二十八日に

は乃木中佐は大佐に昇進したのであつた。

その頃の兵卒が如何に戰鬥を基準として凡てに動作したかはこの話でも知れる。

一日、陸軍卿 大山巖 が人力車で聯隊の營門に入らうとする折柄、歩哨の一兵卒

は呼び止めて

『人力車の通行は許しません、歩いてお入り下さい』

と言つた、陸軍卿は大きな顔を向けて

『私は陸軍卿だ、管はん』

『いや駄目です、強つて言ふと突き殺すぞ』

と銃劔さへも突出して言つたので陸軍卿も止むを得ず車を降りて營門に入つた、この歩哨は顯官をも憚らず軍律を守つたと言ふので聯隊長は褒美をしたと言ふ事である、今日の歩哨守則と比らべると馬鹿々しい程のものであるが當時の意氣で立つた教練法が目に見える様に覺える。

乃木聯隊長は其時分盛んに豪酒をしたり料理屋の暖簾さへ潛つた、尤も軍服主義に押し通した彼は相變らず軍服で遊興をして居つたのである。

母の壽子も追々と寄る年彼に痼疾の貧血病が悪化して來たので成る可く周圍からは意志に逆らはぬ様につとめてゐたが、靜子が

『お寒くはございませんか』

と言つて羽織を被せると、叱り付けて

『そんなものはいらぬ』

と言ふて無理に反對する様な頑固な性質が見え出し、靜子の心には暗い陰が生じ

て來た、壽子と靜子との意志の衝突は其後は次第に激しさを増して遂に別居する事になり、彼女は勝典と其乳母のお兼を伴つて下谷の谷中邊へ別に小さな家を持つた靜子夫人が別居した後の乃木邸は淋しい日ばかり打ち續いたが、やがて靜子は自身乃木邸に來て、良人にも、姑にも其不心得を詫びたので漸く勘氣も許され再び乃木家の人となつて春風に若芽を吹く思ひを感じた。

かくする中にも明治十八年は來て、隅田堤の花も散り若葉の翠が匂ふ五月二十一日、乃木大佐は少將に昇進して歩兵第十一旅團長に任せられた。

旅團長になつた乃木新少將は、直ぐ熊本に赴いて其處で半年の月日を送る中、十一月三十日に歐州派遣を命ぜられた。

横濱から香港までを七百噸の小汽船で行き、香港から獨逸汽船の大型に乗り換へて歐州への航路に就いた、一行は川上少將の他に伊地知大尉、上野主計官で各國の軍隊の調査、教育状態の視察、新兵器新戦術等の探究なる事を目的としてゐたが、若

い時から苦しめられた少將の痼疾の痔は甚だしく、出血する時にはツボン下、韃足袋さへも、眞紅に染める事もあつたので、若し鄭重な宴席へ列した時、殊に各國皇室に謁見した際の如きは人知れず心痛したものであつた。

豫定の行動に由つて歐洲の軍制状態を見學して二十一年の六月一行は神戸へ歸着したが此洋行に依つて乃木少將の性格は一變し同僚の友人間でも『乃木は洋行をして耶蘇教に爲つた様だ』とさへ噂するに至つた。

歸ると間もなく歐洲へ同行した川上操六は參謀長になり、乃木少將は近江歩兵第二旅團長となつて再び京都に移住した。

長男勝典の後には續いて保典が生まれて乃木邸には喜びの聲が湧き、彼が洋行の留守にも慈愛深い祖母と、生母の手に抱かれ乍らぐんぐんと成育して早や其頃には學校へ行く様になつてゐた。

乃木少將は二人の子供の教育にも絶えず注意を忘れなんだ。

『家と學校の距離は何メートルある』

學校から歸つたばかりの子供に少將はさう言つて尋ねる事があつたが、若し

『判りません』

とでも言つたなら

『直ぐに實測しろ』

と言ふ聲が響くのであつた、亦二人を庭の樹下に立たせて、突然拳銃を空發して膽力を鍊らうとした事もあつた。

明治二十三年には歩兵第五旅團長に任せられた。

東洋の戰雲急となる

乃木少將は洋行の性格一變以來何事にも、より嚴格な態度を保持したので洋行前

とは異つて上下共に人氣なく進級の沙汰にさへも多くは外れ勝ちであつたが、この第五旅團長も後輩であつた桂が中將となり師團長をしてゐる處へ其部下として屬せねばならない運命に逢着したのであつた。彼は早速公行行李三五箇を持つたばかりで、荷物らしい物は何一つ無くて名古屋に着した。

仲之町邊の士族屋敷を借り受けたが蒲團もなければ着換へもない。

『夜具は何うします』

副官は心配してかう尋ねた。

『うむ此中にある』

少將は平然として行李の一つを指した、副官は早速馬丁に開かせる、毛布四枚があるばかりで、褌は洗ひさらした久留米紆の單衣が一枚であつた。『これちや足りなくはありませんか』

『ちつとも足りなくない』

『然し何だか』

副官が小首を傾けるのを見て

『心配するな、これだけあれば何日動員令が下つても、間に合ふからな』

と少將は答へた。

其處へ移つてからは從卒と馬丁ばかりで、母も妻も子も、皆東京へ置いてあつた、その翌年、徴兵検査の視察に乃木旅團長は濱松まで出かけた、すると郡長代理は恭しく其前に頭を下げて言つた。

『此邊には好い宿館がありませんから、氣賀町の素封家氣賀半十郎へ申し附けて置きましたから何うぞ御遠慮なくお泊り下さい』

これを聞くと乃木少將の面色は急に變した。

『乃木はそんな馬鹿ではない』

さう荒々しく言つて驚く郡長代理を顧みもせず足早く過ぎ去つた、そして
『こんな悪い習慣の行はれるのも詰らん奴が好い加減の事をするからだ』
と呟いた。

『金満家なんぞは嫌だから、何處かに好い宿がありさうなものだ』

然し宿館の無いのは事實だつたから遂に、秋葉山の半僧坊へ泊る事にして仕舞つた、半僧坊では光榮と思つて直刻に閑静な一間を開けて待つて居た、やがて乃木旅團長が一室へ通ると、住僧は錦繡のけばくしい袈裟を着て追従のやうな挨拶をした、その上に

『桂中將閣下も毎度お越しになつて御揮毫など戴いて居ります』

と得々と述べたからたまらない、不快の感情は更に度を増して乃木少將は行成立上つた。

『今夜の宿はお断り申す』

と言ひ捨て、出て行つた、副官も不可解な面をしながら續かねばならなかつた。何を思ふたか乃木少將は門前の木賃宿の入口に立つた。

『今晚厄介になりたいたいのだがな』

『へい、何うぞお上り下さいませ、有難うござります』

木賃宿の主人は少將の肩章を見て驚き乍ら身に余る光榮と平伏した。

『さ、上らう』

副官を見てさう言ひ乍ら乃木少將は勝手にズン／＼上つて行つた、亭主は今更待遇の仕方もないので貧乏徳利に樽の木を挿して、便所や床下に石灰を撒いた。

『この方がすつと好いよ』

將軍は大満足の中に湯豆腐と濁酒の盃を傾けた。

翌朝十圓紙幣二枚を置いて乃木少將は木賃宿から出發して行つた。

子供の時から齒痛にも苦しんでゐた乃木希典は、二十四年の夏激しい甚痛に東上

して齒を全部抜いて貰ひ總入齒をして名古屋へ歸つたが翌二十五年二月三日、乃木旅團長は休職となつて後任に大島少將が第五旅團長に任せられた。

何に故に休職になつたか不明ではあるが、桂中將の如き後輩が進んで行く状態を見て心中多少の不平があつたに相違がなかつた。

二十四年の暮、馬上で號令をかけた時總入齒を吐き出して馬の蹄に碎いたので軍人の面目上忍びずと辭表を出したとも言ふが眞偽不明である。

何づれにしても軍職を離れて閑地に就いた事には變りはなく二十五年に静子夫人の伯父が死去したので、其開墾中の那須野の田畑と宅地と馬三頭を一千三百圓で買ひ取つて此處に移住する事になつた。

日本鐵道線、那須野驛を下りて太田原街道を南に十四五丁行くと左に入る路がある、路と言つても平地に小芝の生え茂つて眞黒な土が泥土の様に涅ね返された徑であるがそれを五六丁も東して更に細い村道へ出て四五丁進むと、乃木前旅團長の邸

宅があつた、廣さは六百余坪、北と東に繁茂した森が控へ、南方には小藪が見えて入口には二基の柱が立つてゐる、右手の柱の歪んだ藁屋根の納屋は一半は二頭の農馬を繋いで一半は作男の座敷とされてゐた。

四十坪ばかりの瓦葺の母屋は中央に小さな玄關を持つて右手は土間左手は座敷となり、土間の板敷には五尺四方位の圍爐裡が設けられてある、座敷は床の間が十二疊と次に十疊と八疊六疊別に夫人の寢室炊事場が出来て、裏手には十二坪の土藏の別棟があり、森の中には清冷な泉が湧いて濼々と音を立て、水晶の様に流れてゐる閑地を得た少將一家は此處に生活して或時は村の老人を呼んで無邪氣な話に時を費やし或時は鎌や鍬を提げて、茄子や、南瓜を採いだ。

その頃、内垣政吉といふ信濃生れの老僕を雇ふて、これに野菜を煮かせたり、圍爐裡の側で

『何うちや、お前もやらんか』

と言つて酌をして遣る事もあつた。
 少將は何處にゐても稗飯ばかりを食つてゐたが雇人には米の飯と相當の賃金とを
 與へて親しく勞ふてゐたので村の百姓達は乃木家へ雇はれるのを歡んでゐた。
 勝典も保典も東京から暇には來ては遊んで行つた。
 斯うして乃木少將が悠々自然を友として那須野に日を送つて行く中にも、日清の
 風雲は急になつて、成歡、牙山の合戦に日清大戦争の序幕は切つて落され、八月一
 日には大詔の煥發となつて九月十三日、遂に大本營を廣島に移す事になつた。
 有名な獨眼龍將軍山地元治が第一師團長となると閑地に心ならずも風月に親しん
 で來た乃木少將は第一旅團長として出征する事になつた。
 腕を扼して西の空を眺めてばかりゐた乃木少將にはこれ以上の満足はない、九月
 二十四日出征の命に接し廣島に到着して大本營の軍務に従ふたがこの間にも海軍の
 方は黄海の海戦に勝利を得、大山大將は第二軍司令官として戰鬪序列に達した。

山地中將の統率する第一師團は動員令を受けて全部隊を廣島に集合せしめ、直ぐ
 に第三軍に屬して海軍の援護の元に奉天半島の南岸花園口に上陸を見た。
 二十八日は貔子窩に向ひ師團の前衛となつて前進したが十一月五日は金州方面の
 銃聲を耳にして急進し劉家店にて齋藤支隊長に會し獨力擊攘せん事を決心して、
 其由を師團長に報告すると共に直ちに前進命令を部下に傳へた。
 處が山地中將は敵情と地形偵察の結果正面攻撃の不利を知つたので、乃木少將に
 は歩兵一箇聯隊を授けて師團の左側を掩護させ、破頭山に向はせたが、忽ち交戦し
 て敵を破り、其夜の中に金州に到着した、余りに急な前進に山地師團長さへ乃木隊
 の所在を知り難ねてゐた、これが迅雷耳を掩ふに違なき乃木式の戰鬪であつた。
 斯く午前九時半金州の東南角に達すると直ちに砲撃を始めたので頑強に抵抗し
 た敵も次第に退却して乃木隊の志氣益々振ひ、後着の諸部隊と協力して十一時頃金
 州城高く日章旗を翻したのであつた。

其夜本隊は金州に入城したが、乃木隊は直ぐに命令に由つて和尚島へ進發し、同島海岸砲臺及び大孤山の諸砲臺を攻撃せんとしてゐた。

七日午後二時、各部隊を輕装させて目標とする砲臺兵營目かけて肉薄し銃劔を閃めかして突撃を企てたが其處には敵兵一人もなく寂寞としてゐた。

一同は余りの拍子拔けに打ち笑ひながら一兵も損せず和尚島の三砲臺を占領して仕舞つた、斯くの如く金州大連は第一師團の占むる處となつて有利な上陸地点と攻撃の根據地を得たが之より更に陸海軍全力を協せて略攻すべき旅順の要塞が直ぐ其處に残されてゐた。

日清戦争

第二軍司令部では大山大將以下着々作戰計畫をして諸種の調査の結果、第一師團

と混成第十二師團及び臨時攻城廠で充分である事を確めたから、第二師團の招致を見合せたので乃木少將は西少將の攻撃部隊の右翼となつて前進し、自ら第一聯隊の將卒を以つて二百三高地の西方より南行して鴨湖嘴附近で敵と會ひ、陣を布いて猛烈に敵を砲撃した。

處が此勝敗未だ決せぬ中に『乃木少將は諸隊を率ゐる案子山に來り師團の總攻撃に加ふるべし』と言ふ師團命令を受けたので、仕方がないから野砲兵のみを案子山に急行させ自分も續いて本營に走つたが此中に、鴨湖嘴の戦況は急轉して激戦の結果、歩兵聯隊は旅順の各砲臺を占領して仕舞つたのであつた。従つて案子山の味方と合する事は敵と對峙するためには出來なくなつた。

處へ金州方面から急電が來て敵の來襲を知らせて來た、師團長は亦『乃木少將は第十五聯隊第三大隊及び騎兵半小隊、砲兵一箇中隊を以つて金州守備隊をおびやかす敵を擊攘すべし』と言ふ任務を受けた。

命令亦命令、轉戰亦轉戰、終日の疲勞を物ともせず乃木少將は其夜は水師營に一泊して二十二日、土城子から出發する事に決心した。

一方河野隊長の率ゐる金州守備隊は敵の大集團に逆襲されて非常な苦戦の處へ旅順を占領した報が來たので士氣忽ち振ひ猛烈な戰鬥の結果敵を退かせたので援隊の乃木軍は大した敵も見ずに金州城の守備隊に合する事が出來た。

そして附近の殘兵を追ひ拂ふて金州一帯を確實に占領したが、普蘭店の敵兵が再び金州へ進發したとの報に接したので三十里堡へ駐止する事になつた、時は十一月下旬、大地も凍る滿州の寒氣は日毎夜毎に迫つて紛々たる雪の降る日が多かつた

『これは何かね』

内地からの防寒具を見て居た幕僚に少將はかう問ふた。

『防寒具であります、本日内地から到着を致しました』

温暖さうな綿入れは嫌が上にも、ふくれてゐた。

『非常な寒氣ですから、他の將校へも差し上げますが、先づ旅團長閣下からお召し下さい』

『兵士は何うなつてゐる』

『兵卒の分はまだ着きません』

幕僚はかう言つて顔を上げたが、少將の面は曇つてゐた、

『兵士が着ないものを將校ばかりが着て何うする』

と答へて遂には手にも觸れなんだ、大陸的な寒氣は零度以下となつて血液も氷るかと思はれるばかりとなつて來た頃、山地中將から淺黄縐子に臘虎の皮を着けた物と、純子に白狐の毛皮を着けたとの二枚の外套を送つて來た。

乃木少將は

『好い物を送つて下さつて有難う』

と禮を述べ、中將の厚意を謝したが直に筆を採つて裏へ『山地閣下よりの贈品、

更に患者用に寄附す、乃木希典』と書いて野戦病院へ持つて行つた。

『何う致しますか』

事務員は妙な顔をした。

『私一人温うなつても仕方がないから何うぞ患者用にして下さい』

さうして、彼は遂に防寒具を身に着けななんだ。

乃木軍が普蘭店に迫るべく十三堡里に駐してゐる中に、隱岐中佐の支隊は普蘭店へ着いたが其處にも一敵兵も見ずに占領する事が出来た、五日には將軍は普蘭店の支隊司令に任せられ三官廟に着いて指揮を司る事になつた。

歲月は戰禍の中にも暮れて沍寒の滿州平野にも明治三十八年の新春が來た。

一月一日の朝、部下の將卒と共に遙に東方を拜して、

『天皇陛下萬歲』 『陸海軍萬歲』

と三唱して煮蘇の替はりに冷酒を酌み交して乃木希典少將は此處に四十七歳の年

を迎へたのであつた。

新玉の年立ちかへる大空に、朝日まばゆくさし上る、光りて皇の御稜威なる、唐人も高麗人も、大和心の萌え出て、我が日の本の民草と同じ惠の露に逢ふらん。

陣中に試筆した將軍の長歌はこれであつた。

當時第一軍に屬して居た第三師團は大弧山に上陸して岫巖から海城に進み一旅團を置いて更に前進を續けたので、海城の守護は最も手薄であつた上に、敵は清國軍中の傑物榮慶將軍であり本據を田庄臺に置いて海城の南には無慮四五千の大軍を密集せしめてゐるのみならず北の遼陽には一萬五六千の敵兵が屯して海城を攻撃すべき準備をしてゐるらしいかつた、第三師團の殘部隊は三方の大敵に苦痛の境に置かれてゐるのであつた。

此援助に當る可き重大な任務を受けた乃木旅團長は歩兵第一聯隊と第十五聯隊の二箇聯隊に騎兵砲兵を若干含んで混成旅團として、三日出發、本道の復州街道を北

進して蓋平に向つてゐた。

手足を切れるばかりの寒さに辨當さへ凍り付いて食べる事が出来なくなつて來たが勇氣を鼓して進み熊岳城を過ぎた處へ秋山少佐から報告を受取つた。

『敵は蓋手を死守せんとするものの如し』

乃木旅團の意氣は忽ち昂然となり、九日本隊を蓋州本道に進め、隱岐支隊は間道を取つて動いたが、楡林堡に達した頃から彼此の尖兵は衝突して豆を煎る様な小銃の音と共に戰鬪は開始された。

其日秋山尖兵隊長からの報告では敵の砲力が意外に微弱である事と言ふのであつたから、拂曉戰を演じて天明に大舉肉薄するの得策を知つて各部隊に傳へると共に二箇大隊と砲兵工兵を正面にし、隱岐支隊は右翼へ、河野支隊は左翼へ置いて兵卒は携帶口糧三日分のみを負つた輕装に肅々として總攻撃の時を待つた。

一月十日の午前零時半、降り積もつた昨日の雪の銀白に満月が青白い光りを投げ

てゐる頃、乃木旅團長の號令は響き渡つた。

『總攻撃始め』

傳騎は右に左りに走つて隅々までへも命を知らせた、忽ち本隊支隊は面を觸らず進み出した。

待ち構へてゐた敵は蓋平河の後の掩堡からは巧妙な大砲を射ち出し、河の左右岸に陣を布いてゐた騎兵は猛烈に小銃を射ちかけた。

中央隊は直ぐに應戰して物凄いな音を立て初めた、隱岐支隊も荒涼たる畑の中を前進中鳳凰山の頂から瞰下してゐた敵が攻撃をして來たので忽ち山上目がけて射撃をした。

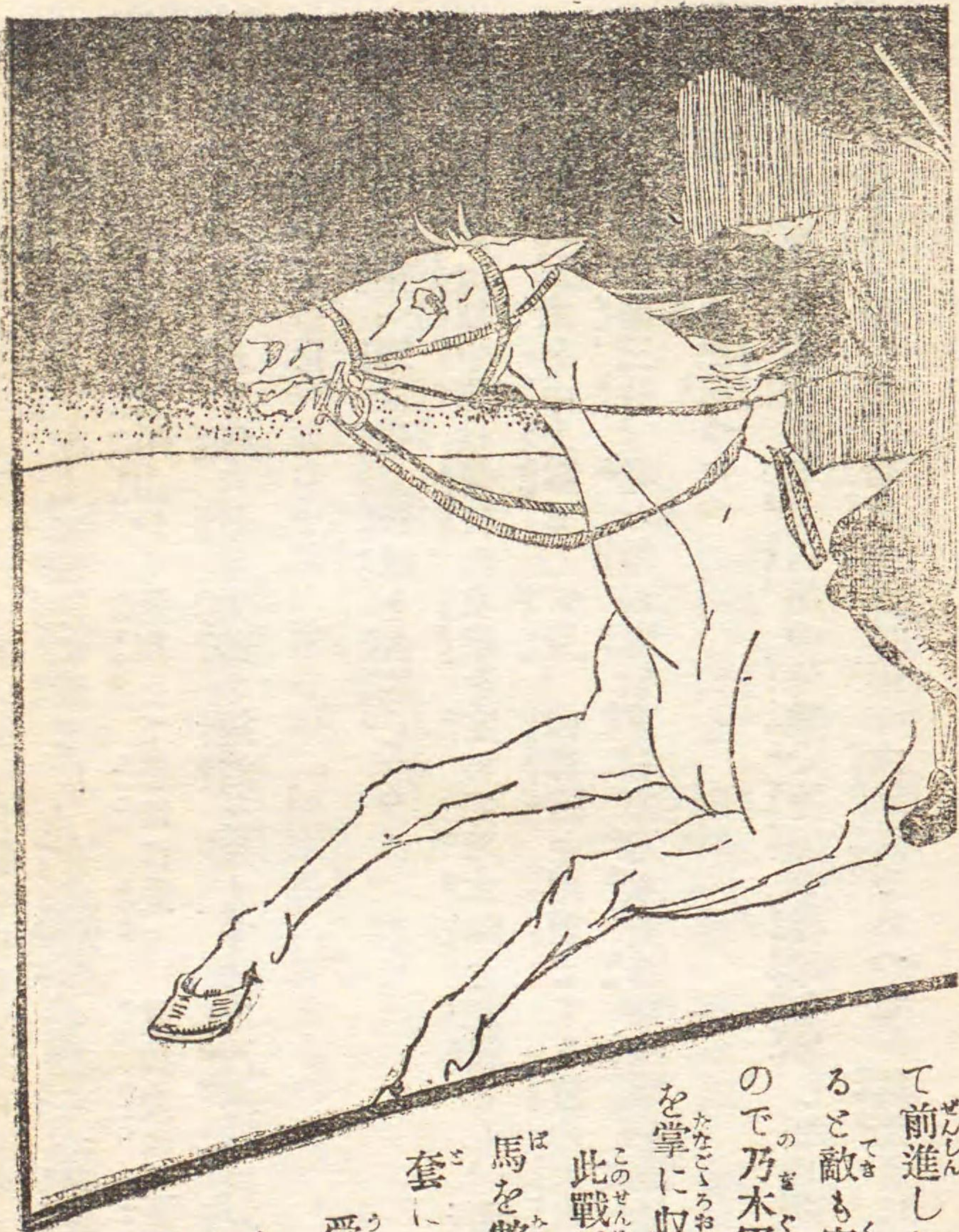
勇敢なる隱岐大佐は竹中大隊長をして蓋平城の敵に對抗せしめ、香川大隊をして其掩護射撃の中に河を渡つて城へ肉薄せしめた。

更に激しい戦ひの後に小川聯隊旗手は二十七尺の蓋平城壁を攀ちて折柄の朝日



に、日章旗を振り立てたので、全軍の士氣は一層奮ひ立つた、隱岐大佐も城中に侵入して敵を南門外へ追ひ拂つたが、急に左翼に出現した優勢な敵は雨の如く中央軍を目がけて射ち出したので忽ち本隊は苦戦に陥つた。

然し直ぐに隱岐支隊の掩護を受けたので本隊は張りつめた蓋平河の氷上を渡つ



て前進した、夜の九時に至ると敵も完全に退却をしたので乃木軍は確實に蓋平城を掌に収めた。

此戦争に乃木少將は乗馬を斃したばかりか外套には三箇まで弾丸を受けてゐた。

十八日には亦大平山に向ひ前進する命令を受けて幾尺の積雪と物資

の不足と、激烈な寒氣に苦しまされながら困難の中に宋家屯に着すると一萬有余の大敵が俄然大平山に襲來した飛報に接した、今は猶豫もならず諸隊を集めて前進を命じたが、敵は遂に大平山から退却して營口に集り、其兵力は三萬余と通報して來た、然かも一日を増す毎に敵の大勢の逼迫を知らすので乃木隊は攻撃防備を嚴にして徐ろに動いてゐた。

斯る間にも第一軍は牛莊城を占領した。

第一師團長山地中將は營口の攻撃を定めて乃木隊を左翼とし、西少將の隊を右翼として清將馬三允を中央隊とし宋慶、徐那道を兩翼とする敵の大軍に迫つた。

二十四日の午前三時、降り頻る雪を冒して乃木支隊は攻撃を開始し、全線これに従つて激しい火蓋を切つた。

砲煙彈雨の中に百雷の響、人馬の叫喚、物凄い戦況を呈したが頑固な敵の抵抗は弱る色も見えなかつた、齋藤少佐は第一大隊長であつたが眞先きに軍刀を振り乍ら

敵壘に肉薄して部下の兵もこれに従ひ彈丸は残らず射盡すまで戦ふた。

乃木少將は直ちに二箇中隊の援隊を送つて正面と背面から射撃させたが、やがて

二箇中隊は突撃を執行した、銃劍の閃き、突喊の聲、敵は直ぐ營口へ逃げ去つた。

然しもう大勢は決して營口の戦ひにも我軍は勝利を得、田莊臺に放火し乍ら

『天皇陛下萬歳』

を絶叫した。

將軍が兩方の耳に凍傷を病んだのは此時であつた。

四月五日には乃木少將は中將に進み第二師團長に補せられたが、日清兩國の休戦

條約成り、五月二十一日、平和條約の批准も終つて日清の戦争は此處に全く終りを

告げた。

乃木中將は軍功に依つて男爵を授けられ、功三級金鷄勳章と恩賜金二萬圓を賜つた。

臺灣へ赴く

滿州の野には砲聲は止み、劔撃の響も聞えなかつたが、臺灣の土匪は屢次蜂起をして、わたので乃木中將は南部臺灣守備隊司令官となつて臺灣へ赴任する事となつた。直ちに臺灣平定の目的を以つて基隆に上陸し、臺南へ進んで土匪を掃除し、二十八年を臺南の守備に暮した。臺灣と言つても當時は道路は全くならず交通機關も少なく、苦熱の上に蚊軍や毒蛇に妨げられて加ふるに獨特のマラリヤ蚊は猛烈な熱を起さしめて幕僚連中を倒すのであつた。

乃木中將は幸にして、健全な身体を保有する事が出来たが、瘴雨蠻風のために流石に頬肉は落ち、鬚髪は白うなつてゐた。

漸く守備を終つて東京へ凱旋すると間もなく第二師團長として仙臺へ行く事にな

つたので仙臺の官民は此凱旋將軍を迎ふる喜びを大歡迎會として表はさうとしたが、中將は、

『生きて還つた者よりは先づ戦死者の靈をお慰め下さい、王事のために斃れた忠勇義烈の士は靈魂をも祀られぬ前に私等が前へ御馳走になる筈はない、招魂祭が終んだ後なら喜んで出席する』

と言つた。

知事は快よく招魂祭を舉行した後に盛大な觀迎會を開催したから中將も莞爾として出席をした。

同年十月米澤附近の演習中に乃木師團長は桂太郎に代つて臺灣總督を命ぜられた、直ぐに渡臺の準備を急ぎ乍ら中將は母の壽子を尋ねた、

『お母様は何うでございます』
暫く無言であつた壽子の唇は漸く動いた。

「斯う年を取つてお前さんの側を離れるのは望みでないが、何處にゐても壽命には變りはないから一緒に臺灣へ行きましよう」

「然し、彼地は陽氣が悪うございます」

「構ひません」

乃木中將は一時は躊躇をしたが強いて同行を望められた上に老年の淋しい心中を推察して共に渡臺する事に決心した。

皇后陛下は乃木一家の出發の前日特に壽子刀自に拜謁仰せ付けられ靜子夫子同道で恭しく參内すると、陛下は御前へ召されて直ちに老体の身が幾百里の波濤を越えて遠く臺灣へ渡航する覺悟を健氣として御嘉賞あらせられた、刀自は難有涙を溢して退出したが、やがて彼女は此光榮を持つて中將夫妻と共に神戸から乗船して臺灣へ赴いたのであつた。

出發の間際にも松方大臣から電報が來た。

「臺灣はベスト流行す出發は延引する方よろしからん」

副官は傍からかう口を添へた。

「一時お見合せになつては何うですか」

然し乃木中將は聽かなんだ。

「不肖總督の職を穢す上は一時も悪疫流行の手當てを急ぐ、場合に依つては家族を殘して單身赴任する覺悟だ」

副官はこの由を大臣へ打電したが押返して總理大臣から、

「強て見合せよ」

と電報が來た時は、中將は既に薩摩丸の人となつてゐる頃であつたが、錨を解く間にこの文面を入手して眺めたけれど、

「いや、斷じて初志を翻へさず」

乃木將軍の決心は嚴として動かない。

『お母様はお残りになつては如何です、職務のために倒れるのは止むを得ませんが、お母様に若しもの事があればいけませんから』

『なに大丈夫だよ、お前さんと一緒に出たからは生死を共にしようぢやないか』

流石乃木希典を子とする壽子の答は健氣であつた。

其月の十六日には基隆に入り十七日には臺北に着して無事總督の官邸に入つた。

官邸には桂前總督時代に新築した日本風の立派な家屋と一つは従來使用して來た

西洋造りの假屋めいた家であつたが、乃木新總督は粗末な洋館に嚴格にして質素な

生活を送つてそして相變らず、産業に農業に工業に商業に教育に、行政に誠實其物の

如き方針で處して行つた、何うかと思つた壽子刀自も、

『仙臺は寒くて困つたが此方は温で大層好い今年は六十九の厄年だが、此調子な

ら無事に過すかも知れませんが』

と歡んでゐたが、流石峻烈な臺灣の風土は此老婆の身を健全にはしなかつた、

軍服の儘誠心誠意を籠めた希典の看護も、木綿の衣服に袴を穿けた忠實温順な静子の介抱も、幾晝夜に亘つたが壽子を襲ふた瘴癘の氣は秋の初め頃から痼疾の腎臟病を併發し、遂に肺も胃して重態に陥つて來た。

總督府では凡ての官吏は代るゝ看病の手助けをしたが、直接看病には將軍夫婦のみが力を盡した。

處がさしも熱誠を籠めた介抱も効を奏せず、明治二十九年十二月二十七日、天は壽子刀自の生命を永遠に奪ふて行つた。

夫に侍して賢、子に對しては温、殊に長府での苦境を鹽煎餅の内職に打ち渡り幾

多の悲酸をなめた壽子は再び、乃木希典の前には歸らない、先に小倉時代には玉木

文之進と別れ、西南役中には父希十郎が逝き、今は唯一人の母を失ふた中將にはも

う此世には親と呼ぶ人もなければ、子ども見て呉れる人を持たなかつた。

幼時を追憶し、苦酸な生活を考へれば考へる程、母に對する感謝の念が胸に溢れ

出て熱い涙の頬を傳ふて流れるのを覺えた、

やがて一流の質素ながら誠心の籠つた葬式を行つて壽子の遺骸を城外三板橋の内共同墓地に葬つた。

翌年の七月、靜子夫人も遂にマリア熱に罹つて臺北赤十字病院へ入院をしたが直ぐに全癒して退院する事が出来た。

然し、流石苦熱の臺灣の風土には女の身では適しさうにもないと東京に置いた勝典、保典の二人を他人の手ばかりには任せて置けないので靜子夫人は赤坂新坂町の自邸に戻つて子供の教育に従事した。

翌年の一月、突如として上京の電命に接し、乃木總督は内地へ歸る事になつたこれは、曾根民政長官の文官式行政法と、武斷と嚴正を固守した將軍との衝突が臺灣治績の進歩を妨げると言ふので總督府改革を政府が思ひ立つたのであつた。

遂に二十六日になると將軍に『依願免本官』の辭令に接し、赤坂の自邸に久し振

りで歸つたが後任としては兒玉源太郎が總督とされた。

閑地に就くと聞いた人達は乃木中將を惜しんで、寧ろ勅選議員にでもしてはと奔走したが、彼は

『予は軍人である』

と言つて其好意を歡ばなかつた。

かくて中將は再び光風霽月を友とする身とはなつた。

一日の事であつた。

『閑地に居て恁様な廣い邸に居る必要はないからこゝを賣り拂つて何處か狭い所へ引き移らうぢやないか』

將軍は突然こんな事を言つた、夫人もこれには閉口して、將軍の友人に意見をして貰ふ事を頼んだ。

『屋敷を賣ると言ふて、全く困つて了ひます』

『宜しい私にお任せなさい、私からお話し致しましょう』

其將軍は領いてやがて乃木將軍との會話は始まつた。

『貴下には貯金がありますか』

乃木將軍は無雜作に答へた。

『いや、何も無い』

『それでは此の屋敷をお賣りなさつてはいけません、これは財産としては第一では

ありませんか』

『財産が無くつては可けないかな』

中將はさう言つて笑つた。

『それよりも何うです、お建てになつては……』

『何、建築する』

『貴下にはこのお邸は廣いかも知れませんが貴下は男爵陸軍中將ですよ、そのお宅

としては余りに狭く、見苦しいではありませんか、新築なさい』

『然し私には金がない』

『貴下が男爵にお爲りの時に、二萬圓の恩賜金があつたではありませんか、そのお

金を何うなされました』

『恩賜金』

將軍は目を張つた。

『そりア有る、彼のまゝで保管してある、宮内省へでもお預けしようと思つてゐる

が、それを建築などへは使ふ事は出来ない』

勧める者は此處ぞと思つて説き立てた。

『お説は御有理ですが恩賜金を其儘にしてお置きなされるよりも一部を割いて御普

請を爲すつては如何です、すると日夜皇恩の厚きに恵まれてゐるも同じではありま

せんか、恩賜金でお住居をお建てになるのは一層深く皇恩を思召す事に當ります』

此の詞に、將軍の心は意外に動いた。

『こりや一理ある早速建築に取り掛らう』

直ちに恩賜金の半額一万圓を以つて麻布に西洋家屋の建築に取り掛つた、今も尙ほ保存されてゐる邸宅は斯うした理由で此時に設置されたものである。

漸く落成して此處に乃木一家が落ち着くと又も第十一師團長に補せられた。

それは三十一年の十月三日、乃木希典中將は亦臺灣總督から官等の低い師團長の任命を受けたのであつた。

第十一師團長

然し乃木新師團長は心中の不平を、軍人が軍職に就いて御奉公申し上げるのに官等の高下などを言々する筈はないといふ言葉に打ち消して、讃岐へ渡り多度津に

宿つて師團司令部へ出勤する事にした、翌日出かけると新築の司令部殊に師團長室の新調の絨氈は質素を旨とする將軍の感情を害せずには居られなかつた。

『副官あれを片づけて貰ひたい』

芦原副官は驚いた、

『これは普通の設備でありまして決して贅澤な物ではありません、殊に靴の音を防ぎますから』

『いや、靴の音は注意次第で何うにもなる、兎も角も引放してしまへ』

もう將軍の言葉は斷乎としてゐた、直ぐに絨氈は除せられる事になつた、尙適當な住居を定めるために中將は金倉寺の客殿を借りて旅館から其處へ移つて來た。

十日ばかり立つと新師團長は管下を巡回する事にし副官一人の隨行員と決めてゐたが、

『書記一人だけを同道せらるゝやう』

この懇請に、將軍は仕方なく、

『では私と君とは乗馬、書記を人力車としては既定の旅費では不足をするから、其不足額は自分から支出しよう』

と頷いて午前九時に金倉寺を出發して宇摩郡の土居村に其夜を過す事になつた。

『何故こんな家に泊るのか』

土地の豪農の玄關に立つた時、師團長は尋ねた。

『此村には宿屋はないらしいございます』

顔を窘めながら中將は第一に厩を檢分したが其は綺麗で馬糧も山の様にあつた。

『好い秣だな、どうしてこんな秣があるのか』

副官は又答へに窮つたがやがで、

『此邊の豪農ですから平生に貯へて居るのでしよう』

とお茶を濁した。

勿論座敷では下へも置かぬ優遇で盃を執れば十七八の美人は馥々とした袂を翻して徳利を傾けるのであつた。

『御令嬢はよくお揃ひだね、御同年位に見受けますが、何方が姉様かな』

『はい、いや、娘ではござりませぬ、他から參つて居る者でござります』

『では御親類のお嬢さんだな』

副官も村長も、主人も冷汗を出して困り果てた、この美人達は將軍を饗應するために特に廣島から呼び寄せたのであつたから。

寢所に敷いた立派な絹蒲團も直ぐに木綿に取りかへさせ、下女が床を取らうとするのさへ、

『いや、其處へ積んで置けば宜しい』

と謝絶したのであつた。

そして翌朝は朝外くから小松町へ馬を進めた。

『菅原君、昨夜の拂ひは何うしたかね』
馬上の中將は副官を顧みて聲をかけた。

『あの家は度々行軍等の本部になるので行軍實費でないを受け取らぬさうです、外に下女へ一圓遣つて來ましたか』

『では茶代は何うした』

『茶代は出して受取りません』

『困るな、昨夕の御馳走は二三十圓は掛つてはゐるだらうにな』

將軍は苦い顔をしたが高松へ歸ると同時に文綺堂の菓子器、硯箱等三十圓程の物を買ひ求めて、彼の豪農へ茶代の代りに發送したのであつた。

やがて小松町に入ると直ぐ馬脚を早めて通過する、歡迎の嫌ひな中將は副官を代理として名刺を出させて禮を言はず様にしてゐた。

その夜は中川村の粗末な宿屋に夢を結んで又、寒い冬の風を浴びながら朝風くか

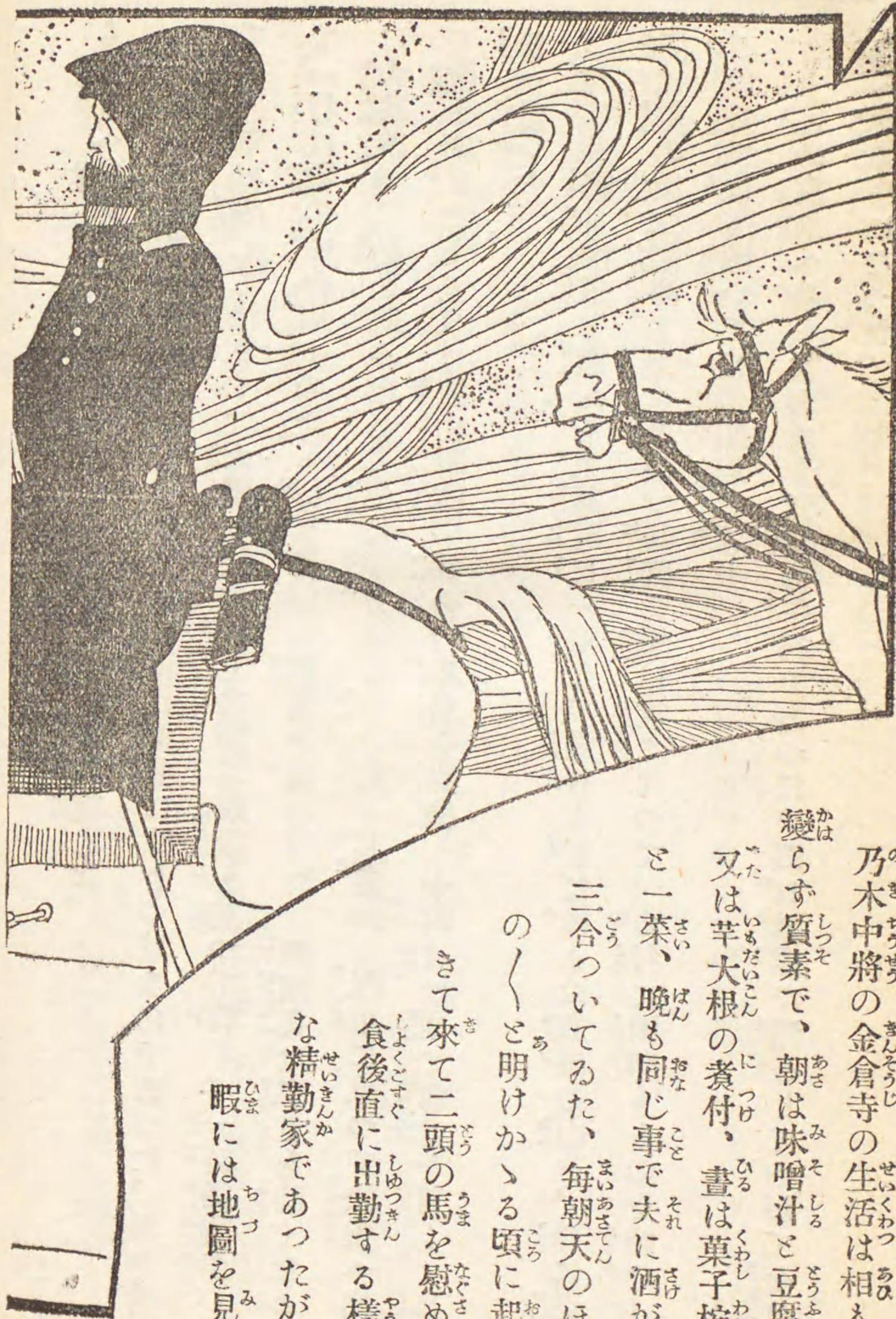
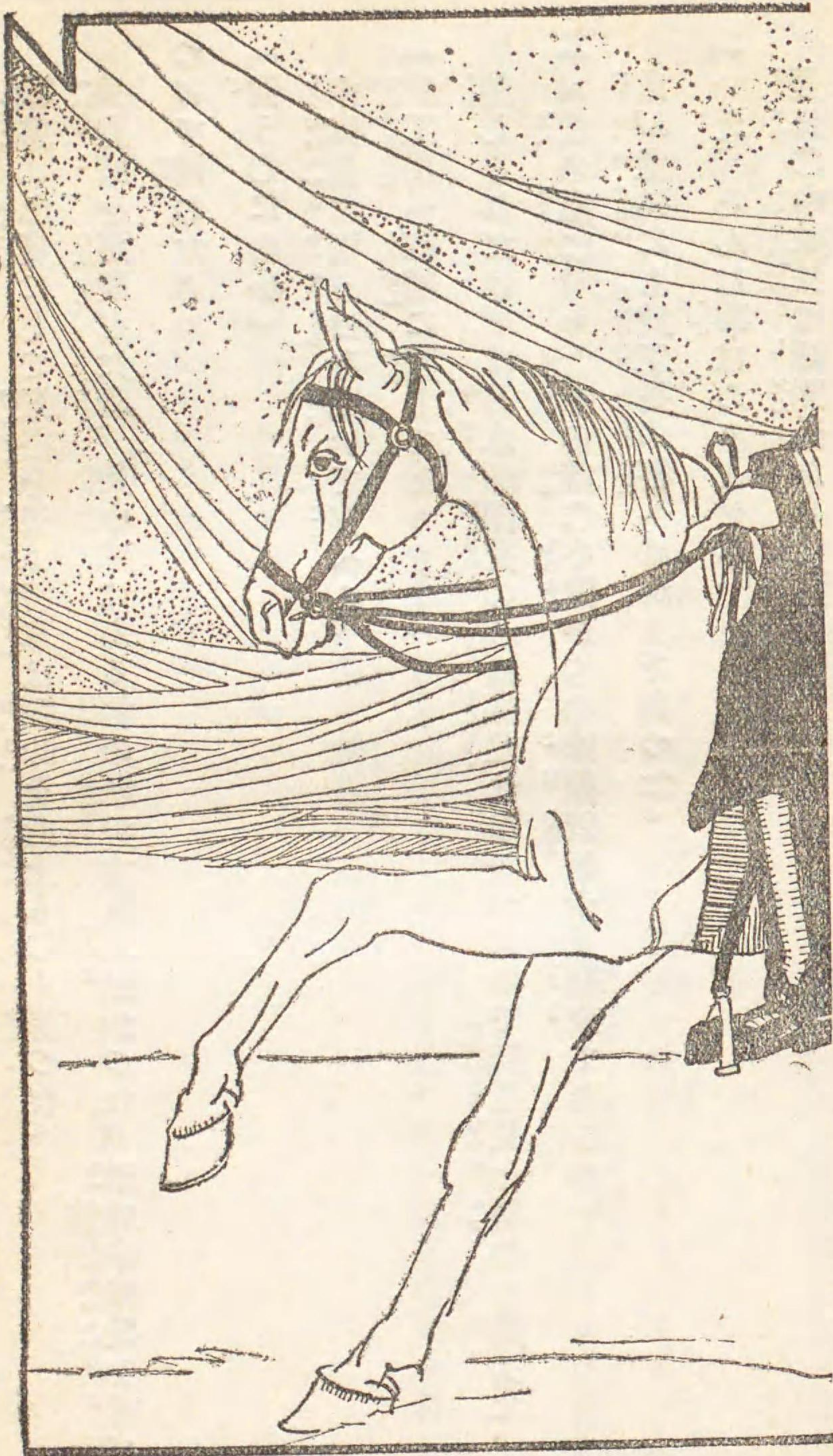
ら平井へ急いだのだが數丁行くと千馬ヶ嶽の麓に達した。

其頃から寒さは次第に増し、霰交りの雨は横様に吹きつけるのであつた、馬を捨て、將軍は少しも怯まず、大聲に詩を吟しながら峻阪を登つて行く、一時間程歩いて一行は雨の中を川上の村へ行き着いて酒屋を見つけた、師團長は寒さを防ぐために大茶碗で二杯を飲みほして更に平井まで歩いた、其處から汽車に乗つて松山へ出て翌十四日と十五日は松山聯隊の兵舎、學科を點檢し十六日は雨と雪とを冒して高松へ赴いた。

其日も終日險道を進んで久萬町に一泊し、翌日も未だ歇まぬ寒雨の中を、殊に泥濘は馬の第二關節までに及び、馬蹄の雪は塊となつて、歩行に困難するのを時々小石や鎌で取り除いては伊野村に來た。

土佐の高知へ着いたのは十九日の午後であつた、四日其處で滞在してやがて金倉寺へ戻る事になつた。

たり、書物を読んだり、時には老僧を相手にザル碁の勝負を争ふ事もあり、月明の



乃木中將の金倉寺の生活は相も
變らず質素で、朝は味噌汁と豆腐
又は芋大根の煮付、晝は菓子椀
と一菜、晩も同じ事で夫に酒が
三合ついてゐた、毎朝天のほ
のくと明けかゝる頃に起
きて来て二頭の馬を慰め
食後直に出勤する様
な精勤家であつたが
暇には地圖を見

夜等には椽側に立つて將軍の口から高い吟聲を聞く時もあった。
職務に忠實にして嚴格を失ふ將軍は曖昧を此上もなく嫌つた。
兵器庫を巡視した時、某中隊にある筈の銃が十五挺無かつた、早速中隊長を呼びつけて尋ねた。

「何うしたのか」

中隊長は漸う口を開いて答へる。

「銃工場へ修繕に廻してあります」

然しそれだけでは乃木師團長の心は満足せなかつたので銃工場を尋ねて問ふた、

「お前の處に、×大隊の第○中隊からの豫備銃が十五挺來てゐるか」

處が意外にも銃工長の答へはかうであつた。

「いえ、そんな事はありません」

翌日○中隊長は師團長から叱責された。

「頼む」

「無論ありません、直ちに申し付けて調べます」

「案内を頼みたいが差支へはなからうか」

「勝手知つた者はいくらもありません」

「飯野山の勝手を知つた兵は居らんか」

く傾けると突然齋藤聯隊長にこんな事を尋ね出した。

その年も暮れて三十二年の一月、將軍は五十一才の春を迎へて一盃の年酒を快よ

に調査したのであつた。

手が心から謝罪するまで責め立てた、來年度の豫算を請求する關係上斯くまで嚴密

に調査をしたのであつた。

「物品も金錢も出納を嚴にしなければならぬのに最も肝要な銃を何故預けたと言ふ

た、武器は疎略にならぬのは言ふ迄もない事ではないか」

其他廢品の軍靴や被服までも詳しく詰問して若し缺點を發見しようものなら、相

手が心から謝罪するまで責め立てた、來年度の豫算を請求する關係上斯くまで嚴密

に調査をしたのであつた。

その年も暮れて三十二年の一月、將軍は五十一才の春を迎へて一盃の年酒を快よ

に調査したのであつた。

く傾けると突然齋藤聯隊長にこんな事を尋ね出した。

「飯野山の勝手を知つた兵は居らんか」

「勝手知つた者はいくらもありません」

「案内を頼みたいが差支へはなからうか」

「無論ありません、直ちに申し付けて調べます」

やがて案内に立つ一兵卒が来た。

『では出かけよう』

將軍は案内兵と共に歩み出した、折柄將軍の僑居へ年賀のために訪はうとする正装の將校が三四名やつて来た。

『よう、何處へ行く』

『閣下の御宅へお訪ひしようと思つてゐます』

『さうか、何うだ、これから飯野山へ登らうと思ふが一所にゆかぬか』

一將校は近く飯野山を見上げると海拔二千二百四十尺の讚岐富士は美しい姿をして行く手に聳え立つてゐた。

『え、お供しましょう』

多分戲言だらうと思つてかう言つて了ふと將軍は又飯野山さして進み出した。

『困つたな』皆は顔を見合はせて従つて行つたが、丁度三四寸も積つた大雪に略服

の師團長は身輕いけれど、正服の將校連は峻しい雪道に困難一通りではない、しかも五十を越した將軍が駈歩で登つて行くのに若い人達が喘ぎながら苦しい顔も出来ぬので、苦痛を忍んで漸く絶頂まで攀ち登る事が出来た。

『ひどい正月に遇つた』

山を下りると若い將校は汗を拭き／＼かう囁いた。

翌日も乃木將軍は象頭山の頂上に新年宴會を開いて駈歩で險路を走せ上つた、そして竹皮包みの握飯に舌鼓を打ち、歸りには竹皮包みを拾つて歸つて行つた。

凡てこれ軍人精神を基とせぬ行動はないと言つて好い位であつた。

或日の事、側近く來た軍醫に乃木師團長は聲をかけた。

『私は軍人として甚だ恥づべき事をした、決して他言は下さるな』
面色普通ならぬのに驚いた軍醫が謹んで答へた。

『はい、決して他言は致しませぬ』

「他ではない、軍人の魂とも言ふべき軍刀に一點の錆を生じたのは、如何にも残念だ」

將軍は聲さへ慄はせて長大息をした。

「兎も角も拜見しましょう」

軍醫は軍刀を抜き放して打ち眺めると、鏢元から一寸ばかりの處に僅か胡麻粒ほどの汗錆が出てゐるのであつて、熟く見ねば判らぬ位の錆であつた。

「御心配には及びません、直ぐに研がしましょう」

「決して乃木の軍刀だとは言はないやうに……」

念を押す様に幾度もさう言つて依頼したのであつた、古武士の心を心とする乃木師團長の言行に軍醫は感嘆せねばならなくなつた。

そして見事に美しく研ぎ作られた刀を手にすると如何にも満足さうな笑を面にかべるのであつた。

妻返しの松

三十二年の一月末日、寒い風が吹き頻る日三十三才の女中風の女と、上品な然し田舎じみた服装の四十余りの奥様らしい者が金倉寺の勝手口から覗いた。

「御免下さい、御免下さい」

住職の松田俊雄は出て來た。

「何誰でございます」

「乃木の家内でございますが」

「あゝ、乃木様、左様でございますか、何うぞお上り下さいませ」

「いえ、甚だ申し兼ねますが、馬丁の谷田をお呼び下さいませでしようか」
「謹み深い静子夫人は良人の許可のない上は面會しようとはせなんだ。」

『はい、承知いたしました』

松田住職がやがて、谷田鎌次郎を呼んで来た。

『お、奥様ではございませんか』

『お、谷田か、誠に何とか私の来た事を言つて、乃木からお許しを貰つては呉れぬか』

『はい、かしこまりました』

將軍の平常を知る馬丁は直ぐに承知して進良老僧の居間へ斯くと告げて將軍の前へ手を支いた。

『奥様がお越しになりました』

乃木師團長の面は見る／＼中に變つて行つた、暫時沈黙の中に鋭い聲が口を發した。

『來いと言はぬのに何故來たのか』

馬丁は縮みさうになつて聞いてゐる。

『直ぐに追ひ返して丁へ、逢ふ事は出来ない』

悄悄として谷田鎌次郎は松田俊雄にさう言つた。

『何うしましょう閣下の御様子が大變です、さりとて折角遠方からお越しになつた奥様へそんな事は申し上げられないし、困つたな』

此度は二人して、老僧へ頼みに行つた。

『當寺が戒律の厳しい眞言宗であるのを斟酌せられた爲かも知れぬか、では私から、よくお頼み申してあげましょう』

老僧は將軍の前に座したがまだ嚴として聞き入れがない。

『良人の許しも受けず任地へ來る法はない、乃木は此方へ遊びに來てゐるのぢやない』

老僧も仕方なく庫裡に退いたが遙々と來られた奥様も追ひ返す事は出来兼ねる。

「何うして在らつしやるか一度御様子を見て来い」

と俊雄に言ふと彼は茶の間から外へ出て塀の端から覗いたが、夫人はヒヨロ／＼した稚松の下に悄然として立つて斜に傾いた日は象頭山の端に入らうとして頂から吹きおろす冬風は雪さへも交へてゐた。

「奥様は斯様風で在らつしやいます、嘸お寒い事でしょう」

驅け戻つた俊雄は老僧に告げた。

「一度言ひ出した事は後へお引きになる閣下でもないし」

馬丁は當惑の顔を面に現はした。

「よろしいでは裏座敷へでもお通し申して澁茶でも献上しよう」

老僧の言葉に俊雄は直ぐに静子夫人に言つた。

「では御厄介になりましょう」

と裏の乾浄房へ通つて行つた、事實を聞いて静子夫人は唇まで持つて行つた茶

碗を下に置いて語つた。

「許可を受けずに參つたのは私が悪うございましたが家政の事に就いても手紙には書けない事もございますので態々尋ねて參つたものでござります」

「奥様のお心は私からよく御傳へ申して置きましょう、切ては今夜は此寺でお泊め申し度う存じますが、閣下の御氣質に背くのも何とかなと思ひますから今日は多度津へお泊りなさいませ、明日芦原様と御相談申してお心の解ける様に致しますから」

老僧がかう言ふ處へ、馬丁は中將の口上を齎せて来た。

「御立腹は一通りではありません、速かに歸れ、多度津へ行つても花菱屋へは泊るな、乃公のよく泊る處だからとの御言葉です、折角お入來になつてこんな残念な事はありません」

「ごうも止むを得ませんからそれでは多度津で多組屋へお泊りなさいまし、必ずお取はからひ申します」

老僧も悲しさうに口を添へた。

やがて静子夫人と下女の二人は夕陽を浴びて粉雪の中に金倉寺を去つて行つた。直ぐに老僧は菅原副官を呼んで此一伍一什を物語つた。

『私に最初から御相談があつたら、こんな事はさせませんが』

副官はさう言つて老僧と二人で將軍に静子夫人のため執成をした、流石頭固な將軍の心も變るゝの詫言に其心盡しも無に出來ず遂に、

『では明日の朝、逢ひます』

と言ふ様になつた。

直ぐ翌朝、鎌次郎の案内で静子夫人は將軍の居間へ通された、然し將軍は、

『唐突に來ちや可かん』

と言つて強いて叱言は言はなんだ。

さうして其晩から静子夫人の手料理が膳部に上る様になつた。

金倉寺の中門外にヒヨロ／＼とした一株の稚松を今も土地の人は『乃木大將妻返しの松』と呼んでゐる。

かくて金倉寺へ宿泊する事が出來た静子夫人は、將軍の小豆島へ芝習に行つた間に命に依つて東京へ歸つて行つた。

再び乃木將軍の單獨生活が続いたが、やがて又前の訪問よりも更に深い悲嘆を見る日が近づいて來たのであつた。

臺灣總督時代から傳つた將軍のマラリヤ熱はその年の春から夏へかけて激烈になつて來た、四十一度の高熱が三日三晩も連續して主治醫さへ頭を傾けて一時危篤の報を傳へられた。

やはり金倉寺の客殿に横臥した將軍は森江福松と呼ぶ巡查と、衛戍病院の村上看護卒とが介抱して病室へは嚴重に人の出入りを禁じてゐた。

『熱がありますからお着換へになつては何うです』

こんな大病中にも未だ軍服を着けてゐるので醫師達がさう勸めても只諾々と返事するばかりであつた、そして好きな詩吟を病床に白手拭で鉢巻をしてやる事もあつた然し、この時ばかりは中將も全快は覺束ないと思つたか、

「大分お苦しいやうですね」

と副官が尋ねたのに、

「若し私が死んだら齒でも髪でも何でも好い、臺灣の母の墓へ埋めて呉れ」と言つた。

將軍の大病が東京へ聞えると静子夫人は長男勝典を伴れて見舞に來た。

「奥様、閣下が大變です、四十一度のお熱です」

馬丁の谷田鎌次郎は夫人の面を覗いた。

「少しはましかな」

勝典も脇から氣を揉んだ。

「まだお宜しくはありません、お二方お着きの事を閣下へ申し上げて参りませう」

「お前は病室へ行かれるのか」

勝典は尋ねた。

「いえ、病室へお入りになるのは二人の看護人と副官の方ばかりです」

「では何うして執次ぐのだ」

「お氣に入りの森江さんに願ひます」

と鎌次郎は言ひ捨て、奥へ去つたが程もなく悄然として出て來た。

「何うかね、直ぐに行つても好いかな」

「はい、若様へはお逢ひになります、奥様にはお許しがございません」

「お母様に、對面しないと被仰るのか」

「種々お執成を願つたのですか何うしても駄目です」

「そいつア困つたなア」

静子夫人は無言の儘で聞いてゐた。

「奥様の方は亦葺原様にお願ひ申しますが先づ若様だけ行らつしやいませ」
かう言はれて勝典は母の失望と心淋しさを残して赴く事は何うしても出来なかつた。

「お母様何うしませう」

「私の事は何うでも好い、お前は早くお目に掛つて來らつしやい」

平生とは異つた病氣に汽車の走るのをさへ焦立しく思つて馳け付けた氣も根元から挫けて、流石彼女の眼は涙に濕んでみえた。

「では行つて來ます」

勝典は病室へ急いで、白毛布の上に熱氣に責められてゐる父の顔を覗き込んだ。

「お父様、只今着きました、お母様も一所です」
病に窶れた顔は此時軽く頷いた。

家事の状態も、病氣の容体も言はぬ父は沈黙の中に一時間を過した、漸くにして、
「彼方へ行つて逗留せよ」

と言つた、勝典は再び母の前へ歸つて來た。

「御容体はお悪いやうかね」

心配さうに母の眼は勝典を見上げた。

「私には判りません、一度醫者に聞いて見ましよう」

「私行つちや可けないのか知ら」

「夫を聞かうとは思つたのですが又叱られては可けないと思つたので黙つてゐました」

それから暫して一時門前の餃西館まで引取つた。

良人の九死一生と聞いて馳せ付けた甲斐もなく對面も許されぬ静子夫人は目と鼻の間に居ながら聲をさへ聞かれずに旅館の一室に蔭乍ら神佛を念じてゐたのである、

周圍の人心の看護と静子夫人、勝典の誠心に依つて、それから次第に快方へ向つて發熱は丁度薄紙を剝ぐ様に減じて行つた。

多度津まで来て面會し得ぬ夫人は、それから一週間の後に病氣の全癒に向ふのを知つて歸京して仕舞つた。

そして梅雨が晴れて麥浪天に連る頃、乃木師團長の病氣は完全に平癒したのであつた。

愈々日露遂に干戈を交へる

健全な身体に回復すると、乃木將軍の師團司令部への出勤は雨が降つても風が吹いても行はれた。

相變らず職務には忠實に、部下には親切に檢閲等には例の如く戰鬥を基礎として

嚴格に處理して行つた、突然一月一日に非常呼集をやつたりして軍人としての本分を忘れたのだが、除夜の酒に靈魂まで酔ひつぶれた人達は周章狼狽、中にも名望ある某將校は不正な遊びに點呼の期を過したので遂に犠牲として休職を命ぜらるゝに至つた。

かくの如く凡てに嚴然とした將軍も子供には懐かしめられてゐた。

或日師團へ出勤の途中に五六才の子供がお辭儀をする、ニコ／＼と笑つて手を舉げて答へてゐたが、急に一人の子供が途の中央に兩手をひろげて『通せんぼ』をやつた、そして

『師團長さん、禮をして下さい、それでないとお通しません』

と言ふのであつた、將軍は直ぐ

『よし、よし』

と言つて笑ひ乍ら通つて行つた。

怒れば龍虎も恐れしめ、笑へば子女も懐しむとは蓋し將軍のために出来た形容詞の如きであらう。

此中にも三十三年六月十八日が来て丸龜聯隊からは第三大隊が派遣されたが翌年の春には北清事變が止んで分捕問題で喧しくなつてゐて丸龜から出征した杉浦少佐の嫌疑は次第に濃厚になつて行つた、同時に將軍の心は忽ち暗くなつて行つた。

『部下が忌はしい嫌疑を受くるに至つたのは、自分の不徳の致す處であるから責を引いて辭職するのが至當である』

どの言葉が、やがて乃木師團長の口から漏れ、直ちに表面は『リウマチスに付き起居自由ならず』との理由で辭表を提出して仕舞つた。

容易に聽許の沙汰がなかつたが五月二十三日になつて依願免職となつた。

そして寺へ『御疊修理料金』として二十五圓を寄進し、暫時丹波方面を旅行して東京の邸へ又々久し振りに歸着したのであつた。

東京での生活は時折那須野へ赴いて耕作するのと兩子息の成長を見るのと、讀書亦是戰死者の墓標を書くのが何よりの仕事であつた。

かくして好々爺としての生活が三年間質素の中に暮らされて行つたが、戰雲漲つた東洋の空に俄然滿州撤兵問題から日露兩國は遂に干戈を交ふるに至つたのである。二月五日、動員令が降下して日本全國津々浦々は鼎の湧くが如く騒ぎ立つた。

雪降ればかれ木も花の咲くものを

埋れ木のみぞ憐れなりける

閑雲野鶴を友として、かく自分を埋木と比らべた乃木將軍にも、留守近衛師團長に補せられる花咲く春がやつて來た。

直ちに第一師團歩兵聯隊附だつた乃木勝典中尉は奥大將の率ゐる第二軍に編成されて、櫻花さへ咲き誇る四月十六日、東京を出發する事になつた。

『勝典も、いよく出征する事になりました』

軍人としての名譽此上もないと静子夫人を始め下女馬丁に至るまで手柄顔に浮々としてゐた。

『お願ひがございませうが、お聞き下さるでございませうか』

静子夫人は將軍の前に手を支いた。

『何か』

地圖ばかり見てゐた將軍は夫人の顔を見て言つた。

『勝典も明日は出征致すさうにございませう、保典も歸りましたら、今夜は親子四人でお食事を快く認めたらう存じますが、御都合は如何でございませう』

『うむ、よからう』

將軍はかう言つて亦満州の地圖に見入つた。

暫して食堂に訣別の酒宴が開かれた。

『勝典も出征の上は生死は不明でございませう故、何卒今夜だけは笑ひ顔をしてやつ

て下さいませ、すればあの子も何んなに喜ぶか知れません』

家庭では笑ひ顔を見せた事のない將軍に夫人は我子のためにかう頼んだ。

『いや、笑つちや可かん、確乎しろ』

將軍はかう言つて洋盃の酒をぐつと呑んで其夜の酒宴は嚴格の中に終つて仕舞つた。

間もなく留守近衛師團長を免せられ、五月二日愈々第三軍司令官に任せられた、續いて次男の保典も留守第一師團第一聯隊附の少尉で出征する事になり、乃木一家は悉く御國のために戦線に立つ事になった。

家を出る時に、

『三人が戦争に行くのだから誰が先に死ぬかも知れんが、假ひ死ぬにしても葬式は一個出さずに三人揃うてから棺桶を出して呉れ』

どの言葉を殘して二十七日東京を發し二十九日に廣島の吉川旅館へ泊る事になつ

た、その時には南山大捷の號外が田舎へまでも、くばられてゐた。
其翌夜、うとくと夢路に入つてゐると誰か耳元に呼び覺す様に感じて額口からは油汗が浸潤り出たが、果して入り違ひに南山から乃木勝典戦死の電報が配達されて來た。

勝典中尉は將軍が東京出發前日に傷いて金州野戦病院に死亡したのであつたが、骨肉の情は父よりも熱く靈魂は遙かに父の許に飛んで名譽の戦死を報告したのであつたらう。

六月一日御用船第一八幡丸に乗つて宇品を出航し六日鹽大漁に上陸、七日には金州に一泊した。

噫思ひ出多い金州城、嘗つて日清の役には苦戦奮闘して占領した土地へ自分再び來たのであつた、軍旗を喪失して以來死を以つて皇恩に報せんとしながら幸か不幸か未だ恥多い老体を生き長らへてゐるのである、此處に残る彈丸の痕彼處に見ゆ

る爆發の穴、山河草木一として物凄戦禍の跡ならざるはないが、死すべき自分はまだ倒れない、勝典のみか、自分よりも落度のない人達が多く血を流したではないか



それに軍旗を失ふた自分は……愛馬の上に沈思しながら、夕陽を浴びて丘上に立てば戦場を吹く風は荒涼として將軍の面をかすめて行つた。

山川草木轉荒涼 十里風腥新戰場

征馬不前人不語 金州城外立斜陽

この詩はその日作られたのであつた。

翌日は南山の新戰場を視察し、新らしく立てられた息子勝典の基標の前に淋しく立つた。

折柄一將校が將軍の前へ進んで悲しい物語をした。

『私は御令息の御最後までお側に居た一人です、今にも黒い死の影が襲つて來やうとする時御令息は枕頭にあつた一刀をお取りになつて命は些とも惜しくはないが、父から授けられた此軍刀で一人の敵も切らずに死ぬのが残念だ、と被仰つて、それを戦友へお渡しになると共に、御瞑目なさいました立派な御最期でございました』

將軍は、

『うむ、さうか』

と言つた儘で戦死の状態を問ふ事さへしなかつた。

其夜は南山の麓、劉花店に泊つて翌八日は、旅順の方面へ進み、北泡子街と言ふ見る影もない寒村に臨時司令部を置いた。

銀髭鶴驅の將軍は庭前に立つ梨の木の下に石の卓上に凭りかゝりながら幕僚と共に軍議を凝らし、暇さへあれば第一師團第十一師團の屯してゐる方面へ視察に出かけてゐた。

六月二十六日、第十一師團は遂に前進を開始して高丘の露軍と猛烈な激戦をやつた後此地を占領する事が出来た。

翌日乃木司令官は其山を視察したが絶頂から見ると、旅順砲臺が手に取る如く見え、恰も四國の劔山に似てゐるので『劔山』と呼ぶ事に命じた、處が其月も過ぎて

苦熱漸く増す、七月三日夜、露軍は早くも奪ひ返さんと決死的夜襲を敢行して来た、忽ち白兵戦が演出されたが流石の敵も忠勇の我軍には抗し得ず退却の止むなきに至つた、然し此戦に於ける我軍の死傷者は決して少い數ではなかつた。満州の夏が來ると暑熱は極度の激しさを加へて我軍は内には蠅、南京虫に攻められ、外には露軍の精銳を敵としてゐた。

越えて七月二十六日、旅順と大連との中央にある榮城子、凹字形山、鞍子嶺、大白山の攻撃にかつた、中央は第九師團と後備第一師團、左翼は第十一師團、右翼第一師團に後方豫備隊には後備第四旅團を以つて連續二晝夜に亘る大戦闘、乃木司令官は姜家屯の附近の小丘から月を浴び乍ら望遠鏡を手にしてゐた、大陸的氣候は夜に入ると掌を反す様に冷かに戒衣の袖を襲ふて陰曆十五夜の満月は眺める限りを白銀の世界としてゐた、遠くに劔戟の閃きと豆を煎る銃聲を覺えた。
『今夜の兵は悉く元氣だ』

と將軍は嬉しさに言つたが、これが愈々攻城戦の序幕であり、第三軍苦戦の最初であつた。

旅順要塞の攻圍戦

七月二十八日の朝、漸く敵を撃退して二十九日は部隊の整理を行ひ三十日と言ふに前進を命じて、右縦隊は旅須街道以西より、中央縦隊は干大山に左縦隊は、土城子南方高地より、大孤山高地を占領して此處に旅順要塞の攻圍戦を作つた。畏れ多くも、天皇陛下から第三軍に優渥なる勅語を賜はつたのは此時で、総軍の士氣は益々振ひ立つに至つた。

將軍の二男保典少尉は此時歩兵第十五聯隊の中隊長として出征してゐたが、第一師團長の松村少將は乃木中將の心事をよく知つて若し保典少尉を聯隊附にして置い

ては必ず戦死するに違ひがない、勝典既に戦死した上は何とかして助けねばと比較的
 的安全な地位に置かうとして少尉を衛兵長の後任に撰んだが『戦闘部隊を離れるの
 は厭だ』と言ひ將軍も『實戦を経へ居ない者を衛兵長の重任に置く法はない』と語
 り松村少將には『やはり小隊長として戦線の真先に使つて呉れ、多くの部下を亡
 した今日、我子ばかりを敵弾に遠い職務に置くのは好ましからぬ』と言ひ遣つたが
 伏見宮殿下の思召しで保典少尉は遂に小隊長として活躍する事が出来なんだ。

此間にも海軍は鮮生角附近で敵艦を撃破して大活動をして居つた。

第三軍は七日から大孤山の総攻撃を開始して翌日之を占領し九日には小孤山を攻
 めてこれも確實に手に入れ、十四日は、干大山から北東溝及び隋家屯に互る線を攻
 略して十五日は又小東溝高地を陥入れた。

十九日に至つて攻圍戦を始めようと言ふので、乃木將軍は軍司令官の資格を以つ
 て敵將ステツセルへ降伏勧告の使者を送り獨逸皇帝が包圍内の自國非戦闘員に下せ

る勅旨を傳へしめたが、頑強な敵は『降伏勧告を拒絶』する旨を返答したので、
 さらばと言ふので十九日には第一回總攻撃の開始を見た。
 敵味方から打ち合ふ二百門以上の大砲は天地も震撼するばかりの物凄さで壯烈警
 ふる物がない位であつたが相變らず乃木司令官は高山に立つて指揮をして居つた、
 砲煙白く立ち塞る中に閃電とも見える小隊長の指揮刀を眺めると將軍は思はず聲
 を擧げた。

『えらい、えらい』

やがて砲撃の轟きが激しくなると、物凄い叫喚を擧げて歩兵が突撃をし出した、
 残月淡く照らす曉の風に吹かれて將軍は尙幕僚と共に立つてゐたが敵から投げる
 サーチライトは眞晝の如く四邊を照らし、ゴーと音を立て、天空を過ぎる彈丸は何
 物をも粉碎せねば置かぬ様に見えた

『恰で汽車が通つてゐるやうぢやのう』